87-33
12005013306 37

東邦協會々頭伯爵副島種臣君題辭
文科大學長文學博士井上哲次郎君序
高等師範學校教授那珂通世君序
慶應義塾々長鎌田榮吉君序

田中萃一郎君著

東邦近世史

上卷

東邦協會發行

東邦近世史序

史學は人類の自覺心を喚起し、又過去の事實に鑑みて將來を戒むる所以なり。是を以て其東洋と西洋との別を問はず、學者の均しく研究を要する所なり。今や我邦に於ける西洋の學、漸く盛況を呈すと雖も、西洋史の研究の如きは、尙ほ甚だ幼稚なるが如し。西洋史の研究、豈に大に奬勵せずして可ならんや。然れども西洋史に關する西洋人の史籍は、頗る整備せるものありて、之れを研究することと比較的に容易なりとす。之れに反して東洋史の研究は困難中の困難なるものなり。是れ東洋史に關しては整備せる史籍の極めて僅少なるが爲めなり。若し東洋一般に關する歷史の佳なるものを求めば、恐くば一部も得ることと能はざらん。然る

に東洋古代の事實は、我邦人の來歷上に幾多の光明を與へ、其れをして自覺心を得せしむるもの、往々之れあり。又東洋最近の事變は、我邦人に取りて、殷鑑となるもの少しとせざるが故に、平素深く此に注目し、牖戸を綢繆するの念慮なかる可らず。果して然らば東洋史の研究、亦豈に忽諸に付すべけんや。輓近に迨んで東洋史を專攻する篤志の士、二三之れなしとせず。是れ實に喜ぶべき徵候なりとす。抑、東洋史の研究に缺くべからざるは、支那の史料を利用すること是れなり。此事たる西洋の學者に取りては、至難の事業たらざるを得ざるが故に、我邦人自ら進んで、東洋史の研究を遂げ、以て學界の缺陷を補ふの任に當らざるべからざるなり。果して然らば東洋史の研究、豈に啻に我邦人に裨益すといふのみならんや。頃ろ田中萃一郎君偶、余が寓居を訪ひ、其著東邦近世史を示して曰く、請ふ爲めに序を作れと。余其內容如何を見るに、支那、印度、安南、緬甸等より南洋諸島の歷史に至るまで、略之れを叙述して其要領を得たり。世の東洋史を研究せんと欲するもの、先づ此書を讀まば、其梗概を一瞥するを得ん。果して然らば是れ亦得やすからざる學界の賜と謂ふ可し。故に余喜んで之れが序を作る。然れども余は君の今後益力を此種の研究に用ひ、他日更に之れより大なる東洋史を著はされんことを切望して已まざるなり。

明治三十三年四月中澣

井上哲次郎識

東邦近世史序

嗚呼東史之不講也久矣。清人不講清史。韓人不講韓史。自其祖艱難創業。迨中葉德衰。紀綱不振。遂致外患頻至。受制强隣。其盛衰之機。治亂之由。皆非出於偶然。而二國之人。茫乎不察。偶有治史者。亦不過耽讀古史。如近時情勢。都不理會。故其於救弊除害之術。莫知所施。至於歐洲文物之所以興隆。西化之所以東漸。新舊列國勢力之消長。東西學藝之同異優劣。則經世家之所當研究。而二國之人。無所通曉。一旦事敗。逡巡避艱。動欲摸稜了局。是安可望其能自振作而大有爲哉。古人曰知彼知己。百戰不殆。清韓人不唯不知彼。亦實不知己。其疎於經綸之術。不足怪也。我邦人之篤於史學。固非清韓人輩可得比擬。明治中興之業。不出數年。得革七百餘年武門擅權之積弊。實由邦人有自

知之明深察於王霸之辨不可謂非史學之功也然至東洋諸國之史則邦人亦未暇精究每聞大陸有變恰如觀對岸之火災未能知其因何能察其果乎晏然袖手而傍觀者蓋數年矣及征清役起邦人始注眼西隣然平時未嘗講究大陸之史國勢民情不能知悉則經略之術自不得不拙蓋嘗干預朝鮮政機矣而功不成也臺灣既歸我版圖矣而治蹟久不舉也蘇杭巴郢爲我開市矣而邦人往執利權者莫有也且夫十八行省地多遺利山饒鑛物自紡織工藝以至鑄冶採炭之業竢於邦人之誘掖導訓者甚多然而顧視我經世家未聞有奮入彼地提醒漢民奬其文化以伸我義以利我國者也若肅愼氏東境及交趾眞臘扶南身毒故地則既受西人羈制或列爲郡縣非他國可得經略然至於懋遷化居之業則非無邦人所可用力也乃却驚漢民敏於圖利瞠若於後漢民猶不可及焉能與西商抗衡哉蝸牛縮首於介殼不憂風雨謂之樂天安命則可欲以先覺者自居則不可邦人豈無慕利戀權之心哉邦人之所大欲常在雄飛於東洋也然而每事遭外人之先制不能振起此其故何也彼能通於東洋之事情而我却不通也赫赫皇國屹立於東洋數千年矣今則不能自任東洋之安危可慨也哉東邦協會蓋有見於此夙以東洋經略之業自任首擇地誌歷史關於大陸者刊行於世亦欲以誘邦人使通於東洋事情也我友田中金嶺頃著東邦近世史東邦協會請發刊之蓋有深合於協會之見也嗚呼東史不可不講其近世史最不可不講邦人既能知己使之亦能知彼則其所成就豈止於今日哉然則若此書者志於經世者所當深研究也

明治三十三年六月　盛岡　那珂通世識

東邦近世史序

龍動の大英博物館に保存せる古記錄中なる、葡萄牙領事の報告書に、葡商某、猩々緋の毛氈を齎らして瓜哇に到りしも、能く之を購ふものなく、遂に日本長崎に於て、紀伊殿の買ふ所となれりとあり。紀伊殿とは即ち紀州家の祖大納言頼宣卿、猩々緋の毛氈は同家累代重寶の一にして、其光彩今なほ燃ゆるが如しと云ふ。西人古來通信に勉め、記錄の保存を重んずる事斯の如し。加之、歴史博物館なるものありて、歴世各種の物品を陳列し、古今人事の變遷、衣服制度の沿革を知るの便に供す。宜べなり、彼の國脩史の業盛に行はれ、材料の豐富にして事實の正確なるや。今回社友田中萃一郎君東邦近世史の著あり、ヴスコ、ダ、ガマ喜望峰廻航に端を

發らさ、日本嘉永の開港前に筆を擱く。記事明晰、行文流暢、四百年以降西文東漸の消息をして、髣髴、目睫の間に往來せしむるもの、素より君の才學に期する所なりしも、其材料の豐富、事實の正確なるは、記錄に乏しく史料の備はらざる我國狀に顧みて、大に君が涉獵の勞を想はざるを得ざるなり。聊か所感を記して序文となす。

明治三十三年四月

慶應義塾に於て

鎌田榮吉識

自序

撰者が初めて東邦近世の歷史を研究せんと志しゝは今より八九年前未だ慶應義塾在學中の事なりき。大學部卒業の後圖らず俗務に從事せるを以て所志を果すの好機會なく荏苒歲月を經過しゝが明治二十七八年の戰役以來益〻其必要を感じゝを以て遂に閑を偷みて之に着手せり。而して當初研究の主題となしゝは日本開國以來の東洋史にありしも結果を熟知せむと欲せば原因に溯らざる可らず英國の史家フリーメンが援ける近世史はアブラハムの神召に起るてふバロン、ブンゼンの說を思ひ合せ遂に西紀一四九八年ヴスコ、ダガマの印度航路發見を以て研究の起程點となせり。但し必要上其以前に溯りしものも亦少か

らず。然るに資料を得る頗る難く爲に參謀本部の編纂物を引用せる事最も多く帝國圖書館并に慶應義塾書館の藏書によりて漸く研究を繼續するを得たり。かくてノート稍〻多きを加へしを以て其日本開國以前即ち近古紀に係るものを整理して上卷となす蓋し其以後の最近世紀と相待ちて東邦近世史を完成すべく其期は西紀第十九世紀の終末なるべし。但し事實の連絡上精密に時期の區分に從はずして下卷に讓りしものもあり。一方に於ては西隣の老帝國が世界列强爭鬪の地たる事亞弗利加大陸の如くならむとするを見他の一方に於ては東隣の大共和國が開國以來其傳來せる一種の鎖國政策を維持せざるを見ばヴスコ、ダ、ガマ印度航路發見以來羅馬――チユートン民族東漸の事蹟即ち世界史の東洋に於ける開展の顚末を知るは最も今日の時勢に於て必要なるものあらむ。撰者の目的は即ち其大要を本邦一般人士に紹介せんとするにあり。而も撰者もと史才と史筆とを具備せず手腕志望と相一致する能はず主題の一致なくんば科學的に歷史の研究をなす能はずてふドクトル、リース先生の講義を回想する毎に本書に對して獨り憮然たり。

明治三十二年三月七日

撰者識

東邦近世史上卷

目次

緒言……一
第一章　歐人通商の初期(羅甸民族)(西紀一四九八——西紀一五九五)……五
第一節　ワスコ、ダ、ガマの印度航路發見……五
第二節　印度總督ダルマエダ幷にダルボケルケ……九
第三節　ダルボケルケの後任者……一六
第四節　亞珍(アチーン)王國と葡人との關係……二一
第五節　葡人の支那通商……二四
第六節　西班牙人の比律賓(フィリッピン)列島占領……二七
第七節　日本と葡西兩國人……三五
第八節　耶蘇會其他の布教事業(西紀一五四二—西紀一七三六)……三七

第二章　滿洲の興起并に其支那統一（西紀一五八三―西紀一六九七）……四八
第一節　清室の興起并に其滿洲の兼併……四八
滿洲開國宗室略系……五四
第二節　明の關外の占領……五五
第三節　北京の陷落并に福王唐王の割據……六四
第四節　桂王の割據……七〇
第五節　三藩の叛亂……七七
第六節　臺灣の平定……八三
第七節　蒙古の經略……八八
第八節　準噶爾（ジュンガル）部の征服……九三
第九節　朝鮮との關係……九九
第三章　歐人通商の第二期（主としてチュートン民族）（西紀五一九五―西紀一七〇八）……一〇四
第一節　和蘭東印度會社の設立……一〇四
第二節　バタヴィア市の建設……一一〇
第三節　臺灣の占領并に支那通商……一一三
第四節　蘭人の日本貿易……一一八
第五節　蘭人と爪哇帝國との關係……一二一
第六節　英人の通商……一二七
第七節　其他列國の東印度會社……一三三
第四章　露國東方侵略の初期（西紀一五八一―西紀一七三二）……一三九
第一節　エルマーク以前露國と西伯利との關係……一三九
第二節　哈薩克（カザック）人エルマークの西伯利府侵略……一四二
第三節　露國の西伯利略取……一四八
第四節　露清の衝突……一五七
第五節　尼布楚（ネルチンスク）條約……一六四

第六節　恰克圖條約……一七〇
第七節　中亞細亞侵略の初期……一七五
第五章　莫臥兒帝國の勃興幷に其瓦解（西紀一五二六——西紀一七四八）……一八〇
第一節　回教徒の印度侵入……一八〇
第二節　莫臥兒帝國の起源……一八五
第三節　アクバル大帝の治世……一八八
第四節　ジェハンジル帝シアヽジェハン帝の治世……一九三
第五節　オーラングジーブ帝の治世……二〇〇
第六節　莫臥兒帝國の瓦解……二〇八
莫臥兒帝王の世系……二二一
第六章　英人の印度侵略（西紀一七〇八——紀西一八二二）……二二二
第一節　マドラス方面に於ける英人……二二二
第二節　ベンガル方面に於ける英人……二三一
第三節　孟買とマアラッタ帝國との關係……二四八
第四節　ウオレン、ヘスチングスの施政……二五四
第五節　コルンウオリス幷にショーアの施政……二六五
第六節　ヱルズリ侯のマイソール、カルナチック侵略……二七〇
第七節　エルズリ侯のマアラッタ戰役……二七五
第八節　ネポールの征討……二八一
第九節　ヘスチングス侯の經略……二八六
第七章　滿洲朝の西方經略幷に教匪海寇（西紀一六九七——西紀一八三一）……二九四
第一節　青海部幷に準噶部の叛亂……二九四
第二節　回疆の戡定……三〇二
第三節　西域諸國との關係……三〇九
第四節　西藏の平定幷に廓爾喀族の征討……三一二

第五節　西南苗民金川土司甘肅回徒の鎭撫……三一八
第六節　白蓮教徒の叛亂附苗族の變……三二五
第七節　海寇の猖獗幷に天里教匪……三三一
第八節　回疆張格爾の亂……三三五
第八章　印度支那侵略の初期幷に南洋諸島（西紀一七〇八―西紀一八五二）……三四一
第一節　印度支那諸國の概觀……三四一
第二節　清朝の緬甸遠征……三四八
第三節　清朝と安南との關係……三五二
第四節　佛國安南侵略の端緒……三五六
第五節　英國の緬甸侵略……三六二
第六節　和蘭爪哇侵略の大成……三六九
第七節　英國の南洋經略……三七三
第九章　中亞に於ける英露衝突の初期（西紀一七四八―西紀一八二二）英領印度の擴張（西紀一八二三―西紀一八五三）幷に露國の中亞侵略（西紀一八三三―西紀一八五四）……三七八
第一節　英人の印度內地經略……三七九
第二節　ネポールとの關係……三八七
第三節　シク族の戡定……三九一
第四節　阿富汗帝國の沿革……三九八
第五節　波斯兵のヘラット攻擊……四〇四
第六節　第一次阿富汗戰役……四一〇
第七節　露國の第二次基華遠征幷に放罕侵略……四一七
第十章　鴉片戰爭の本末幷に長毛賊の擧兵（西紀一八三四―西紀一八五三）……四二四
第一節　英人支那交通の初期……四二四
第二節　鴉片貿易の紛議……四二八

第三節　鴉片戰爭の戰局……四三四
第四節　南京條約幷に其補遺約款……四四三
第五節　回疆七和卓木の亂幷に長毛賊の擧兵……四四九
第六節　長毛賊の北進南京の陷落……四五五

附錄

第一　和漢洋紀年比較附日支葡西英蘭佛露帝王年表
第二　支那布敎々士姓名漢洋對照表

插圖

第一　露人西伯利幷中亞侵略年代圖
第二　英人印度侵略年代略圖

目次終

東邦近世史上卷引用並參考書目

此處に列記せる書目は最も重要なるもののみにして此他本文中に記載せるもの少くとなさず擱者は參考書の選擇に付きて那珂敎授の有益なる指導を受けし事極めて多し一言謝意を表す

開國起原　勝安房　三冊　明治二六年出版　東京に於て
皇清開國方略　阿桂等　六冊　乾隆五一年著
西伯利地誌　參謀本部　二冊　明治二五年　東京
支那地誌蒙古部　同上　一冊　明治二六年　東京
聖武記　魏源　十二冊　道光二二年著
蕩平髮逆圖記　四冊　光緒一四年　上海
大日本商業史　菅沼貞風　一冊　明治二六年再版　東京
臺灣島史　ドクトルリース原著　吉岡藤吉譯　一冊　明治三一年　東京
中亞細亞紀事、西德二郎　二冊　明治一八年　東京
東華錄　蔣良騏　十六冊　天保四年　江戸
東華錄續　王先謙　八十六冊　光緒五年著

書目

書目

日本西教史	太政人ヴ管譯ヲ原著	二冊	明治二七年再版	東京
佛安關係始末	引田利章	三冊	明治二〇年	東京
滿洲地誌	參謀本部	一冊	明治二七年	東京
明朝記事本末	谷應泰	三十冊	順治一五年著	東京
史學會雜誌		一冊		東京
東邦協會々報(巻)		十二冊		東京
外交時報		一冊		東京
官報		一冊		東京

Boulger. History of China. London. 1881. 3vol.

Brine. Taeping Rebellion. Lond. 1862.

Elphinstone. History of India. Lond. 1874.

Foreman. ThePhilippine Islands. Lond. 1892.

Gutzlaff. Sketch of Chinese History. Lond. 1834. 2vol.

Hildreth. Japan and the Japanese. Bost n. 1861.

Hunter. Indian Empire. Lond. 1886.

Marsden History of Sumatra. Lond. 1811.

Norman. Colonial France. Lond. 1886.

Motley. History of the United Nethrlands. New York. 1870. 4vol.

Raffles. History of Java. Lond. 1830. 2vol.

Taylor. A Studeut's History of Idnia. Lond. 1883.

Wheeler. A Short History of India. Lond. 1894.

Williams. Middle Kingdom. N. Y. 1883. 2vol.

東邦近世史上卷

田中萃一郎撰

前編　近古紀

緒言

歴史は要するに主として戰爭と商業との記錄なり殊に歐洲諸民族東漸の事蹟を其經となし以て東邦の近世史を研究せんと欲せは勢筆を歐洲の東洋貿易に起さゞる可らず。東西兩洋の貿易は其起源遠く羅馬帝國時代にありて埃及のアレキサンドリアは久しく世界商業の中心たり。十字軍時代以後歐洲に於ては伊太利の諸市就中ベネチア、ゼノアの商人は亞細亞の產物なる絹布、毛布、棉紗、染料、麝香、香料、黃金、寶玉、眞珠等を輸入して之を西歐諸國に配布せり。常に得々として曰く歐洲に於て其飲食に香味を與へんとするものは必ず伊太利の諸市を般富ならしめざる能はずと。蓋し當時にありては香料は亞細亞の特有產物にして而して當時の歐人の

食物は生肉穀物等より成り野菜類少なきを以て其子實たると根皮たるとを問はず芳香ある香料類を嗜好する事切なり。故に饗應に際し香料箱に最も近き席を以て上席となしゝを見るも其一班を知るに足る可し。丁香、生薑、肉荳蔻、白荳蔻、荳蔻花、胡椒、蓽椒、肉桂、桂子等皆其需要する所にして其價何れも貴く或は之を以て疼痛疾病を醫するの功ありとなすものあり。想ふに南歐の諸國民が遼遠なる地方の異教者と通商を營みしは黄金絹布を得んとしたるにあらずして寧ろ東洋の香料を得んと欲する食慾に動されしが爲ならむ。

ゼノア人は多く航路を北方に取りコンスタンチノープルを經て黑海に出で同海の海岸に於て駱駝の背を借りて隊商の運搬せる支那印度の貨物を其商船に滿載して歸る。然るにベネチア人は多く航路を南方に取り地中海の東岸に着しカイロより來れる隊商の手を經て亞剌比亞地方より差せる貨物を得たり。而かも此亞剌比亞の貨物も亦印度半島馬來半島より同地を經て來りしものに外ならず。蓋し中古に於ては支那の商船は遠く錫蘭に至り同島に於て印度の商品を得しが西紀一四三〇年頃迄は時にアデンに至る事あり。かくて西紀第十三世紀より西紀第十五世紀に至るの間伊太利の東洋貿易全盛を極め其富は歐洲諸國に冠絶せり。元朝の未だ亡びざるや羅馬法皇は支那政府と交通をなし協同して回教徒を征討せん事を謀りしが之が爲に却りて埃及のマメルーク朝は歐洲人の需要せる東洋貨物に重稅を課するに至れり。而して回教徒の一派なるヲスマン土耳古種族なるもの西紀一三〇〇年頃より國を小亞細亞に興し順次に東羅馬帝國を蠶食して西紀一三六五年にはアドリアノープルを以て其首府となす。然れども東洋貿易の利益はよく此瀕死の老帝國をして其一縷の命脉を維持せしめしが西紀一四五三年コンスタンチノープル遂に土耳古人の手に落つ。此に於て黑海地方の東洋貿易も亦大打擊を蒙れり。

印度の商品は之をベネチアの市價に比するに其原價僅に三分の一に過ぎざりしかば埃及土耳古兩回教國の干涉を脫せんとするの情は伊太利各市商人の齊しく抱く所にして是によりて以て舊時の盛大なる貿易を回復し得べしとなせり。有名なる亞米利加新世界の發見者クリストバル、コロンをはじめアメリゴー、ベスプッチもジオン、カボットも皆伊太利の產なるを見ば其熱心の一班を知るに難からざ

るべし而して磁石、火藥、印刷の三大發明は此時代に於て益實地に利用さるゝに至り社會の變革を助けし事少からず。磁石の北方を指すの力あるは支那人の早く發見せる處にして西紀第十三世紀に於て已に之を航海に應用せしが西歐に於ては之を以て西紀第十四世紀の初フラヰヲ、ジヲジャの發明となせり其新發見を助けしは言ふを待たず。火藥も亦東洋より西歐に輸入しゝものにして西紀一三五四年フライブルクの一僧ベルトルト、シユワルツなるもの之を發明しゝと云ふも其信僞は詳ならず。兎に角其實用に供せられしは西紀第十四世紀の中葉にして年と共に其用方を改善し歐洲の戰術を一變するに至りしは固より新發見の地の征服を容易ならしめしものありしならむ。印刷術の發明は西紀一五四〇年頃獨逸マインツの人ヨハン、ゲンスフライシマ（俗にグウテンベルヒと稱す母方の姓なり）の創意に出で製紙術の進歩と共に新舊智識の擴張傳播を速ならしめたり。かくて遂に東印度航路の發見を實現するに至れり。是を本書の起程點となす。

第一章　歐人通商の初期（西紀一四九八—西紀一五九五）

第一節　ワスコ、ダ、ガマの印度航路發見

ピレネ半島の南西隅に一王國あり葡萄牙と云ふ。半島の地は古羅馬帝國の屬地にして其瓦解の後西ゴス人種等此地に君臨しゝが西紀七一一年回教徒タリック亞弗利加より渡來して西ゴス王國を倒しゝより爾來五六百年の間半島の大半回徒の有に歸す。而して基督教徒が兵を擧げて反抗するや數王國を建設す葡萄牙は其一なり（西紀一一四〇）。建國以來其祖國の爲に其宗教の爲に其文明の爲に回教徒と相戰ふ。西紀一三八三年大祖バルガンヂー伯アンリの統絕ゑアヰス家の祖ジョアン大帝入りて王統を嗣ぐ。皇子アンリ父王の命を蒙りて西紀一四一五年モロッコの北岸なる回教徒の堅城スータを攻めて之を拔く。是を半島の基督教徒が國外に出でゝ異教驅逐に從事せし第一の擧となす。浮囚に亞弗利加の地理に通じ印度の般富を說くものありアンリ時に年二十一之を聞きて雄心勃々として已む能はず基督の爲に亞弗利加の地を探檢せんと決し商船學校を設け測候所を建て星學數學

の研究に身を委ね航海術の奬勵に全力を注ぐ。かくて期年ならずしてアゾール列島、マデイラ列島、カナリー列島、緑岬列島を發見し次で之に殖民し西紀一四二〇年に至りては之を以て葡萄牙國の領有となすに至れり。其後葡人は益亞弗利加の海岸を南進し西紀一四六〇年アンリの死するや當時海岸の新に發見せられしもの一千八百哩と稱す。故にアンリに舟子の號あり。

是より先西紀一四五三年回教信者たる土耳古人種が東羅馬の首府コンスタンチノープルを降すや黑海地方に於ける東洋貿易も全く否境に沈淪し東亞に達するの航路發見は南歐有爲の士の一大目的となれり。葡王ジョアン二世は舟子アンリの遺志を紹ぎ羅馬法皇の許可を得て遠征隊を派遣せしが領袖ヂエゴ、カム Diego Camは亞弗利加の西岸に沿ひて南緯二十二度の地に至り使者數人を分派してベチチア人の商權を握れる香料の產地を探檢せしむ。彼の西紀一四八七年を以て陸路印度のカリカットに到着せるダ、コヰルヨーン de Covilhamは實に此使者の一人なりき。然れ共コヰルヨーンの復命あらざるにバルトロミユー、ヂアズは亞弗利加の南端に着し(西紀一四八六年)之を荒が崎 Cabo tormentoso と命名すジョアン二世ろの雅馴ならざるを以て喜望の岬 Cabo de buena esperanza と改めしもの是なり。已にして閣龍の西方に於ける新世界の發見あり歐洲諸國皆其耳目を茲に傾注す。ジョアン二世殂しマノエルの朝に及びてはじめてヂアズの發見を完成するに至れり。

ワスコ、ダ、ガマ Vasco da Gama は西紀一四五〇年頃葡國海岸の小市シチスに生る。其家世々葡王に仕へ父エスタブリムは皇室の重臣たりき。マノエル王ワスコ、ダ、ガマの夙に航海の術に熟するを以て其名聲隆々たるを聞き小艦三隻(サン、ガブリール百二十噸、サン、ラッソエル百噸、ペルリオ五十噸)を艤裝し之が司令官として遠征の途に上らしむ。ヂアス副たり。乘員百六十人西紀一四九七年五月八日を以てタグス河口を出帆す。ヂアズは途サンタ、マリアに於て一行に別れしを以てガマは益南進し同年十一月二十日喜望峰を迴航しクリスマスには今のナタルの南東岸を發見す。危險なる潮流を避けて遠く洋上を航行しゝを以て當時印度貿易の市場たりしソフハラに寄港せざりしが已にして回教徒の都會たるモーザンビークに着し次でメリンダ Melinda に到る。メリンダはガマ解纜以來の大市にして港には印度の商船停泊し印度間の貿易盛大なるを証するに足るものあり。この地に於てメレモ、カナ

Melemo Kana と稱する印度出生の水先を雇ひ西紀一四九八年四月二十二日印度に向ひて出帆す。

メレモ、カナよく航海の術に達し五月十七日には印度の陸地を烟波漂渺の間に認めしかば船員一同喜色滿面揚々として同月二十日を以てカリカット港頭に停泊せり。本國を出帆しゝより以來恰も十一月を數ふ。ガマ先罪人を陸上に放つ。幸にして葡萄牙語に通ずる突尼斯產の回教徒あり之を家に延き且親ら葡船を訪ふ。ガマ乃ち其紹介によりカリカットの王ザモリンに謁見を請ひしにザモリン快く之を承諾す。五月二十八日ガマ從者十二人を率ゐて王宮に至り通商を求むるの意を通ず。在住の回教徒等其自己通商を害するを察し百方離間の言をなして妨害を試む幸にして葡王の國書に亞剌比亞語を以て記されしものあり。ザモリン受て之を讀み其請を許す。かくてマラバルの海岸に滯在する事六ヶ月にして歸途に就く。ザモリンの復書中云へるあり「陛下の重臣ワスコ、ダ、ガマ弊邦に來る朕喜悅に堪えず弊邦肉桂、丁子香、生薑、胡椒寶石に富む願くは貴國より金銀珊瑚猩猩緋を得む」と。ガマは海路恙なく西紀一四九九年八月三十一日山の如き寶貨を積載して里斯本に着す。葡國君臣上下手の舞ひ足の踏む所を知らず。印度に到るの航路一度發見せらるゝや東洋貿易の中心は忽ち伊太利諸市を去りて里斯本に移り其後恰も一百年間葡萄牙は恣に其利益を壟斷せり。

第二節　印度總督ダルマエダ并にダルボケルケ

然れども當時の葡萄牙の航海者は貿易に從事するものにもあらず又私人の冒險家なるにもあらず實に領土占領宗教弘布の王命を受けたる將官なりき。第二回の遠征は十三隻千二百人より成りカブラル之を率ゐ西紀一五〇〇年三月九日を以て出帆す。其敕命は要するに先づ說教を以て始め其功なき時は刀劍に訴へよと云ふにあり。往航に際し會ゝブラジルを發見しメリンダより水先を雇ひ九月十三日カリカットに到着す。同地在住の回教徒等前回よりも甚しく詭計を盡して妨害を試みしもザモリンは前の如く優待を與へ且商館設立の許可を與ふ。茲に於て乎回徒益不快の念を起し一日商館を襲ふて管理者を殺す。カブラル乃ち回徒の大船十艘を捕獲し其貨物を奪ひて船體を燒きカリカットの市街を砲擊する事二日去りてコー

チンに赴き其領主と通商を約し且ツラバンコール王の屬領なるカナノル侯の招に應じて其地に航し貨物を滿載して歐洲に歸る時に西紀一五〇一年七月三十一日也。西紀一五〇二年羅馬法皇馬山六世は敕命を下し葡萄牙王を以て「エチオピア、アラビア、波斯、印度地方航海占領通商王」となす。是より先カブラルの歸國に先ちダ、ヌエバ四隻の船隊を統率して印度に向ひコーチン、カナノル等の地に於て歡迎せられしがザモリンはカブラルの擧を深く怒り復讐の念慮を飜す能はざりしと見え船艦百隻を以てヌエバを攻む。ヌエバ土侯の忠告を斥け以て決戰し之を粉碎して歐洲に歸る。茲に於て葡王は一大遠征を派し印度の土侯を威壓し其商權を掌握せる回教徒を驅逐せんと決心し二十隻の大艦隊を組織す。ワスコ、ダ、ガマ之に將たり。ガマのカリカットに到るや直ちに漁舟の水夫を捕獲しザモリンを責めて曰く若し我言を聽かずんば之を屠殺せんと而して其手を斬り又其足を斬り實に殘酷を極む。遂に市街を砲擊して其大半を破壞し益々ザモリンとの關係を困難ならしむ。ガマ乃ちコーチン、カナノルの諸侯と同盟を作爲し代理者を置きて西紀一五〇三年十二月二十日印度の地を去る。

ザモリン之を聞きて配下たるコーチン侯に向ひて宣戰し其保護の下なる葡人の引渡を要求す。コーチン侯然諾を重じ其要求を斥け苦戰頗る勉む。已にして九隻を以て三隊となしダルボケルケ d'Albuquerque 兄弟の引率せる援隊の歐洲より來着するあり攻守の形勢頓に變じザモリン和を請ふに至る。然るにダルボケルケ兄弟の歸歐するやザモリン葡人を以て又與みし易しとなし藩主の關係あるビージャヌアゲル王の援軍を得大砲四百門を戰艦に積載し陸兵五千に將としてコーチンに向ふ。代理者葡人バチェコ勇敢にして屈せず手兵とコーチン侯の兵とを以て邀へ擊ちて大に之を破る。時にロペ、ソアレス十三隻に將として歐州より來る。乃ち共にカリカットに向ひザモリンをして要求に從はしめしが其砲兵の顧問たりしミラン人を引渡さざるを怒り市街を砲擊しザモリンの艦隊幷に回教徒の商船十餘を捕獲し四隻の艦隊を以てコーチンの保護に充て西紀一五〇六年七月二十二日歐洲に歸着す。

西紀一五〇五年葡王印度總督の職を置き勇敢にして而かも細心なるダルマエダ Don Francis Almeida を擧て其印綬を帶びしむ。ダルマエダ船舶二十二隻兵士千五百人を

率ゐて西紀一五〇七年を以て印度に到る。先ゴア附近なるアンチェデバ島に地を相して城塞を築きて根據地となしコーチンに至りて君侯に贈るに金銀珠玉を纏めたる王冠を以てす。時に土侯間に大同盟ありザモリンは單にビーヂャヌッゲルの同盟を得しのみならず。グーゼラット王と攻守の約を締結せり。蓋し從來印度西岸の貿易を壟斷しつゝありし回教徒は葡人の蹂躪を見て喜ばず當時のグーゼラット王マームド、シァ一世の照會を經て埃及に君臨せるマメルーク朝梭里檀の援助をも求むるに至れり。而してベチチア人も之に兵器を給與せりと云ふ。かくて西紀一五〇七年十二隻の艦隊はアミール、フーサインの統率する所となり蘇士を發して紅海を經由しグーゼラットに至りてマームード、シァの艦隊と合し其將ムーリック、エヤズと共に海岸に沿ひて南進す。埃及の艦隊先葡蜀牙の艦隊にチョールに會し次てグーゼラットの艦隊も戰列に加はり葡艦大敗して其旗艦を失ふ。西紀一五〇八年ダクンハ十三隻千三百人を統率しアルフホンゾ、ダルボケルケ十二隻に將として着す。兩艦隊合して一となり波斯灣紅海沿岸に於ける回教徒の根據地を襲ひモスカット、オルマス兩地を下す。時にダルボケルケに宛てゝ印度總督任命の報あり乃ち印度地方に歸る。然るにダルマェダはチョール敗軍の不名譽を回復するに急にして容易に總督の印綬を解かず。回教徒の同盟艦隊を追跡して北方に航し途タブルの要塞を攻め之を下して後なほ北進しデーウーに至りて遂に敵の艦隊に會す。埃及艦隊の司令官よく戰ふ。而かも其結果はダルマェダの全勝に歸せり。ダルマェダ益總督の職を讓るの意なく却てダルボケルケを幽閉せんとす。西紀一五一〇年ドン、フェルナンド、クーチニョーの新艦隊の着するに至りて漸く其職を辭し歸國の途亞弗利加の海岸に於て蠻民ホッテントットの手に斃れしとぞ。

ダルボケルケは就任の後第一着手としてカリカットを攻めしがクーチニョーの進擊に勇なるや陣歿の不幸を來しダルボケルケも重傷を負へり。乃ち方向を轉じてオルマスに向はんとし途ビージャプール王の所領地なるゴアを襲ひて之を占領す。西紀一五一一年ビージャプールの將軍再び之を王國の所有に歸す。ダルボケルケ其地の美にして富めるを想ひ眷戀止む能はず急に圍みて之を回復せんとす。土軍能く防き死者六千人を出すに至りしが遂に守を撤す。ダルボケルケ堅く其占領の區域を擴張せざるを約し且土侯チモジアを立てゝ郭外の地を領せしめ國王の

許可を得てゴアを葡國の屬地となし爾來其地を以て東印度所領地の首府となす。

葡國の東洋貿易益隆盛に赴くやゴアに東洋のベネチアなる異稱あるに至れり。

次でダルボケルケは滿剌伽を襲へり。初めワスコ、ダ、ガマの葡王に奉呈せる報告中に同地の富裕にして要地なるを說けり。西紀一五〇八年四月チエゴ、ロペス、ダ、セキエーラは亞細亞東部探檢の命を受けて葡國を發し翌年九月コーチンを出帆して蘇門答臘島のピヂル、バセー諸港に寄港して優遇を受け滿剌伽に至りしが回教徒商人の反對によりて國王の虐遇を受け辛じて歸國せり。ダルボケルケは乃ち同地を占領せんと決し兵艦十九隻士卒千四百人を率ゐ西紀一五一一年五月二日コーチンを出帆す。ピヂル、バセーに寄港し同年七月一日滿剌伽に着し激烈なる抵抗を受けしにも拘らず遂に此印度列島航海の咽喉地を奪ひ蘇門答臘島をはじめ各地土侯の國使を受け暹羅並に香料列島との通商を開始す。滿剌伽の梭里檀マームード、シアは住民の重立ちたるものを引連れて半島の極端なる馬來種の最初の殖民地の遺跡に近く地を相して一市を建つ今もなほ嚴存せる香蘆是なり。馬來の古書に據るに西紀一一六〇年の頃其祖先は蘇門答臘島より半島東南の極端に移住しシンガプラ市を建設せしが其後西紀一二五二年爪哇島なるマジアパヒット王國の兵を蒙りて同市を捨て翌年滿剌伽市を建設せるなりと云ふ。

ダルボケルケは又西の方波斯灣紅海地方に轉じ西紀一五一四年オルマスに城堡を築き波斯帝をして葡人を畏敬せしむるに至れり。然るに本國の宮庭に於てはダルボケルケに反對して其權力を殺がんとするの一派あり隱謀其功を奏しローペ、ソアレス、ゴア公とあるを是即ちダルボケルケの希望せる所なり。ダルボケルケ此報を得るや恰も病篤に在り怏々として樂まず西紀一五一五年十二月十六日を以てゴアに死す。年を享くる六十三。蓋し從來葡人の東印度に於るや本國に於て回教徒と抗爭せしより以來養成せる國性を以て即ち十字軍の際に於るが如き殘忍と酷薄とを以て土人を處せり。ダルボケルケは夙に其非なるを看破し勉めて土侯の好意を得んとせり。其政策の公明正大なると軍事上の勇氣と成功とは實に葡人をして東洋海上の全權を掌握せしむるに與りて大に力ありしなり。「日本並に香料列島より紅海並に喜望峯に至るの間葡人は東洋の物貨分配處理の全權を有し之に加ふるに亞弗利加大西洋岸幷にブラジルの領地を以てせば葡國は優に海上の一大帝

國たりき。而してダルボケルケは此大帝國建設者中の有力家たり。其後々任者中に舊時の方針によりて暴政を爲すものあるやゴア在住の印度人は固より回教徒までもダルボケルケの墓前に跪きて之を訴へ其神助を得んとするもの其跡を絶たず。葡國史家ダルボケルケを偉人と稱し時の葡王マノエルを幸運兒と稱せ。

第三節　ダルボケルケの後任者

ダルボケルケの後任者は皆武人にして通商上の思想乏しかりしを以て全く其政策を一變せり、ローペ、ソアレスはアデンを攻めしが克たず且滿剌伽（マラカ）を圍まれしが幸にして守兵よく防ぎ失はざるを得たり。ダ、セキエーラ職を襲ぎて復た印度に至る亦ソアレス一流の人物なり。西紀一五二一年艦隊四十隻兵士三千人を率ゐて航してヂーウーに至り城塞建築の許可を得んとす。グーゼラット國の將官斷乎として之を拒絶す。乃ち倉皇南歸せんとしチョールに至りて敵艦の追及する所となり大敗す。グーゼラット幷に德干（デカン）地方の諸王漸く葡人を侮り西紀一五二二年ビヂャプール王ゴアを圍み土侯チモジアン破りて其所領を奪ふ。西紀一五二四年ワスコ、ダガマ三度印度に至り同年十二月二十五日コーチンに死す。其後十三年骨を歐洲に送り幷ディゲイラの一小寺に葬り西紀一八八〇年に至り改めてベレムのサンタ、マリヤ院に其遺骸を葬ると云ふ。

西紀一五二七年グーゼラット王は前年の戰勝に狎れ一舉して葡人を破らんとし艦隊を其海軍の碇泊處なるチョールに送る。然るに開戰の結果葡艦の大勝に歸し敵の全艦隊八十三隻の中或は沈沒し或は燒失し或は淺瀨に乘上たるもの七十三隻と稱す。葡人勝に乘じて陸兵を進軍せしめタンナ、ザルセット等の地を占領す此軍を統率しゝは即ヘクトル、デ、シルヤエラなり。アヽメッドヌッゲル國の兵此役以後常に葡人に與す。西紀一五三一年葡人又大擧してヂーウーを拔かんとし巡撫ヌーニョー、ダ、クェルバ大小四百隻の艦隊を以て二萬五千の軍隊に將とし今の孟買の地を發す。二月七日カッチ灣のバイト島に於ける堡壘を襲ひ大砲六十門を奪ふ。而かもヘクトル、デ、シルヤエラ此役に歿す。艦隊遂にヂーウーを圍みしが守將よく拒き拔く能はず沿岸各地を拷掠してゴアに歸る。然れども葡人は未だヂーウー占領の希望を放棄せずグーゼラットの叛公子と同盟して其報酬として北部コンカン

の地大半を得たり。公子敗る乃ち莫臥兒帝フーマユーンと同盟してグーゼラットを襲はんとす。グーゼラット王バハヅル、シャ之を聞きバッサン、ヂーウーの兩地を葡人に割きて同盟を約す(西紀一五三四年)。葡人王の旗下に戰ひ莫臥兒兵退軍す。グーゼラット王漸くヂーウーの割讓を悔ひクェバルの乘船に至りて之を還付せしめんとし葡人に紹き殺さる是西紀一五三七年二月十四日の事なり此年バハヅル、シアの使者已にコンスタンチノープルに達し土耳古の梭里檀(ソルタン)七十六隻七千人を以て一艦隊を組織し蘇士(スエズ)を發してヂーウーに向はしむ。蓋し埃及は是より先西紀一五一七年に於て土耳古の兵を蒙り今や其屬領たり。九月援軍ヂーウーに着す。時に守兵僅に六百人、糧食も亦日ならずして盡きんとす。然るに埃及の艦隊は陸にグーゼラットの兵二萬の聲援を與ふるあり守將アントニヲ、ヂ、シルヰエラ死守する事八ヶ月城兵生色なし。其詳細の記事は曾て西班牙葡萄牙王の印度專務卿たりし葡萄牙の史家ファリア、イ、スーサの著書に就きて知るべし。會ま總督ダ、カストロ大砲一千門兵士五千人を以て歐洲より來着し印度西海岸を砲擊しつゝ北進し艦隊九十三隻ヂーウーに着す。守兵大に奮ひ突進して敵兵を破り圍遂に解くるを得たり。

總督ゴアに歸り凱旋式を擧行す其儀式頗る盛大を極め古羅馬の式を模す。其報の故國に達するや葡國の皇后は評して曰く總督の戰勝は基督教徒の趣あり而かも其凱旋の式に至りては邪教徒の風に異ならずと。

西紀一五四三年ビーヂァプール國に內亂あり公子アブヅーラ、ゴアに遁れ葡人の援を假りて事を成さんとす。時にダ、ノルーハ總督たり。當時葡人にして其請を容れ德干地方の擾亂に干涉したりしならんには漸次印度の內地に其地歩を占め以て他日の隆運を來すを得たりしならんに總督之を斥けて應せざりしは惜む可し。其後西紀一五五四年に至り三千の歐洲兵を派して公子を援け內地に進軍せしが途にして退軍の令を下し爲に公子は遂にビーシァプール王の捕虜となり死刑に處せらる。何が故に葡人は半途にして其兵を撤せしか。葡人に印度內地に進軍せずてふ政治上の反對意見ありしとも見えず。又公子の勢力微弱にして恃むに足らざりしが爲なりとも思はれず而かも是が爲に葡人の信用を害しゝや疑ふ可らず。

ビージャプール王アヽメットヌッグル王カリカットのザモリン等已にして大同盟を組織して葡人に抵抗す。蘇門答臘(スモダラ)島の亞珍(アチン)王も亦之に加はりしが其動靜は次

節に於て詳述す可し西紀一五七〇年ピーシァブール王大砲三百五十門を以てゴアを攻む。士卒一萬二千人象三百頭馬四千頭牛六千頭を失ひ十ケ月の後圍を撤す。アヽメドヌッゲル王も又大軍に將としてチョールに向ひしが亦大敗す。但ザモリンの兵カリカットに近きチャルの地を攻めて之を拔く。葡人守將の怯懦を責めて之を刑す。同盟之を聞きて葡人を畏敬するの念慮を生じ德干(デッカン)諸王媾和を約す。其後西紀一五九二年アヽメットヌッゲル國復たチョールを攻めしが戰利あらず司令官家族を擧げて捕虜となり大砲七十五門兵士一萬二千人を失ふ。司令官父子後に基督教に改宗し里斯本に赴きしと云ふ。

是より先西紀一五八〇年アヰス家の王統絶えて葡蔔牙の王位はマノエル王の外孫なるフヰリップ二世の下に西班牙の王位と結合せらしかば爾來亞細亞に於ける葡蔔牙の利害は西班牙の歐洲に於ける利害の爲に動され遂に其東亞に於ける海上通商の全權を害せらるゝに至れり。西紀一六四〇年アヰス家の祖ヨアン王九世の孫ヨアン四世ブラガンザ統の大祖として葡王の位に即き再び獨立國となりしも已に英蘭兩國の爲に其權力を奪ひ去られたる後なりき。蓋し和蘭は西紀一五九五年を以て其艦隊を東洋に派し英國亦次で遠征を試み順次に葡人の根據地を奪ひたる其詳細の事蹟は本書第三章に說くが如し。要するに葡人は唯印度の海權商權を失はざらむと勉めしのみ而して其專權を有しゝ間は之を失はざるを得たり。グーゼラットに於けるも又德干(デッカン)に於けるも政權を握るの機會は乏しからざりしと雖も葡人は海上より防禦し得可き地にあらざれば之を領有するを望まざりき。葡人は又海軍戰員として其仕傭侮るべからざるものあり而かも陸上の運動は頗る不活潑にして單に海港守禦の爲に之を用ゐしのみ。且土人を遇するに甚だ殘酷を極め却て回教徒の上に出づるものあり之に加ふるに無限の貪慾を以てす一度蘭英兩國の國旗東洋の海面に現はれ逐日衰運に陷りしもの又宜ならずや。

第四節　亞珍王國と葡人との關係

亞珍王國(アチーン)は蘇門答臘(スモタラ)島の北端に在り。葡人が滿剌伽(メラカ)を略取せし頃はピヂール王國の一州にゐるに過ぎざりき。州の知事にイブラヒム侯 Raja Ibrahim と稱するものあり年少氣鋭にして深く大志を抱く。偶隣州ダヤの知事と不和を生じ一歩を進めて君

王の命を拒み結局梭里檀をして逃れてバセーに於ける歐人の堡壘に倚らしむるに至れり時に西紀一五二一年なり堡壘の守將アンドレ、エンリーケス歐人十八人馬來人二百人を以て一軍を組織し弟マノエルをして之を統率して海上より進ませしめ陸上より進軍せる梭里檀千餘の士卒と共にビヂール市を援はしむ。然るに同市は已にイブラヒムの爲に占領されしを以て退軍の令を傳へしが敵の追及する所と爲りマノエル戰場に斃る(西紀一五二二年)其後エンリーケスは數回兵を交へしも勝利少く遂に西紀一五二四年を以てバセーの堡壘を捨てゝ滿剌伽に向て出帆せりバセー市爲に亞珍人の有に歸す。

西紀一五二八年イブラヒム卒し(馬來書によるにイブラヒムは西紀一五一一年を以て即位し西紀一五二九年を以て廢さる)アラエッデン王Alla-eddin-hah位を嗣ぎ西紀一五三七年を以て兩回滿剌伽を襲ふ第一回の時は兵士三千人を送りしに幸に守兵の怠慢に乘じ夜に於て市街の附近に上陸し郭外の村落を襲ひて損害を與へしが守將の抵抗あるに及びて退却して森林中に潛伏せり翌一日の間其地利を恃みて砲火を交へしも夜に乘じて歸帆す其喪ふ所五百人に達せり數月の後亞珍王は復一層の大軍を以て同市を襲ひしが亞珍人攻擊三日にして一も得る所なく再び退軍の否運に會へり其後十年を經て王は三度艦隊を編制して滿剌伽に向はしめしが亞珍の軍隊は些々たる掠奪に滿足して歸途に就き艦隊バルレス河口に碇泊せる時會ま葡國艦隊の逆襲を受け大敗す。高僧クサウイエルの默示を得しと云ふは此時なり。アラエッデン王は西紀一五五六年を以て卒せり。

西紀一五六七年梭里檀マンスル王Mansur-shah半島のペーラック王國より入りて亞珍の王位に即く。當時印度西部諸王の間に葡人を敵視せる大同盟起り王も又其勸誘に應じ即位の後間もなく亞珍人一萬五千人土耳古人四百人に將として滿剌伽を襲ふ。守兵寡軍を以てよく逆襲を試み互に勝敗あり或は王の長子の戰場に斃れし事あり或は葡人敗北して將校多く陣歿せし事あり。マンスル王最後に總攻擊を試みしも其功なかりしを以て三千五百人の士卒を失ひ退却す葡人の同盟國たりし晋爾王援隊を以て後れて至る時に海上死屍の浮ぶ者夥しかりしと云ふ此籠城は葡人が東洋に於て遭遇せし籠城の中に於て最も困難に而かも最も名譽あるものゝ一にして守兵僅に千五百人にして殊に歐洲人は僅に二百人のみ他は皆土

人なりき。

其後五年を隔てゝ西紀一五七三年に於てマンスル王は又爪哇島なるジャバラの女王と同盟を約し艦隊九十隻士卒七千人に將として親ら滿剌伽を攻む。葡人悉く其所有の船舶を集めて艦隊を組成し進みて敵の艦隊を襲ひ其將校の首席にあるものを仆し全勝を博す。翌年シャバラの女王も一大艦隊を送りて滿剌伽を襲はしめしが一も得る所なく三ケ月の後歸國せり。然るに爪哇兵の其師を率すや否や亞珍王は復艦隊に將として滿剌伽に至る時に艦隊全く海峽の海面を襲ひしと稱す。(西紀一五七年)守將彈藥の量將に盡きんとするを見て持久の策を取り全く砲火を止めしに王は又是を以て守兵に奇計ありとなし恐怖の念を生じて國を歸す。守兵期して思へらく落城旦夕に迫ると然るに亞珍兵の退却を見る其喜知る可し。西紀一五八二年王は復滿剌伽を圍みしが復其目的を達せずして歸國せり。西紀一五八五年五月マンスル王暗殺せらる。

第五節　葡人の支那通商

滿剌伽占領の後五年にして葡人ラフハエル、ペレストレロなるものあり蓬船に乘じて支那に赴く時に西紀一五一六年（正德一）歐洲の國旗を掲げし船舶が支那に至りしは是を以て嚆矢となす。翌年フェルナヲ、ペレス、ダ、アンドラデ支那港灣測量の王命を受け葡船四隻馬來船四隻を以て廣東に至り地方官の歡迎を蒙り三竈島Shangchan, or St. john's Islandに碇泊するの許可を得たり。然るに翌年其弟シモン來り暴行を逞しゝが爲大に支那官民の感情を害し西紀一五二一年を以て國境外に放逐せらる。是より先アンドラデの西紀一五一七年を以て支那に至るやゴア總督の任命せる國使ピレスも亦一行中に在り其報告の北京に達するや正德帝は滿剌伽梭里檀臣下の言を聞きて葡人を喜ばずピレスを廣東に止むる事三年に及ぶ。時に會ま弟アントラデの暴行あり正德帝即ち委員を設けて之を審問せしめ間諜なりとの判定を下して廣東に送還し滿剌伽を舊主梭里檀に還付するまで質として保管せしむ。かくて使節の一行は西紀一五二三年（嘉靖二）九月を以て牢獄中に死しゝが如し。

己にして葡人の支那に航するもの年を逐ひて增加し蓬船を追ひて寧波に至り其

地に商會を設け又厦門にも通商を開始せり。西紀一五三七年（嘉靖十六）には廣東附近に葡人の居留地三個を見るに至れり。即ち三竈島電白縣（原文グランド、ラドローン列島の北西なる小島 Lampacao. とあれど廿二史劄記などに正德の時互市の地を電白縣に移すとあるに依る可きか）及瑪港是なり西紀一五四二年商賈等三竈島を去りて電白縣に集り十年の後クサウエイル遊去の頃は同地は通商の中心となり西紀一五六〇年頃は在住の葡人常に五六百に達せり。

瑪港は澳門紀略の記す所に據れば嘉靖十四年即ち西紀一五三五年に都指揮に黃慶と稱するものあり多額の賄賂を受け上官の許可を得て澳門（濠境）を以て通商の地となし地料として毎年二萬金を貢せしめしに始る。其後西紀一五五三年に至り葡船風濤に遭ひ貢物を水漬せしを以て之を暴すの地を得ん事を乞ひ海道副使汪柏の許可を得しより益隆盛に赴き高樓櫛比するに至れり。但しヅ、バルデの支那史には嘉靖の時海賊チャン、シ、ローなるもの澳門に據る地方官歐洲人の援を假りて之を討滅し其功に酬ゐん爲め同地を歐洲人に與へしとあり。其後西紀一五七三年（萬曆元）には支那政府は香山島と瑪港とを連接せる蓮花莖の地に關を建てゝ官守を置き西紀一五八七年には在住支那人を治むるが爲公司を設く。（初め同市建設の地に Ama の像あり故に Ama-gau, Ama-kau とはアマ港の意なり葡人之を Amacao と書し約して Macao となる。）

在寧波の葡人は隊をなして附近の地に出で婦人少女を誘拐し暴行至らざるなし地方の人民大に之を怒り起て復讐をなし一萬二千の基督教徒を屠る内八百人は葡人なり其他葡船三十五隻逢船二隻を焼く。爲に葡人は此歐洲貿易に最も適したるの地に於て其商權を失へり。四年の後西紀一五四九年に於て葡人は又新設居留地チンチウ Chinchew より放逐せらる。

第六節　西班牙人の比律賓列島占領

西班牙王國は其地ピレネ半島の八割五分を占む半島の地羅馬帝國の時イスパニアと稱す因て西班牙の名あり。回教徒の襲連に赴くと共にアラゴン、カスチール等の諸王國起り葡萄牙と等しく數世紀間激烈なる交戰止む時なかりしが西紀一四九二年一月二日回教王國の首府グラナダは有名なる堅城アルハムブラと共に隆

服し半島の地又一の回教徒を見ざるに至れり。此年伊太利ゼノアの人關龍カスケール女王イサベラの補助を得て航路を西に取りて東亞の地に達せんとし端なくも亞米利加の新世界を發見せり。羅馬法皇歴山六世イサベラの夫アラゴン王フェルナンドの請願により翌年五月四日を以て敎令を下しアゾール列島の西三百哩の點に於て大西洋上に南北の直線を劃し恰も小兒が小刀を以て苹菓を兩斷するが如く地球を兩分し其以東を葡萄牙王に以西を西班牙王に與ふ。蓋しアラゴン、カスケールの兩國は當時に於ては別箇の獨立國なりしも其君主の結婚以來大に合同の機會を熟さしめ西紀一五一二年に於て西班牙王國を組織せり。其後葡人の歎願あり法皇の認可を受け西紀一四九四年六月七日を以て西葡間に條約を締結し南地の直線をなぼ西方八百哩の地に劃す。

次で葡人マガリヤエンス西班牙王カルロス一世の補助を得て世界遇航の途に上る。マガリヤエンス西紀一五一九年八月二十日を以て五隻の艦隊を率ゐ纜をサン、ルーカル、デ、バルラメーダの地に解きマデーラを經ブラジルの海岸を航し十月二十八日を以て今のマゲラン(マガリヤエンス)海峽に入り十一月二十六日大平洋に出で航路を西北に轉じ西紀一五二一年三月十六日ラドロン列島を發見す。次でミンダナオ島の北岸を航し四月二十七日セブー島に着し酋長をして西班牙に服從する の議式を行はしむ。時にセブー王偶ま對岸の種族と和せずマガリヤエンス王を助け四月二十五日マクタン島に上陸し激戰に際し毒矢を受けて斃る(二十七日?)次て副將以下又セブー王の紹き殺す所と爲る艦隊乃ち此地を去るに決しボルネオ并にモルッカ列島の海洋を經西紀一五二二年九月六日を以てサン、ルーカルに歸港す。茲に於て初めて地球を週航し歐洲より東亞に至る西南の航路を發見せり其後カルロス王は葡萄牙の抗議を斥け香料列島廻商の全權を掌握せんとし遠征を出す事二回に及ぶ。第二回の遠征隊は井ラロポス之に將として新西班牙の西岸を發し時の皇太子墺太利公フ*リップの名に因みて比律賓(フィリピンス)列島の名稱を下しゝも未だ之を占領しゝとは云ふ可らず。墺太利公は即ちフ*リップ二世なり。

西紀一五五六年フ*リップ二世位に即く當世の宗教熱に感染し比律賓列島を占領し之に布教せんと欲して新西班牙の總督に敕命を下し遠征を出さしむ。但香料列島はカルロス一世の晩年に於て葡王より金貨約百二十萬圓(三十萬タカッツ)を得

て其所有權を爭はざる事となれり。ミゲル、ロペス、ダ、レガスピは西班牙本國の貴族なりメキシコ市の市長として令名あり總督乃ちレガスピを以て遠征隊を統率せしめ西紀一五六四年十一月二十一日ナヰダット港を出帆す。翌年一月ラトロン列島を過ぎ翌月列島に達せり。當時セブーの王國頗る隆盛を極め且港灣殊に佳良なりレガスピ四月二十七日を以て同地に上陸し都府を占領し漸次に土人を歸服せしめ遂に全島を占領す。廢王ツーバス基督教徒となり附近諸島相次きて降る衛藉牙人聞きて所有權を爭はんとすレガスピ之を擊退し全島巡撫の職に任せられセブーの地に城堡を築き市街を改善し西紀一五七〇年同地に市政を施く。此年五月レガスピの孫佐官ウーアン、サルセド呂宋島征服の命を受け土侯と條約を締結す。マニラ王ソリマン之を悔ゐ首府(時にMaynilaと稱す)に放火してサルセドと戰ひサルセド重傷を負ふ。レガスピ、バナイ島に在り報を得て直ちにカビテーに赴く。其マニラに入るや住民歡呼して之を迎ふ。乃ち同市を以て列島の首府となし全列島占領の布告を發す。サルセド次で內地を征服し其他の諸將も各地を服從す。西紀一五七二年八月二十日レガスピ、マニラに死す。而かも西班牙殖民史上に於ける名譽ある位地は曾て滅するの期なかるる可し。

レガスピの死後間もなく支那人李馬奔Li-ma-hongの事あり。西班牙の史家は李馬奔を賤みて海賊に過ぎずとなす然り李馬奔は海賊なり然れ共西班牙が比律賓列島占領の擧も亦一海賊の所爲たるに過ぎず。蓋し是當時代の精神なり黑旗哥秘露征服の如きは其甚しきものにして此頃西班牙人ダ、ラベザレスなるものはボルチオの梭里檀を廢立し且支那征服の王命を得んとせしと云ふにあらずや。李馬奔はチンチユー港の人なり青年の時より海賊の群に投じやがて一隊の首領となる。洋上に於てマニラより歸航せる篷船に會ひて之を掠奪し捕虜を以て水先となし遂船の武裝せるもの六十二隻海兵二千人陸兵二千人婦女子千五百人を引率して比律賓占領の途に上る。西紀一五七四年十一月二十九日艦隊マニラ灣に着す。李馬奔部將日本人庄公Sincoをして兵六百に將として西班牙人を攻めしむ時に暴風起り篷船沈沒するもの多く溺死二百人に達す。庄公殘兵を以てマニラ城外に上陸し進みて副將を殪す。西人逃れてサンチアゴ城に籠る時に一隊の援軍の着するあり庄公之を以て大軍なりと誤認し退却す。西人勢に乘じて追擊し血戰數時に亘り攻

擊軍辛じて敗卒を收めて篷船に乘ずるを得たり。庄公ガピテーに退て李馬奔の本隊に合し將に再擧を謀らんとす。

是より先ゥーアン、ザルセド呂宋北部征服の任に當り李馬奔等が沿海を南進してマニラに向はんとするを見て海路を取り急遽之を追ふて翌日首府に着す直ちに副將の任に就き防禦の計畫を爲す。十二月三日早天兩軍各開戰の準備を爲し李馬奔部下を集めて進擊の令を下す。庄公選兵千五百人を率ゐて上陸し火を市街に放ち三隊に分れて堡壘を圍み殊死して戰ふ而して李馬奔は艦隊より砲火を發して攻擊を助く。庄公遂に手兵を以て城内に入り血戰すサルセド勇を奮ひ苦戰甚だ勉む庄公陣殁し西軍漸くにして凱歌を奏し支那軍を追擊す。李馬奔新に五百の手兵を上陸せしめしが頽勢を挽回するの力なく敗卒を收めて呂宋島の西海岸に航す。數日にしてアグノ河口に至り揚言して曰く大に西人を破ると以て土民の服從を得河上四哩の地に城塞を築きて首府となす。サルセド報を得西人二百五十人土人千六百人を以て之を圍む。李馬奔防禦に力めしも其敵せざるを見るや一隊を城中に止めて攻擊軍を牽制せしめ間に乘じて海上に遁る。其止りしもの逃れて深山に入り今のイゴロテ支那人種 Igorrots - Chinese の祖先となると云ふ。自助せよ神助を得む Aide toi et Dieu t'aidera とは佛蘭西の古諺なり而かも西班牙人は此支那人の襲擊を免れたるは全く聖者アンドリューの助によるとなし是を以てマニラの保護神と定め毎年十一月三十日を以て其祝典を擧行す。

李馬奔のなほアグノ河口に據るや福建の總督は其隆勢なるを聞き艦隊を派して舊寇の所在を探らしむ。西班牙人使節を歡迎してマニラに伴ひ知事に面會せしむ。其後知事は支那の軍艦司令官の言を納れ其歸國の際使節を總督の許に派し通商條約を締結せしめんとす。マルチン、ラダ幷にゼロニモ、マルチンの二僧此任に當り書翰貢物を携へて總督を訪ひ鄭重なる待遇を受けしが支那の地に止る事を許されず。時に西紀一五七五年也。李馬奔敗後サルセドは呂宋（ルソン）北部に至り征服の事業を完成せんとせしが熱病の襲ふ所となり西紀一五七六年三月十一日を以てヰガン附近に死す。

比律賓列島の西班牙の版圖に入るや西班牙は是を以て新西班牙即墨是哥の附庸となせり。故に殖民地建設より以來本世紀の初墨是哥の獨立（西紀一八一五）以前迄

比律賓は同地と國有の艦隊を以て交通せり是をナヲス、ダ、アカプルコと稱す。蓋し上に記しゝが如く第一回の遠征はナヰダットより出帆せしも其後二世紀以上アカプルコを以て墨是哥に於ける通商港灣となせり。比律賓列島に於ける租稅は貢物より成り悉く皇室の所有たり。故に毎年三四月の頃支那商人の蓬船に乘じて來るに際し之を以て支那の產物と交易し一千五百梱を作し各梱皆其大さを同一ならしめ國有船二艘の毎年一回七月に及びて出帆するに當り官有商品として墨是哥に送る。而して商人中に一團体ありて一定の年限間殖民地に住し八千弗以上の財產を有するものは其商品の運送を托するを得たり。墨是哥にては又國有船の歸航するに當り比律賓の行政費として官有商品實價の如何に拘らず一定の恩賜金を送致せり。今西紀一六六五年六月六日の勅令に據るに墨是哥よりの扶助金は銀貨二百萬弗皇有貨物代五十萬弗計二百五十萬弗にして之に對する比律賓列島よりの納租は百七十六萬千十四弗なり故に純粹の補助額は七十三萬八千九百八十六弗なりとす。彼の墨是哥銀が比律賓に充溢し隨て支那地方に多額に輸入せられしは全く之が爲也。創始以後殆ど百五十年間比律賓列島の通商は全く毎年同一の

次序を以て行はれ敢て競爭なるものなかりき。其後貿易經營上多少の變遷を經西紀一八三〇年五月二十八日に至り西班牙政府マニラと外國との通商を自由になし同三四年より自由通商を實施す。

第七節　日本と葡西兩國人

伊太利エチチアの人マルコ、パオロ西紀一二七一年より同九五年に至るまでの間東洋に旅行し且久しく忽必烈帝の時元朝に奉仕せしが歸國の後見聞錄を著し東洋諸邦殊にジパング Zipangu の殷富なるを說けりジパングとは即ち日本國なり。闗龍が新世界を發見せしは全く此ジパングに到らんとせるに起れり。蓋し上古の地理學者アレキサンドリアのトレミー幷にタイルのマリナス等の說ける地球に關する謬見に加ふるに伊太利の地理學者トスカチリがマルコ、パオロの記載せる支那里四百六十五メートルを以て伊太利の一里乃ち千七百二十五メートルなりとし誤算せる結果葡都里斯本より日本に至る僅に經度百度に過ぎずとなせり然れども其實二百十度となす。而して百度とせば今の墨是哥附近たり。闗龍の新發見の

地を以て東洋印度の地なりとなしゝも怪むに足らず。然るに實際歐洲人の日本に來りしは閩龍の新世界發見の後五十年に在り。而して渡來の目的ありしにあらずして偶然漂着せるなり。

漂着者三人葡萄牙人フエルナム、メンデス、ピント。フランチスコ、ダ、モダ。クリストフオロ、ボラルホ是なり。ピント等暹羅を發して支那に至りラムパカウに於て同行者と別れて海賊の群に投じ洋上に他の海賊と會し其攻擊を受けしが偶暴風起り洋上に漂流する事二十三日にして一島に着す。即ち種子島也南浦文集の鉄砲記によればピント等の漂着せしは天文十二年八月二十五日即ち西紀一五四三年九月二十三日にして同島西村小浦に碇泊せしが里長の命により二十七日赤尾木津に入る。領主時堯出でゝ接し葡人の鐵砲を携ふるを見て其用に驚き臣下をして其術を得習せしむ。是を日本鐵砲傳來の起源となす。ピント等の支那寧波に歸着するや同地在住の葡人は日本の豐饒なるを聞きて陸續商船を送り最初は鹿兒島に於て通商を營みしが天文十九年即ち西紀一五五〇年より平戸に移る。其後大村純忠は横瀬(永祿五年)福田(同十一年)長崎(元龜元年即西紀一五七〇年)の諸港を開く。秀吉九州を平定するに際し長崎の葡人の所有に歸せんとするを見て之を沒收して公領となし單に通商を許す。時に天正十五年(西紀一五八七)六月十九日也。但し以上の事蹟と密接の關係ある基督教の事に至りては次節に於て詳述すべし。

西班牙人は比律賓列島發見の後二十七年即ち西紀一五四八年(天文十七)を以て豐前八ツ屋浦に來着せしより永錄十一年まで九州紀州等に兩三回來着す。降て天正八年(西紀一五八〇)に至り六月平戸に來着せしより以來慶長中まで二十余年年毎に渡海せしが慶長五六年より其來航を廢す。天正十八年(西紀一五九〇)秀吉原田孫七郎なるものゝ言を容れて書を比律賓列島の大守に送り降服を要む。大守恐怖して答使を派す時に秀吉征韓の軍を起し名古屋にあり使者を延見す。其後原田は又呂宋に至りしが慶長三年(西紀一五九八)秀吉薨去し出征の事遂に實行せられず。慶長十三年比律賓列島の大守ドン、ロデリゴ、デ、ニヴエロは呂宋在留の日本人に對して退去命を布き一面に於ては使を日本に遣して浦賀寄港を約しゝ事あり。

第八節　耶蘇會其他の布教事業(西紀一七三六まで)

西紀一五一七年獨逸の神學教授マルチン、ルーテル一度其意見九十五箇條をウヰツテンベルヒなる教會堂の門戸に貼布しゝより羅馬法皇に對する反對運動歐洲各國に起り所謂宗教改革の大變亂を生せり。是が爲に法皇の權勢は年と共に衰運に向ひしに西班牙の人イグナシヤス、ロヨラなる者蹶起して内部より舊教の改善を圖らんとして耶蘇會を組織し西紀一五四〇年法皇の認可を受けしより益活潑なる運動に出で曾に新教の隆盛に於ける北歐諸國を侵略しゝのみならず遠く半世紀前發見の各地に基督教を擴布せり。而して東洋に於ける其布教は西紀一五四一年四月七日を以て里斯本を發し翌年五月六日印度臥亞（ゴア）に着せるロヨラの高弟フランソワ、クサウイエルを以て嚆矢となす。今其來着後の事を記するに先ち中古に於ける支那印度地方基督教傳播の一端を略叙せん。

西紀四百三十年前後東羅馬の首府コンスタンチノーブルにネストリヤスと稱する高僧あり新義を唱へしを以て衆僧に追はれて配所に死しゝが其徒弟堅く師の說を改めずネストリヤス派と稱す。波斯人多く之を信奉しゝを以て同國王遂に之を以て國教となし教主をセリユーシアに置き東方諸國に布教す。彼の西紀五五一年を以て蠶卵をコンスタンチノーブルに初めて持ち行しネストリヤス派の僧侶は久しく支那にありしと云ひなほ其他の證跡より見るに同派の僧侶が支那に赴きしは西紀五〇五年（梁天監四）の頃なるべし、其後西紀六百三四十年の頃其僧阿羅本なる者長安に至りて唐太宗の保護を受け宮中にありて其經文を飜譯せしかば太宗有司に命じて波斯寺を造らしむ。其徒自ら景教と號せしを以て高宗の時は更に諸洲に景寺を置くに至れり。西紀七四五年波斯寺を改めて太秦寺となす蓋し時に回々教徒波斯を平げて國人をして悉く其教に入らしめしを以てネストリヤス派の本源たる基督教の行はるゝ東羅馬即ち太秦を以て其寺院に命名しゝなり。西紀七八一年西京太秦寺僧景淨なるもの景教碑を建つ此碑の發見されしは西紀一六二五年にして以來支那學者の熟知ずる所なり。然るに武宗の時に至り佛教と共に併せて景教を廢しゝかば遂に其信徒を見ず。

印度に於ける從來の基督教徒の起源に付きては三說あり。最も廣く信仰さるゝは之を以て使徒トーマスの布教に歸するの說にして其說によればトーマスは南方印度に於て傳道事業を試み數處に教會を設け西紀六八年マドラス附近の『小丘』に

於て刑死に遭ひしと云ふ此論據となせる諸説は頗る疑ふ可きもの多しと雖も西紀第二世紀の終に方り羅馬の商船がマラバルの海岸に於て基督教徒の存在を實見せしは事實なり。或は云ふトーマスの布教せるは上古の印度即ち今の波斯阿富汗地方にしてマラハルの海岸は使徒バルソロミユー之を布教すと。第二説はメーニ派のトーマスなるもの西紀第三世紀の終に當りて印度の改宗を行ふとなす。第三説は西紀第八世紀に於てマラバルに住居を定めしアルメニアの商人トーマスカナなるもの同地にありて土侯の信用を得南印度の教會を再建せりとなす。要するに西紀第五世紀に於て歐羅巴亞弗利加兩大陸より驅逐されしネストリヤス派が亞細亞に傳播して南印度の基督教も亦其教義に化せられしは疑ふ可らず。葡萄牙人が印度に至りしは恰も此基督教徒の最も多き地なりしかば西紀一五六〇年を以てゴアに異派糺問所を設け同九九年臥亞の大僧正ダ、メネセスの盡力によりウダヤムブラに宗教會議を開き全くネストリヤス派を禁ず。然れども メネセス去りて其決議の効力漸く重せられず蘭人が西紀一六六一年より葡人と軋轢を生ち同六三年ヨーチンを占領するやマラバルの基督教徒、は宗教上の獨立を回復す。且葡人の洋上の監視行はれさるに至り西紀一六六五年アンチオクより高僧マアル、グレゴリイを派出しゝがグレゴリイはネストリヤス派に屬せずしてヤコブ派に屬しゝかば是よりネストリヤス派は全くマラバル地方に見る能はざるに至れり。以後同地の基督教徒はシリア派羅馬教徒ヤコブ教徒の二派に分れ是は純然たるマアル、グレゴリイの徒弟にして彼はヤコブ派の教理を信ずると共に羅馬法皇の最上權を認む。

西紀一五〇〇年フランシス派の僧侶は布教の爲に蕃薯牙を發して印度に着せしが印度に赴きし第一の高僧はドミニツク派のヴアルト、ヌネス(西紀一五一四—一七)にしてフランシス派のジョヲン、ダルボクルケは臥亞に定住せる第一の高僧なり(西紀一五三九—五三)西紀一五四二年フランソワ、クサウイエルの來着せるより東洋に於ける耶蘇會の事業を開始し基督教の進歩は大速力を加ふるに至れり。クサウイエルの最も力を盡しゝはマラバル海岸及マヂュラ並にマドラス南方沿海の地にして死後聖師の號を贈られ其遺骸は臥亞の銀龕中にあり。臥亞は西紀一五七七年を以て大僧正の任地となりしが同九六年より九九年まで其任にありしア

ウガスチン派のダ、メネセスの事業は已に記しゝが如し。西紀一五九五年フランソワの甥ゼロニモ、クサウイエルは莫臥兒帝アクバルの宮廷に入り布教を開始す。マドラス地方の耶蘇會の布教は西紀一六〇六年に始まり其開祖ダ、ノビリは同五六年を以て死す而して其牧師の多くは葡人なり。カルナチックに於ける同會の事業の端緒は佛人の開きし所にして西紀一七〇〇年ルイ十四世の計畫に基ける所少からず。教育出版等に於ける耶蘇會の効績も頗る大なるものあり西紀一七四六年頃を以て物故せしベスチの如き殊に有名なり。其他農業工業等の改善を試みし事又多し。要するに葡人の東洋に於ける權勢は速に衰運に向ひしも其耶蘇會徒の成功しゝ事業多きを以て能く歳月の磨滅するを得ざるの記念を遺せり。

羅馬法皇の支那布教に着手しゝは遠く西紀一二八八年の昔にあり。此年法皇モントコルヰノのジヲンなるものを支那に遣しゝに元の世祖之を優待して傳導に從事せしめ無數の信者を得しが元朝亡びて其教を傳ふる者なし。西紀一五五二年嘉靖三一。フランソワ、クサウイエルは使節と同行して臥亞を發して支那に向ひしが滿剌加に至りて使節抑留せられしを以て單身支那に至りしも澳門の南西三十哩なる三篭島に死沒す。西紀一五八一年萬曆九伊太利の耶蘇會徒利瑪竇(マテヲ、リッチ)香山澳の澳門に着し翌年遂に廣東地方官の任所肇慶に住居し且家屋を建築するの許可を得しが是を耶蘇會支那布教の第一着手となす。澳門上陸の後二十一年西紀一六〇一年一月四日萬曆二九其同志バントージアと共に漸く北京に至り方物幷に基督母子の圖を献ず。万暦帝其遠來を嘉みし住所を給しゝを以て爾來國人を改宗し且數學哲學幷に宗教上の著述をなし西紀一六一〇年萬曆三八を以て死す時に年五十八歳なり。其改宗せし徒弟中最も有名なるを徐光啓幷に其女カンジダとなす。利瑪竇死後ロンゴバルゲ其職を襲ぎ西紀一六一六年萬曆四四一度牧師追放の令に接しゝも全く其業を中止せず。西紀一六二九年崇禎二獨逸人湯若望(アダム、シアル)徐光啓の推薦を以て暦法を正し明帝の信任を得たり。明清交代の際に至り布教事業は大に困難を極めしも北支那の牧師は滿洲朝に仕へしを以て湯若望の如きも順治帝の信任を受け次で掌欽天監事に任せらる。南支那の牧師は心を明朝に寄するもの多く西紀一六五〇年永曆四明の桂王の皇太名烈納(エート)が諭文を羅馬法皇に送りしは史家の知る所なり。然るに永暦帝殂して南支那羅馬教徒の望絶ゑ順治帝殂して北支那耶

蘇會徒大攻擊を蒙り其年八月十六日湯若望七十八歳の高齢を以て悲痛を忍ぶの力なく絶命す。湯若望は支那の朝廷に仕ふる事前後三十七年五朝を經たり。西紀一六七一年（康熙一）。康熙帝新政の後耶蘇會徒等復敕に會ひ南懷仁（フェルヰエスト）は是より前二年曆算の誤謬を指摘したるを以て欽天監々副に任せらる。南懷仁は又熙帝の爲に大砲を鑄造せしが湯若望も亦西紀一六三六年崇禎帝の爲に之を試みし事あり。其後西紀一七〇八年（康熙四七）より西紀一七一八年（康熙五七）に至るの間支那全土測量の時はリージス、ブーベ、ヤルトウス等の耶蘇會徒之を統理し西紀一七六一年（乾隆二六）再調査の時はベノア、幷にアルレルスタイン之を總轄す。尼布楚條約締結の際に於ける耶蘇會徒の功勞の如きは其記事中に記す可し。初め利瑪竇が在支那那蘇會徒の規定を定むるに際し祖先禮拜幷に孔子禮拜は之を俗事と認めて默許しゝより後年ドミニック派等の牧師支那に渡來せるに至り遂に大紛爭を生し西紀一七一八年（康熙五七）清帝は利瑪竇の敕に背馳するものを嚴禁す。西紀一七二四年（雍正二）。學術上要用の人物を除くの外全く天主敕牧師の來住を禁じ同三六年（乾隆元）。乾隆帝又其禁令を厲行せしむ。此以後より歐洲諸國又大に亂れ異邦の布敕に留意するもの少かりしを以て支那に於ける基督敕は益振はず以て西紀一八五八年に至る。

西紀一五四八年（天文一七）日本薩摩の一少年半次郎なるもの人を殺して印度の臥亞に遁れ基督敕の洗禮を受けし後日本布敕の好望なるを說く。フランソワ、グサウィエル翌年四月を以て臥亞を發し半次郎を伴ひて同年八月十五日（天文一七、一二、一八）。鹿兒島に着す。先島津氏より布敕の許可を得次で日本語を學習し四十日を過ぎざるに已に使徒行傳の註解等を譯す。然るに翌年葡船鹿兒島に來らずして平戸に着しゝより島津氏の保護を失ひしかば乃ち平戸に移り十月下旬山口に向ひ西紀一五五一年（天文二一）二月京都に至る。然るに其左右の人士に賄賂を送るの資なきが爲に皇帝にも將軍にも謁見するを得ずして空しく西歸し歸途山口幷に豐後を經同年十二月同地を發して印度に歸り翌年二月臥亞に着す。爾來日本の布敕は益進歩し西紀一五五八年（永祿二）には敕師ウイレラ頭髮鬚髯を剃り日本服を着して京師に入り次て將軍義輝に謁見す。西紀一五六四年（永祿七）敕師トレー平戸に天主堂を建て天門寺と稱す是本邦耶蘇會堂設立の始也西紀一五六八年（永祿一一）織田信長敕師フロエーを京都に迎へ天主敕の爲に京都四條坊門に南蠻寺を建て寺料を寄附す。かくて高僧ワリ

ニャンが印度に歸るの前年西紀一五八一年（天正九）日本の基督教徒十五萬寺院二百牧師五十九人に達す。ワリニャン歸國の時大友大村有馬の三侯は使節を羅馬に遣はしゝが其使節は西紀一五八二年二月二十二日（天正一一、一三）、長崎を發し西紀一五八五年三月二十日を以て羅馬に達し次で法皇に謁見し往復八年の光陰を經過して西紀一五九〇年（天正一八、六、二〇）、日本に歸る然るに是より先秀吉九州平定の時長崎在留の教師ガスパルケロの擧動を怒り「日本國は神國たる處切支丹より邪法を授候義太以不可然事」として其禁令を布く時に西紀一五八七年（天正一五）なり。西紀一五九六年（慶長元）西班牙商船偶ま土佐に漂着し船長世界の圖を示して西班牙の範圍廣大なるを誇り宗教を以て領地擴張の手段となすを說きしより秀吉益基督教を嫌忌す。其後蘭人東洋貿易を開始するに至り西紀一六一一年（慶長一六）葡人の陰謀あるを家康に告げしかば家康直ちに人を九州に遣して傳教師を追ひ翌年更に禁令を布く。教徒攝津高槻の城主高山友祥志摩鳥羽の城主內藤如安等百余人西紀一六一四年（慶長一九）を以て追放せられて呂宋に赴く。西紀一六三七年十二月十一日（寛永一四、二、五）に至りて島原の基督教徒不軌を謀り勢猖獗にして容易に下らず翌年四月十二日（二、八）に至りて平定す。是より德川政府は益基督教の制禁を嚴にし且葡人の來航を拒み翌西紀一六三九年（寛永一六）葡船三隻長崎に來りしも之を却け翌年又一隻來りしかば其船を燒き六十四人を戮し十三人を免して支那船に托して還らしむ。是より葡人も復來らず。基督教制禁の方法はコロビ或は踏繪等の方法を用ゐて信徒の改宗を確め其之を拒む者は皆死刑に處しゝかば前後刑に行はれしもの三十餘万人の多きに及びしと云ふ。

第二章　滿洲の興起幷に其支那統一

（西紀一五八三――西紀一六九七）

第一節　清室の興起幷に其滿洲の兼併

長白山の東布庫里山の麓に池あり布爾里湖と曰ふ。相傳ふ三天女あり來り浴しゝに神鵲あり朱果を銜みて季女佛庫倫の衣に置く。佛庫倫之を呑みて懷姙し男子を設く。長ずるに及びて佛庫倫其子に告げて曰く天汝を生して亂國を定めんとすと姓を愛親覺羅名を布庫里雍順と定め空を凌きて去る。布庫里雍順小船に乘じ流に順ひて下り岸に登る。會ま其地に三姓あり互に雄長を爭ひしが之を見て相議して迎へて國主となす。自ら國を建て長白山東俄漠惠の野額多力城に居る。城は瑚爾哈河の源勤福善河の西岸に在り寧古塔を去る西南三百餘支那里金の上京の地に近し。其後數傳して肇祖に至り頗多力城の西千五百支那里の地に移り呼蘭哈達山下の赫圖阿拉に居る。今の興京是なり。肇祖四世の孫を興祖となし景祖顯祖を經て太祖に至る。乾隆帝の上諭に據るに金の先は靺鞨部に出で古肅愼の地なり。我朝肇興の時舊都滿珠と稱し所屬を珠申と曰ふ。後漢字に相沿り訛りて滿洲となすも其實即ち古の肅愼にして珠申の轉音となすと。又曰く我朝姓を愛親覺羅氏と曰ひ國語に金を愛親と曰ふ。金源同派の証となすべしと。清國の始祖が靺鞨の後裔にして渤海及び金と同種族たるや明らかなり。魏源曰く太祖の生年より逆算するに肇祖は明の正統景泰の際に當たるべく長白發祥の始祖は當さに遼金の末造にある可しと。

太祖高皇帝諱を努爾哈赤と云ひ顯祖の長子にして明の嘉靖三十八年（西紀一五五九以下倣之）を以て生る。偉軀大耳にして聲洪鐘の如し。長じて武略あり英雄世を蓋ふ。國人稱して聰明貝勒と云ふ。當時諸國紛亂し滿洲別に蘇克素護、渾河、完顏、棟鄂、哲陳の五部あり長白山に訥殷、鴨綠の二部あり是を明の建州衛の地となす。東海三部渥集、瓦爾喀、庫爾哈是なり即ち野人衛の地なり。扈倫國の四部は葉赫、哈達、輝發、烏拉と稱し滿洲の北に當り明の海西衛の地なり。皆其居住の地の河流によりて名を得たり即烏拉輝發二河は松花江に入り哈達葉赫二河は遼河に入る。海西衛又南北二關に分れ哈達を南關とし葉赫を北關とす。以上の諸國皆金代部落の遺跡にして城郭あり土著

して射獵を事とす又一種の居國にして蒙古行國の比にあらず。各一方に割據して王號を稱し强は弱を凌げ衆は寡を犯し攻戰爭奪止む時なし。

明の萬歷十一年一五八三太祖年二十五にして兵を起して尼堪外蘭を討ち景顯二祖の爲に其讐を報ゐんとす。初め尼堪外蘭蘇克蘇滸河部の圖倫城に在り陰に明將季成梁を誘ひて沙濟城を攻め勢に乘じて古勒城を圍む。城主阿太章京の妻は即景祖の長子禮敦巴圖魯の女にして太祖の從姉たり。景祖報を得て大に驚き孫女の安危を憂へ顯祖と共に援軍を率ゐて城に入る。尼堪外蘭其急に下し難きを見て城中のものを給き其主を殺して降らしめ其出るを待ちて盡く之を屠り併せて二祖を害ず太祖大に怒り此年五月兵を擧げて圖倫城に外蘭を攻む。外蘭倉皇遁れて嘉班城に入りしが再び太祖の兵を受くるや遠く遁れて城を鄂勒琿に築き諸部の中隔せるを恃む。太祖乃ち先近部よりはじめ十二年一五八四棟鄂部の翁鄂洛城を攻め十三年一五八五渾河部の界藩城、棟嘉城、薩爾滸城を攻め十四年一五八六蘇克素護河の爪爾佳城渾河部の貝琿城、哲陳部の托摩和城を攻めて皆之を下し遂に諸部を越へて尼堪外蘭を其居城に襲ふ。明人外蘭を執へて太祖に送り且以後每歲銀八百兩の輸送を約して和好を通ず。十五年一五八七太祖巴圖魯額亦都に命じて哲陳部の二城を取らしめ十六年一五八八又完顏部に克ち悉く滿洲五部を略取し將に海西部と其雄を爭はんとす。

萬歷十九年一五九一又兵を派して長白の鴨綠江部を征服せしより遠近益恐怖の念を生じ太祖の志の小ならざるを知るや力を協せて之を圖る。萬歷二十一年一五九三扈倫の四部をはじめ蒙古の三部科爾沁、錫伯、扎魯特幷に長白山の所屬なる珠舍里、訥殷二路の兵凡三萬三路より來侵す。太祖將士を諭して曰く烏合の衆は其心一ならじ前鋒を殪さば必ず背進せむ之に乘せば必ず大勝を得むと。古呼山に至り險に據りて陣す。葉赫の貝勒布齊、衆に先じて進み乘馬木に觸て踣れ陣殁す。敵兵大に亂れ衆軍遂に潰ゆ斬首四千餘級烏拉の貝勒の弟布占泰を擒にし軍威大に震ふ。此年珠舍里、訥殷二部を滅す。二十五年一五九七扈倫四部使を遣し舊交を修め葉赫は其女弟を太祖に納る。初め哈達四部の盟主たりしが漸く其權勢を葉赫に奪はれしを以て援を明に乞ひしが許されず乃ち太祖に求む。然るに葉赫の言を信じて援軍の將を執へしかば太祖兵を出して之を征し盡く其城寨を降す時に二十七年一五九九九月なり。明使抗議する所あり太祖復哈達の貝勒を立てしも其後哈達は明の恃む可らざるを見て降を

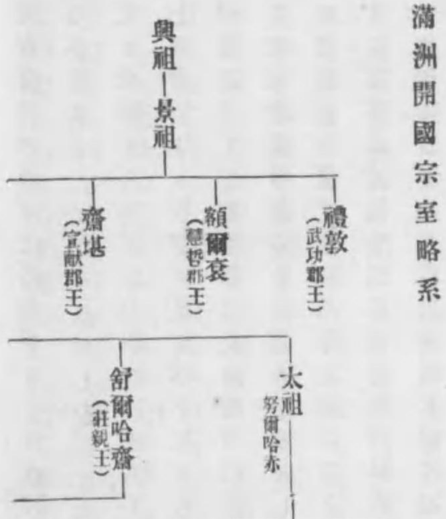
乞ふに至れり。是に於て明は塞の南關を失へり。

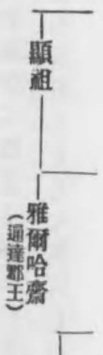
萬歷三十五年〇一六七輝發の貝勒約に背くを以て征討して之を平ぐ。四十一年一六三烏拉を征す是より先布占泰(ブーラヤンタイ)釋されて國に歸り國主となる。三十五年其所屬の瓦爾喀部の來歸するや布占泰兵を出して之を阻げ四十年には又盟に背きて渥集部の虎爾哈路を侵せしを以て太祖親ら烏拉河に臨み其五城を拔けり。此年正月太祖又烏拉を親征し伏爾哈城に戰ひて大勝を獲たり。布占泰遁れて葉赫に走り烏拉遂に亡ぶ。秋太祖進みて葉赫を征す。葉赫明に訴へて曰く扈倫四國中滿洲已に其三を取り今復た我を侵す行く〳〵必ず明に及ばむと明將援兵を出す。太祖七城十九寨を下して師を旋す。葉赫明の援あるを恃み滿洲を侮る。太祖乃ち意を決して明を犯し其撫順清河二城を取るの後天命四年一九六正月深く葉赫の地に入り其二十餘寨に克つ。葉赫急を明に告げしかば明乃ち四路の師を起す。太祖其大軍を破り此秋開原鐵岭二城を取り葉赫の背を拆し遂に貝勒錦台什を東城に其弟布揚古を西城に圍む。東城先づ陷り布揚古次で降る。是に於て明の塞は復た其北關を失へり。

扈倫四部の外征撫に力を用ゐしものを東海三部及び黑龍江の索倫部等とす。瓦爾喀部は瓦爾喀河の沿岸に部落をなし興京の南に當り朝鮮に近し。萬歷二十六年一五九八太祖長子褚英をして之を征せしむ。三十六年〇一六八優斐城長五百戶を以て烏拉の境を越えて來歸す其後部落の朝鮮に流寓するもの皆來歸す。天聰九年一六三五武巴海等に命じ寧古塔(ニンガタ)より往きて瓦爾喀を征せしめ明年復た兵を分ちて地方の烏嶺を取る瓦爾喀部服す。虎爾哈部は虎爾哈河の灌水區域なり。萬歷三十九年一六一一額亦都に命じて東海虎爾哈部の札庫塔人を攻めしむ天命三年一六一八路長百戶を率ゐて來朝す翌年又同部を征す崇德八年阿爾津等をして虎爾哈を黑龍江に征せしむ虎爾哈部服す。渥集部は虎爾哈部の東連山茂林の中にあり。萬曆三十七年〇一六九より三十九年一六一一に至るまで皇子阿巴泰幷に額亦都扈爾漢等に命して代る〳〵渥集部を攻めしめ其各路を取る渥集部服す。其他東海の小部中薩哈連路使犬路等は天命元年一六一六安費揚古等の遠征軍に降り且庫頁部(樺太島?)は同二年一六一七を以て降り卦勤察部は同十年一六二五を以て降れり。蓋し東海諸部は吉林寧古塔以東にあるを以て烏拉部は東海と滿洲との間に介在せり。故に烏拉部一度衰運に向ひ東海部相次て服す。今の吉林府は即ち烏拉の故城なりと云ふ。

黑龍江部の征討は天聰九年より始まる。太宗索倫の騎射に巧なるを聞き覇奇蘭に命じて兵を率ゐて黑龍江を越ゑしむ。崇德元年（一六三六）科爾沁部索倫を侵すの報あり しかは部長をして歸部せしむ同五年索倫叛服常なきものあるを以て再び之を征し翌年に至りて全く之を征服す。索倫は黑龍江の極北興安大嶺の麓にあり。是に於て遼金の部落悉く滿洲に併有せらる。

滿洲開國宗室略系





第二節　明の關外の占領

萬曆四十四年（一六一六）太祖年五十八建元して天命と云ひ國を滿洲と號す。時に海西の三國已に平くと雖も葉赫獨り明の援を恃みて下らず。太祖乃ち先づ明兵を挫き次で葉赫に及はさんとし兵士を休養する事二歲の後天命三年（一六一八）を以て師を興し明を伐つ。出陣に臨みて七大憾を以て天地堂子に誓告し步騎二萬を率ゐて撫順城を圍み遊擊李永芳を降し秋復た清河城に克ちて副將鄧儲賢を斬る。四年正月葉赫を征す二月明の遼東の經略楊鎬兵二十萬を瀋陽に集め四路より來り攻む。總兵杜松は中路の左に出で渾河より撫順に入り、李如柏は中路の右に出て清河より鴉鶻關に入り、馬林は北路に出で開原より葉赫兵二萬に會して三岔口に入り劉綎は南路に出で朝鮮兵二萬に會して寬甸口に入り以て滿洲の國都に向ふ。每路各兵六萬大兵四十七万と號す。太祖各路の兵を城中に集め議して曰く南北二路は路險なり

大兵必ず中路よりせむ此を破らば他路患るに足らずと。杜松勇名あり敵を輕んじ首功を立てんとし則に先ち月の二十九日を以て撫順關を出て薩爾滸山に屯し自ら兵二萬を以て界藩城を圍む。太祖諸貝勒に命じ二旗の兵を以て界藩を援けしめ親ら六旗の兵を統へて薩爾滸山を攻撃し大に明兵を破る杜松矢に中りて死す。明の北路の兵之を聞き急に尙間崖に據る太祖馳せて之に赴き大勝を得復た其別軍を芽葉山に破る葉赫の兵は已に中途に於て退軍せり。楊鎬報を得て李如柏劉綎に飛使を發して進軍を止む。然るに綎の軍は深入して都城を距る僅に五十支那里の地に在り奮戰して死す。別軍富察の地にあるもの又大敗し部下の朝鮮兵五千滿洲に降る。明と滿洲との興亡是役に肇ると云ふ。蓋し寡を以て衆に敵せむと欲せば其兵力を集中し且之を行ふに神出鬼沒の伎倆を要する事此役に於ける太祖の如くならざる可らず。是即後年歐洲の近世史上に驍勇の名を博せし普のフレデリック佛のナポレオンが用ゐし戰略なり。六月開原城を拔き七月鐵嶺城を下し八月葉赫を滅す。茲に於て評言相同きの國盡く滿洲の有と也其驅城朝鮮より黑龍江に抵る。明帝楊鎬の職を奪ひ熊廷弼をして代らしむ尋て天命五年萬歷帝崩じ皇太子位に即きしが在位僅に三旬にして崩じ其子天啓帝位を嗣ぐに及び讒者の言を納れ熊廷弼の辭職を許可し袁應泰を經略に任ず。應泰吏務に通ずるも將才にあらず。此頃歐洲兵即ち葡人明帝を援けんとせしも其恭京に至りしもの僅に二百人に止まりしを以て曾其精鋭なる大砲を献せしのみにて實際戰に加はらず。六年一六二一三月太祖大軍を以て瀋陽城を攻め七萬の明兵を破り總兵賀世賢等を斬りて城を拔き且遼陽の援兵を渾河に擊ち總兵陳策等を斬る。明兵溺死するもの多し。又渾河以南の援軍を擊ち副將董仲貴等を斬る。太祖議して曰く瀋陽已に拔く勢に乘じて長驅して以て遼陽を取るべしと。袁應泰瀋陽の落城を聞き太子河の水を引きて城濠に注き隍に沿ひて火器を列し遼陽の守備頗る嚴なり。太祖先づ其逆擊の軍を破り次で城東の水口を塞き城西の水口を洩し遂に西城の一面を奪ふ。城兵炬を列ねて防戰せしが明旦に及びて城遂に陷り袁應泰火を城樓に放ち印を佩びて焚死す。此に於て遼河以東の堡寨營驛及び海蓋、金、復、耀の諸州大小七十餘城俱に下る。太祖遼陽の地要害の區なるを以て都を茲に遷す。遼陽の陷るや市民の出でゝ降るものは皆髮を剃らしむ是を史上豚尾の記事ある嚆矢となす。

熊廷弼復た出でて經略となり三方布置の策を建て廣寧と登萊とに巡撫を設け山海關にありて節制す。廣寧巡撫王化貞是より先已に軍事を部署して廷弼の命を奉せず曰く願くは六萬の兵を得て一舉して蕩平せむと。廣寧の駐兵十四萬と稱するも廷弼の關上一卒なく徒に經略の虛號を擁するのみ。兵部尚書張鶴鳴深く化貞を信じ將に廷弼に代らしめんとす。天命七年一六二二正月太祖遼河を渡り西平堡を陷れ進みて廣寧の援兵を破り追擊して平陽橋堡に至る。會ま廣寧城中欵を敵に通ずるものあり。化貞爲す所を知らず單騎城を棄てゝ走り大凌河に至りて廷弼に會す。廷弼、化貞の哭するを見て且笑ひ且憤り手兵五千人を授けて殿たらしめ雜民數十萬を護して關に入る。太祖乃ち廣寧城に入り錦州、大小凌河、松山、杏山等の四十餘城皆降る又義州城を攻めて之を取る。三月城を遼陽の東五里の地に築き之を東京と稱す。十年一六二五復た都を瀋陽に遷す今の奉天府是なり。此年又明の旅順口城を下す。廣寧の守を失ふや明廷は大學士孫承宗をして經略の任に就かしむ。承宗袁崇煥(エンソンホアン)をして寧遠(ニンユエン)城を築かしめ且諸將に命じて錦州大小凌河等の諸城を守らしめ幾と遼河以西の舊地を復す。明の太監魏忠賢の黨承宗を排し高第を以て代らしむ。高第關外諸城を撤ずべきを說き悉く錦州大小凌河等の諸城を棄てしも惟り袁崇煥寧遠城にありて命を奉せず。天命十一年一六二六太祖大擧して寧遠城を征し城を越ゆる五里山海關の大路を横絶して陣す。崇煥固守し閏卒に命じ西洋の巨礮を發せしむるに一發にしてよく數百人を傷く。滿洲兵再び攻めて再び克つ能はず遂に圍を解きて瀋陽に還る。太祖甫めて二十五歲兵を起してより以來連戰連勝檜寧遠城下らざるを以て甚だ憚はず。此年八月太祖崩ず。年六十八第八子皇太極立つ是を太宗文皇帝となす母は葉赫國王の女なり明年を以て天聰元年となす。明の寧遠の巡撫袁崇煥太宗の即位を聞きて賀使を派し且好を修めんとす天聰元年一六二七太宗書を以て答へて曰く曾て我師の廣寧に克つや諸將皆山海關に入らん事を乞ひしも我皇遼金、元の漢地に入りて漢俗に化せしを思ひ山海關を劃して各〻國を爲さんと欲し敢て入關せざりき。是中原を爭ふの心なきによらすんばあらず若し每歲の餽遺をして約の如くならしめば敢て和せざるにあらずと。時に太宗朝鮮に事あり崇煥陽に和を議し陰に舊疆を復さんとの意あるを以て和議遂に要領を得ず。會ま朝鮮征討の兵凱旋したるを以て五月太宗明を攻めて大凌河城を取り進みて錦州城を圍

み寧遠を攻む。崇煥城中に在り副將等城を背にし濠に據り火器を列ねて防戰す遂に兵を收めて歸る。太祖兵を起してより明兵風を望みて潰え敢て戰守を議するものなかりしが崇煥に至りて初て之を唱ふ。然るに崇煥魏忠賢の黨に憚ばれさるを以て一旦其職を辭しゝが天啓帝崩じ太弟崇禎帝位に即き忠賢自殺せしより復出でゝ師を督す。時に天聰二年（一六二八）なり。此年崇煥總兵毛文龍（モーウンロン）を以て滿洲に通ずとなし之を殺す。毛文龍は水軍を領し天命六年以來遼東の海島にありて常に滿洲の患とする所たりしが以後其部將等各一方に割據して明朝の命を奉せず。登州の參將孔有德、耿仲明は天聰七年を以て、廣鹿島の副將尙可喜は翌八年を以て皆舟師を以て滿洲に降れり。

天聰三年十月太宗大舉して明を伐たんとし蒙古兵を嚮導となし諸將喀喇沁部の青城に會し軍略を頒ち攻進す。左翼龍井關に克ち右翼大安口に克ち共に邊墻內に入り十一月三日軍を合して遵化城を攻めて之を下し勢に乘じて燕京に逼る。太宗親ら城北の土城關の東に營し兩翼兵其東北に營す。明の總兵滿桂等得勝門外に屯し袁崇煥錦州總兵祖大壽と共に來りて沙窩門外に屯す。明帝反間の言を信じ崇煥敵に通ずとなして之を獄に投ず。祖大壽驚きて居城に奔る。十二月太宗滿桂の軍を永定門外に破り和を議するの書を德盛安寧二門の外に分置し軍を移し薊州を略して東す。翌四年正月永平、遷安、灤州の諸城に克ち二月師を班して瀋陽に歸る。明の馬世龍各路の兵二十萬を統べ袁崇煥の後任者孫承宗の軍と聲援を通じ五月十日先灤州を攻む。二貝勒阿敏等兵を按じて動かず遂に永平等の地を棄てゝ還れ歸る。太宗大に怒り阿敏の死を免じて幽禁す。五年紅夷の式に倣ひて大礮を鑄造し漢軍をして火器を演習せしめ八月復大凌河城を攻む。時に承宗已に關內の四城を復し又關外の舊疆を理め大凌河城修築將に功を奏せんとす。滿洲兵四面之を圍み軍を分ちて錦州の援兵を絕つ。總兵吳襄、宋偉等の兵來りて大凌河を援け小凌河を越ゑて陣す。太宗軍を分ちて二となし右翼は宋偉の營を衝き左翼は吳襄の營に趨り之を破る。大凌河城已に援なく糧盡き人馬を殺して食ふに至り總兵祖大壽遂に出てゝ降る仍て城を毀つ。

其後天聰八年（一六三四）七月太祖復た明を征して宣化府城の東南に至り營を駐め兵を放ちて附近の地方を縱略し又山西省の各地を攻略す。蓋し深く明の腹地に侵入す

るを以て軍略の得たるものとなすなり此年瀋陽を以て盛京となし赫圖阿喇城を以て興京となす。九年貝勒多爾袞、揮漢國を降し其傳國璽を得朔州より寧武關に闖入して代、忻、應、惇の四州を略し明兵六千人を斬る。十年四月崇德と改元し天下を有するの號を定めて大清と曰ふ。當時國勢逐日隆盛に趨くに際し元の裔孫たる揮漢より傳國璽を得たるを以てなり。此の年又朝鮮に師を起さんとし秋武英郡王阿濟格等に命じ牽制の爲め明を征し鍋石口より居庸に入り昌平を拔き燕京に迫り遂に十二城に克ち人畜十八萬を俘にす。三年九月睿親王多爾袞克勒郡王岳託等兩路より明を伐ち通洲に會し涿洲に至り八道に分れ一は山に沿ひ一は運河に沿ひ山河の間六道並ひ進む。明兵抗する能はず眞定廣平、順德、大名の諸府皆清兵の蹂躪に委す。清兵遠く山東の臨清州に至り運河を渡りて濟南を破り德王を執へ凡五十餘城を下し人口四十六萬を擒にす。太宗親ら錦州を攻め以て明の兵力を分ち多爾袞等の退軍を易からしむ。翌四年四月多爾袞凱旋す。太宗謂へらく大軍屢ゝ塞に入るも明の尺寸の地を獲ざるは山海關の阻隔するが爲なり而して關を取らんと欲せば先關外の四城を取らざる可らずと崇德六年多爾袞等に命じて錦州を攻めしめしに其急に攻めざるを見て震怒し鄭親王濟爾哈朗をして之に代らしむ。濟爾哈朗長圍を築きて之を困しめ并せて松山杏山等援兵の路を扼し明の薊遼總督洪承疇、曹變蛟吳三桂等八總兵の軍十三萬を以て寧遠に集り進みて松山に至る。太宗之を聞きて親ら大軍を率ゐて赴援し先敵の糧道を絶ち各處に伏兵を設く。明兵糧績が尽き果して遁れ前後清兵を受け大敗す死者五万三千余に達し松山の餉援皆絶たる。七年二月松山ノ副將夏承德密に質子を送りて內應し清兵其城に入る。洪承疇捕虜となり曹變蛟等戰死す。錦州圍まるゝ事一載松山の落城を聞きて亦降る即ち塔山、杏山に克つ。是に於て明國上下大に驚き始て和議を決し使を錦州に派す。携ふ所の書兵部尚書陳新甲に對する敕諭にして國書あらざるを以て太宗報せず。明廷再び使を派して和議を講せしも宮中なほ和議を好まざるものあり議遂に行はれず、十月復た貝勒阿巴泰等に命して明を伐たしむ。左翼は界山より右翼は鴈門より入りて薊州に會し直に山東兗州に至り三府十八州を下し人民三十六万九千人を俘にす。翌年六月凱旋す。明軍敢て抵抗するものなく城を閉ぢて出てず。明萬曆の末より以後軍費漸く增加し來り前後千六百七十萬の額に達し天下兵餉の半を關東に用

ゆ。而して崇禎帝即位の初に方りて流賊大に中原に蜂起し延安の張獻忠米脂の李自成等人民の增租に苦むに乘し勢頗る猖獗にして或は百萬と稱し或は數十万と稱し至る所城を破り藩を陷る。明朝の滅亡旦夕にあり。清の諸將一擧して燕京を取らん事を請ふ。太宗許さず天時を待つ。崇德八年（一六四三）八月九日太宗崩ず年五十二。

第三節　北京の陷落幷に福王唐王の割據

世祖章皇帝諱福臨太宗の第九子なり年甫めて六歲にして位に即く。鄭親王濟爾哈朗睿親王多爾袞二人を以て國政を理せしむ。明年を以て順治と改元す。順治元年（一六四四）四月睿親王を以て奉命大將軍と爲し師を率ゐて明の關外の地を收め且中原を經略せしむ。是より先明の流賊李自成連戰各地を陷れ遂に京師に偪りしかば明帝懸く關外の四城を撤し寧遠總兵吳三桂（ウーサンクイ）を召して關に入りて之に備へしむ。三桂寧遠の兵民五十万を率ゐて西し三月二十日を以て豐潤縣に至れば李自成已に北京を陷れ崇禎帝崩御の報ありしを以て敢て進まず。自成二十二日を以て帝位に即き國を大順（シヨウン）と號し永昌と改元す。已にして自成兵二萬を派して東して灤州を攻め山海關に向ふ。三桂乃ち兵を回して之を擊ち其衆八千を降し急に使を遣し援を清室に乞ふ。時に睿親王多爾袞未だ寧遠に至らず三桂の書を得て即日兵を進め寧遠を踰ゑ山海關に至る。自成自精銳二十萬に將として東し又別將をして兵二萬を以て關外に出で三桂を夾擊せんとす。四月二十一日三桂多爾袞を迎へ翌日兵を合して自成の軍と關內に戰ひ大に之に勝つ。即日三桂の爵を進めて西平王となし關の內外の軍民をして皆薙髮せしめ滿洲兵一万を三桂に附し北京に赴き自成を追殺せしむ。自成永平より使を派して和を三桂に議りしも應せざるを見るや京師に入り三桂の家族を屠り明の諸王を殺し宮殿を燒き輜重を載せて西走す。五月一日睿親王北京に入り帝禮を以て崇禎帝を葬り服喪三日に及ぶ。世祖捷報を得て遷都の議を定め九月車駕盛京を發し十月一日都を燕京に定む。

初め多爾袞の燕京に入るや京北京東の諸府は皆降りしと雖も京南の諸府幷に山東河南の諸府は皆流賊の任命せる地方官を殺し明の萬曆帝の孫福王を奉ず。福王五月を以て南京に於て帝位に即き宏光と改元す。多爾袞六月を以て肅親王豪格を山東河南に都統葉臣等をして山西に向はしむ。又書を明の大學士史可法（シヨーフハ）に寄して

せて號を創り藩に歸せんとを說きしも可法肯せず。已にして世祖燕京に入り先流賊を討たん事を議し十月英親王阿濟格を以て靖遠大將軍となし吳三桂尙可喜等と大同邊外より陝西の背に出で、豫親王多鐸を以て定國大將軍となし孔有德等と河南より潼關を攻めて西安に會せしむ。此冬葉臣等山西を平げ畿南も亦平定し翌年饒餘郡王阿巴泰、豪格に代りて山東諸郡悉く下る。多鐸元年十二月十五日を以て流賊を追て陝州に至り二年正月大に李自成の軍を破り十一日を以て潼關に偪る。此時阿濟格三桂の軍保德州より河を渡り延安鄜州に克ち西安の北に偪る。自成腹背敵を受け藍田より武關に出て湖廣に走り十八日多鐸西安に至る。乃ち多鐸に命じて師を江南に移さしめ阿濟格幷に三桂をして自成を追剿せしむ。自成尙衆三十餘万あり南京を取らんと聲言す。阿濟格等水陸より其後を蹈み各處に勝つ。閏六月自成十餘騎と共に武昌府の九宮山に入りて禱らんとし村民に困められて自ら縊死すと云ふ。餘衆明の湖廣總督何騰蛟に降る。英王盡く湖北を收め閏六月師を班す。多鐸の軍は二月十四日を以て西安より河南に至り三月五日南征の途に上る。明の睢州總兵許定國、史可法の前鋒總兵官たる高傑を殺して降り嚮導となる。河南の諸郡風を望みて悉く下る。多鐸四月五日を以て歸德府を發し十三日泗州を下し夜を以て淮水を渡り十八日大軍揚州城下に薄る。可法高傑の部兵を收め城に據りて拒守する事七晝夜礮を發して城外の軍數百を傷く。多鐸怒りて大礮を發して專ら城の西北隅を攻め兵士積屍を踐みて登り城遂に陷る。史可法陣殁す。時に二十五日なり。五月五日進みて陽子江に至り江を隔てゝ相持する三日大軍江を渡り鎭江を陷ゐれ十五日南京に抵る。福王已に十日を以て蕪湖に走り諸臣の留るもの皆降る。乃ち軍を城外に駐する事十日の後始めて城に入り史可法を祠りて其忠を旌し將を遣して福王を追はしむ。總兵田雄等福王及び其妃を縛して出でゝ降る。江南悉く定まる。六月又兵を分ちて貝勒博洛をして潞王常淸を降し浙西も亦定まる。乃ち南京を改めて江南省となし上諭を禮部に下して海內剃髮を實施せしむ。七月貝勒勒克德渾を平南大將軍となし江南に往きて豫親王に代らしむ。豫親王福王を俘にして凱旋す。

明の太祖九世の孫唐王聿鍵逃れて福建に至り六月帝位に即き元を隆武と改め總兵官鄭鴻逵南安伯鄭芝龍等を侯爵に封し禮部尙書黃道周、戶部主事蘇觀生を大學

士となす。太祖十世の孫魯王も亦兵部尚書張國維等に迎へられ紹興にありて監國と稱す。此時恰も薙髮の令下り降將の上下江にあるもの土國寶、吳兆勝、李成棟等勢に乘じて虐を逞ふしゝかば陳子龍等松江に起り、吳易等吳江に起り、盧象觀等宜興に起り閻應元等江陰に起り、其他崇明、崑山、嘉定、嘉興、徽洲等所在明の遺臣兵を起し、或は唐王の除拜を受け或は魯王の節制を受く。又降將金聲桓江西にありて屠殺を恣にしゝかば益王建昌に據り永寧王撫州に據り兵部待郎楊廷麟贛州に據り以て清兵に抗す。既にして清兵崇明を破り嘉定を屠り松江を下し宜興に克ち其他相次ぎて平きしと雖も吳易及び閻應元の軍紀律ありて善く守る。時に具勒博洛既に滋王を俘にして北上の途にあり吳江に至りて吳易を破り進みて江陰を圍み其城を屠る。金聲桓も亦其部將を遣して建昌撫州を復しゝかば益王等敗竄し江上下、江西略定まる。十二月貝勒勒克德渾兵を湖廣に移して李自成の餘黨を平ぐ。

明の流賊張獻忠是より先崇禎帝の末年より四川の地に蟠踞し清朝に降服せざりかば順治三年正月肅親王豪格を以て靖遠大將軍となし平西王吳三桂と共に之を征せしめ二月貝勒博洛を以て征南大將軍となし浙東福建を征せしむ。肅王三月を以て西安に至りしに時に明の舊臣賀珍等兵を漢中に起し途に唐王の封爵を受け勢大に振ふ。乃ち傍近諸州を平定し五月を以て漢中に入り雞頭關に賀珍の黨を破り七月進みて四川に至り是冬張獻忠を西充に斬り四川略ぼ平ぐ。貝勒博洛は五月大軍を以て杭州に至りしに清兵の錢唐江を渡るや魯王紹興を棄てゝ台州に奔り次て海に航す。既にして張國維義烏に敗死し(六月)金華衢州相次きて下り(八月)浙東平定す。遂に進みて福建を征す。初め唐王の鄭氏に立てらるゝや閩粵の兵權盡く其掌握に歸するを以て唐王爲す所有らんとするも令下に行はれず。大學士黃道周關を出でゝ兵を募りしも徒手如何ともする能はず婺源に敗死す時に湖廣總督何騰蛟長沙に屯し麾下數十万に至る唐王騰蛟を以て大學士となし定興伯に封ず。騰蛟湖の南北に十三鎭を置き清の武昌荊州の大軍と相持す。江西贛州の楊廷麟も亦未だ降服せずして其勢盛なり。騰蛟唐王に湖南に幸せんことを乞ひ廷麟江西に幸せんことを請ふ唐王芝龍の恃むに足らざるを以て閩を棄て贛より楚に入り騰蛟に倚らんと欲す。六月清兵の浙東を定むるや芝龍陰に洪承疇に通じ言を海寇に託して安平に還り盡く關隘水陸の諸防を撤す。清兵乃ち衢州廣信の兩路より福建に進

み蒲城建寧延平に克つ。時に戇は已に清兵を受けて援ふ能はず何騰蛟の遣せし援軍は韶州にありて進まず唐王汀州に奔る。清の前鋒の將努山明軍の旗幟を冒し七晝夜にして之に追及し遂に唐王を執ふ王絶食して死す。戇州報を得て又陷り芝龍福州に詣りて降る。博洛凱旋して端重郡王に封せらる。唐王の弟聿鍵蘇觀生の擁立する所となり紹武と改元して廣州にありしが清兵の至るに及びて立ろに服す。其魯王航海以後の事は第六節に記すべし

第四節　桂王の割據

順治三年九月清兵既に福建を定め惠湖戇州の兩路より粵を攻む。明の兩廣總督丁魁楚、廣東巡撫瞿式耜、兵部尚書呂大器、湖廣總督何騰蛟等萬曆帝の嫡孫桂王由榔を奉じ肇慶に於て帝位に即かしめ永曆と改元す。已にして李成棟の軍等廣州に克ち肇慶に進みしかば桂王桂林に走る。順治四年二月丁魁楚成棟に降り桂王又楚に入り帳江府を以て行宮と爲す。成棟進みて三月を以て桂林を攻めしかど式耜堅く守りて下らず。會ま此秋明の遺臣廣東に起りしを以て成棟廣州に軍を回し廣東の回復を力め廣西復た桂王の有に歸す。而して湖廣の方面に眼を轉ずるに三年八月恭順王孔有德平南大將軍の任命を受け懷順王耿仲明、智順王尚可善と征討に從ふ。四年三月何騰蛟衡州に退き八月武岡陷り桂王廣西に走る。十一月何騰蛟瞿式耜と諸將を桂林に會して分守を議し親ら全州にありて清兵を拒ぐ。十二月桂王復た桂林に入る。五年二月清兵辰州に克ちて悉く湖南を定め騰蛟の內變に際し桂林に還るに乘じて清兵又進みしが會ま金聲桓（キンセンホアン）李成棟（リセイトン）の變作り江西廣東皆明の有に歸す。清兵遂に退き耿尚二王の軍をして江西に赴かしめ孔有德は師を京師に班す。

初め金聲桓の江西を狥へ李成棟の廣東を狥ふるや章天于佟養甲滿洲の舊臣を以て軍に在り。事平ぐるに及び章天于江西巡撫となり佟養甲廣東總督となる。聲桓、成棟等攻城略地の功皆其力によりしに拘らず未だ總兵提督として節制を受けざる可らず居常怏々たり。順治五年二月金聲桓遂に副將王得仁と江西に叛す。李成棟又之を聞きて廣東に叛す。並びに髮を蓄ね衣冠を易へ檄を遠近に移し表を桂王に通ず。何騰蛟機に乘じて兵を進め其先鋒長沙を圍む。時に張名振は舟山を取りて魯王を奉じ大同の總兵姜瓖も清に背き李占春等も各兵數萬を以て川南川東に分踞す

茲に於て七省の地明の節制を受け桂王居を肇慶に移す。清廷都統譚泰に命じて征南大將軍と爲し耿尙二王と江西廣東を討たしめ鄭親王濟爾哈朗順承郡王勒克德渾に命じて孔有德と江南廣西を征せしめ端重郡王博洛に命じて姜瓖を討たしむ。皆順治五六年の事なり。

聲桓得仁已に九江を陷れ流に順ひて江寧を突かんと欲しゝが贛州の亂に從はざるを以て其後に乘せられん事を懼れ軍を回して之を攻めしが三月下す能はず。已にして清兵九江南康饒州を復し長驅して南昌を擣く時に順治五年五月也。聲桓等回りて之を救ひ城に入りて拒守す清兵長圍の計をなし城中糧將に盡きんとす。李成棟兵を率ゐて嶺を踰えて贛を攻め以て南昌を援く。順治六年正月南昌西門の守將潛に清兵に應じ城陷り聲桓得仁皆死す肇慶の援隊亦程鄉に敗れ二月清兵贛を援ひ李成棟も亦信豐に破れて溺死す。大同の姜瓖ははじめ英親王睿親王共に討伐に從ひしが六年三月豫親王の凱去に際し二王相次きて歸京し瑞重郡王之に代る。八月英親王復た兵を督して大同を圍み城兵瓖を斬りて下る。鄭親王の軍は六年二月を以て湖南に進みしに適ま明將相和せず何騰蛟湘潭に於て捕虜となり長沙に斬らる。孔有德十月永州を降し翌七年一月武岡靖州を復し九月全州に薄り十一月桂林に入りしに城中守兵なし瞿式耜を執へて之を殺す。尙可喜は贛州の圍解けて より兵を吉安に屯すると殆ど一戰に及びしが明將の內應するものありて遂に南雄に克ち七年正月韶州に克ち二月廣州を圍む。桂王梧州に遁れ更に南寧に走り十二月廣州下る。八年正月英親王罪あり前年十二月睿親王病死し順治帝親政す。此年尙可喜耿繼茂と廣東を定め孔有德廣西を定め吳三桂等四川に入りて李占春等を降し桂王今や土司の境に窮竄し清兵旦夕にして凱歌を奏するに至らんとしゝが偶孫可望李定國等は張獻忠の餘黨にして川南より雲南に入り貴州を略し遂に桂王の封爵を受け兵を出して四出せしむ。桂王時に安隆に在り。順治九年春劉文秀等四川に入り吳三桂を破りて川西川東川南を略し李定國桂林を下して孔有德戰死し廣西復明の有に歸す。敬謹親王尼堪定遠大將軍と爲り此年十一月二十三日を以て李定國を衡州に破り輕騎逐北伏に遇ひて陣沒す。貝勒屯齊代て軍を督し十年二月二十八日李定國を永州に破り三月十五日寶慶に赴かんとして岳路口に於て孫可

望、白文選、馮雙禮に遭ひ激戰して交綏す。而して定國の湖南にあるに乘じて清兵は桂林を復し廣西又やゝ定まる。十一月李定國廣東を攻めて高州を陷れしが尙可喜耿繼茂等十二年春に至るまで連敗連勝廣東を復す。劉文秀も亦十二年を以て岳州武昌を犯しゝが常德の地に大敗して貴陽に回り可望の命によりて雲南を守る。時に文秀定國の兩軍皆衰弱して惟り可望貴陽にありて跋扈を極め桂王を安隆に置き自ら內閣六部を設く。桂王大に懼れ定國を召す可望之を聞き十三年春を以て定國を襲ひ白文選をして桂王を貴陽に徙さんとしゝが定國已に可望の兵を破り安隆に抵りて桂王を奉じ雲南に赴きて文秀と合す。可望大に怒り十四年秋大舉して桂王を擊かんとす白文選、馮雙禮以下諸將皆從はず。可望大敗して湖南に走り經略洪承疇の軍前に降る。時に十月也。

可望の降るや清廷桂王の臣下內訌あるを知り洪承疇、吳三桂の奏請に從ひ貝子洛託を以て寧南靖寇大將軍となし洪承疇と湖南より進み、吳三桂を以て平西大將軍となし漢中四川より進み、都督卓布泰を以て征南將軍となし廣西より進み機に乘して大舉、三路より貴州に向はしむ。十五年四月承疇洛託の軍常德より靖玩鎭を經て貴陽に抵り三桂の軍は又春に於て漢中を發して重慶を從へ遵義に克ち七月に至りて四川を復す。此年正月豫親王の子信郡王鐸尼を以て安遠大將軍となし三路を總統して雲南を取らしむ九月信郡王禁旅を以て貴州平越府に抵り十月三路より滇に入る。時に文秀已に卒しゝかば定國文選、雙禮等と部署を定めて之に當りしが各路皆破れ三路の清軍順治十六年正月朔を以て滇城に入る。桂王已に西、永昌に走り又騰越に奔る。是に於て清廷は雲、貴、川、廣、湖の平定を宣示し三桂をして雲南を鎭せしむ。時に桂王已に緬甸に入り李定國白文選も孟艮木邦にありて未朝又何等の痛痒を感せずと雖も三桂永曆帝を俘にして以て功を立てんと欲し上疏する所あり十八年九月兵を邊外に出し十二月蘭塲江に抵りしに緬王莽應時桂王并に其家族を執へて軍前に獻ず。文選遂に降り定國も亦幾ならずして景線に死す。

魯王航海以後の事鄭氏渡臺以前の事は此處に叙述するを以て適當なりとす。鄭成功は芝龍の子にして母は日本肥前平戶の人田川氏の女なり唐王に仕へて忠孝伯に封せらる俗に國姓爺と稱するは即ち成功なり。芝龍の清に降るや成功慨然として儒服を去り巨艦に乘じて厦門に據る。其兄の子鄭彩鄭聯も亦張名振と共に魯王

を奉じて閩に至り順治四年建寧、邵武、興化福寧の三府一州を陷る。閩浙の總督陳錦等兵を率ゐて之を伐ち五年夏に至り先後克復す。九月張名振舟山を取りて魯王を同島に奉ず。陳錦閩より浙東に還り先所在の山寨を攻め遂に八年九月を以て舟山を略す。名振魯王を奉じて厦門に赴き監國の號を去る。是より先成功使を湖南に派して永曆帝に朝し延平郡王に封せられ名振と海上に犄角す。十年清廷芝龍の書を以て其一族を招かしむ彩聯等降りしも成功獨り從はず。已にして張名振死して張煌言之に代り成功と共に連年沿海の地を陷れしが清兵三路より大舉して桂王を雲貴に攻むるを聞き十六年六月江南を犯して牽制を圖る。時に清兵大半西上して守備空虛なりしを以て瓜州を破り鎭江を陷れ七月金陵に薄る。傍近の諸州檄を得風を望みて款を納る世祖南苑に幸し親征を議す。崇明總兵梁化鳳七月二十四日を以て成功の軍を破り甘輝を擒にす。成功遂に餘艦を以て脫る其後桂王緬甸に走るに及びて臺灣に據る。而して張煌言は南田に於て禽へられ尋て魯王も殂し浙閩の沿海全く平定す。但し成功臺灣占領以後の事は第六節に讓る。

第五節　三藩の叛亂

順治十八年正月七日世祖崩ず年僅に二十四なり。三子玄燁位に即く是を聖祖仁皇帝となす十一年三月十八日を以て生る母は佟國賴の女なり。明年を以て康熙と改元す。康熙六年七月聖祖親政す。時に明の諸王全く平ぎ其遺臣の各地に割據するも の相次て降り唯鄭氏の台灣に據るあるのみ。支那本部の地悉く清室の有に歸す。故に聖祖を以て清の第一世となすものあり。而して幾もなくして三藩の亂起る。孔有德を定南王に耿仲明を靖南王に尙可喜を平南王に封じゝは順治六年五月あり。同年七月耿仲明江西吉安府に自盡し其子繼茂繼ぎ九年李定國の變に孔有德仆れ後なし。諸王平西王吳三桂と共に皆軍功あり南方略定まるに至り同十六年三月平西王を雲南に平南王を粵東に靖南王を四川に駐せしめしが翌年七月四川を福建に換ゆ。其後繼茂死して康熙十一年六月其子精忠襲ぐ。是を三藩創設の始となす。三藩中三桂功最も高く兵最も强く其人を用ゐるや吏兵二部の掣肘を受けず其財を用ゐるや戶部の査定を受けず其除叙せる所謂西選の官天下に徧きに至る。壯麗なる藩府を

桂王の五華山の舊宮に設け財を散じて士に結び各省の要地に腹心の徒を置き其子額駙となりて朝政の巨細朝夕其報を得其根蔕益固く拔く可らず。而して尙可喜老ひて其子之信粵に酗虐を極め耿靖忠閩に稅歛を盡し滇と共に清國三方の患たり。康熙十二年三月尙可喜遼東に歸老し子を留めて粵を鎭するを請ふ。蓋し制を之信に受くるを以て已を得ずして其客金光の計を用ゐて此請に出でしなり。廷議遂に盡く其藩兵を撤して歸鄉せしむ。三桂及ひ耿精忠之を聞きて安んせず七月上疏して兵を撤するを請ふ。戶部尙書米思翰、兵部尙書明珠、刑部尙書莫洛等藩を徙すを利ありとなすも廷議決せず。聖祖藩鎭久しく重兵を握り勢尾大と成るは國家の利にあらざるを念ひ且三桂の子精忠の諸弟皆京師にあるを以て必其變を爲さざるを察し請を允して藩を山海關外に徙す。三桂竊に以爲らく朝廷慰留して明の沐英世々雲南を守りし故事の如くなるを得むと。命下るに及びて愕然として其黨と謀り遂に十一月二十一日を以て兵を發して叛し巡撫朱國治を殺し檄を遠近に移す。自ら天下都招討兵馬大元帥と稱し明年を以て周王元年となし髮を蓄へ衣冠を易へ旗幟白布を用ゆ。貴州巡撫曹申吉、貴州提督李本深、雲南提督張國柱皆賊に從ふ。雲貴總督甘文焜貴陽より銅遠に至らんとして戰死す。變報京師に到り擧朝震動し大學士索額圖撤藩論者を誅するを請ふ。聖祖許さず惟直ちに飛使を派して閩粵の撤藩を止め吳三桂の官爵を削り其子應熊を獄に下す。順承郡王勒爾錦に命じて寧南靖寇大將軍と爲し師を統べて荊州に至り都統業赫に命じて安西將軍と爲し漢中より蜀に入り以て三桂を伐たしむ。三桂も亦其將を四川と湖南とに出し除夕(二十九日)を以て沅州を陷る。

明年正月四川巡撫羅森等四川を以て、二月廣西將軍孫延齡桂林を以て、三月襄陽總兵楊采嘉襄陽を以て賊に應ず。孫延齡は定南王孔有德の女婿にして康熙五年より廣西に鎭守となりしが部下の都統王と合はず遂に三桂に應ず。湖南の常德、長沙、岳、澧、衡の諸州も前後賊に陷り官軍荊州武昌にあるもの其勢の盛なるを見て敢て進まず。福建の耿靖忠又之を聞きて三月を以て叛旗を擧げ全閩を陷る。數月にして六省皆賊の有となる。賊將吳應麟岳州の守備を固くし以て江北の官軍に當る官軍雲集するも敢て江を渡るものなし。三桂乃ち其兵を分ち一は長沙より江西を窺ひ耿精忠の軍と合し三十餘城を下し一は四川より陝西を窺ふ。六月貝勒尙善を以て安

遠靖寇大將軍と爲し順承郡王を助けて岳州の賊を分討せしめ八月治曆法西洋人南懷仁に命じて輕便なる火礮を鑄造せしめ以て大軍の進討を助く。

陝西提督王輔臣此年十二月を以て寧羌に叛し經略尙書莫洛を害し漢中を陷る。三桂之を聞きて輔臣に稿師銀二十萬を給し蜀の叛將に命じて策應せしむ。翌十四年秦州蘭州等相繼ぎて失し輔臣自ら平涼に踞り其黨をして各郡に分據せしめ隴右皆賊に陷る。三桂此機に乘じて路を秦蜀に取りて京師を犯さんと欲せしが撫遠大將軍圖海の至るに及び大に平涼の城北に克ち十五年六月王輔臣圖海の軍門に降る。是より先十三年九月安親王岳樂定遠平寇大將軍と爲り江西に入り翌年五月建昌を復し三桂の西上に乘じ十五年二月萍鄉を攻めて賊將夏國相を走らし遂に進みて長沙を圍む。三桂報を得て松滋より軍を回し自ら將として長沙を援ふ。三月順承郡王の軍江を渡りて賊を破り進みて長沙を夾攻するを得しも遷延進まず兵を收めて荊州に遷り江湖の險復た賊の據る所となる。三桂又其將高大節を派して吉安を陷れ以て安親王の軍の後路を斷つ。

初め耿靖忠の叛するや都統馬九玉、總兵曾養性、白顯忠の三人を以て爪牙となし三路より兵を出す。十三年六月康親王傑書を以て奉命大將軍と爲し貝子傅喇塔を寧海將軍と爲して之を伐たしむ。互に勝敗あり。已にして精忠鄭經と隙を生じ鄭經、漳、泉、汀邵の諸府を奪ふ。親王貝子其內寇に乘じて兵を進め十五年七月九玉を衢州に破る。時に安親王の軍江西を復し顯忠官軍に降る。精忠既に兩路の兵を失ひ且鄭氏の虛に乘じて後に逼るあり十月遂に降附す。乃ち鄭氏を伐ちて罪を贖はしむ。此年四月尙之信竊に賊に通じ其父可喜を幽し招討大將軍の僞號を受く。蓋し此時三桂其將を派して廣東を攻めしめ其勢盛なりしを以てなり。之信復之を悔ゐ十二月款を官軍に通じ翌年五月廣東を以て降る。翌月可喜軍に卒しゝかば之信を以て其封を襲がしむ。可喜は三桂の亂起りしより終始淸廷の爲にし其功によりて前年親王に封せられたり。此時廣西の孫延齡も亦已に蒼梧の流寓傳宏烈の言を容れて叛旗を拋棄せり。

吉安の賊將相和せず高大節怏々として死し康熙十六年三月城遂に下る。七月三桂胡國柱、馬寶をして尙之信を韶州に攻めしめしが九日に亘るも拔く能はず。唯賊將吳世琮桂林に向ひ十五年十二月孫延齡を殺し廣西の大半三桂に歸す。時に三桂年

六十有七なり已に陝西福建廣東の三大援を失ひ今又江西を失ひ且安親王の軍湘湖の間に雲集し驅宇日に蹙まる。川湖の賦稅軍費に供するに足らず四方に輕せらるゝを恐れ帝號を稱して自ら娛まんと欲す。乃ち長沙より衡州に移り十七年三月朔を以て位に即き昭武と改元し衡州を定天府となし百官を置き諸將を封ず。六月三桂郴州を下し翌月永興を圍み三面より環攻して晝夜息まず城將に下らんとす。八月二十一日忽ち圍を撤す蓋し此月十七日三桂病死せしを以てなり。初め聖祖諸軍の曠日持久せるを慨し親征の議ありしが報を得て其議を罷む。三桂の事を起すや年已に老ひて常に萬全の策を取り壯舉を中原に試むる能はず長江を畫して割據せんことを期す。故に大兵の四合するに及び境蹙まり身死し諸軍爲す所を知らず。十月三桂の孫世璠を雲南より迎へて帝位に即かしめ洪化と改元す。世璠尋て喪を迎へて雲南に歸る。

時に貝勒尙善已に歿し察尼代りて其軍を領し十八年正月岳州を復す。長沙衡州相尋で降り安親王等進みて武岡に至り八月賊將吳國貴を武岡に仆す。胡國柱等貴陽に走る。此年七月吳世琮も亦廣西に敗死し大將軍貝子賴塔南寧より雲南に進む。四川の方面は又提督趙良棟、王進寶十八年十月を以て漢中を定め進みて四川に入り翌年正月成都を復す。進寶をして留りて四川の餘賊を鎭せしめ良棟を以て雲貴總督となし雲南を擣かしむ。三月安親王上命に從ひて凱旋す貝子彰泰を以て代りて定遠平寇大將軍となし進みて雲貴を取らしむ。十月彰泰の大軍平陽より貴陽に至り翌二十年二月雲南に抵り賴塔の軍と合して大象と戰ひ遂に五華山の宮城を圍む。是より先胡國柱、夏國相、馬寶等蜀に出てゝ牽制を圖りしが省城の危急なるを見て皆回り救ふ。趙良棟兵を分ちて之を追ひ九月包圍の軍に合す。十月城中食盡き援絕え南門を守るの賊內應す。二十五日世璠及び郭壯圖自殺し夏國相馬寶等俘にせらる。雲南、貴州、四川、湖南の地悉く平く。此役の起るや國初の宿將已に盡き惟安親王傅貝子曾て肅鄭二親王に從軍しゝを以て兩軍尤も功を立てしとぞ傳貝子は福建平くの年を以て軍に卒せり。

第六節　台灣の平定

鄭成功順治十七年を以て江南より敗れて歸るや當時台灣は蘭人の有に歸しゝが

適其會計主任莫大の負債あり發覺せんとを恐れて走りて成功に投じ嚮導たらん事を請ふ。成功地圖を見て歎して曰く此も亦海外の扶餘なりと。十八年先鑑隊百艘を以て澎湖に泊し進みて台灣を取る其交戰の詳細は次章に於て叙述すべし。成功既に臺灣を有し其福建に於ける根據地金門厦門の二島と相犄角し處士陳永華を聘して謀主と爲し開墾を奬め兵備を修め法律を制し學校を興し赤嵌城を以て承天府と爲す。明の遺臣渡航するもの頗る多し。此年清廷芝龍を北京に誅し且堅壁清野之計(コンセンツラドース)を議し沿海居民三十里以内のものを悉く内地に移し且漁舟商船の航海を禁ず。張煌言成功に書を貽りて曰く此十數万の生靈を弄てゝ收めず何すれぞ夷島を爭ふや一隅に苟安せば將來金、厦も亦守るを得ざるに至らひと思ふに成功の本意は其の臺灣の本據を固め而して後滿洲政府に復讐せんと欲しゝならむ。康熙元年使節を比律賓列島に派して參勤朝貢を西班牙總督に求めしを見るも其一班を知るべし。然るに此年五月八日(西紀一六六二、七、二。)成功三十九才を以て臺灣に卒す。長子經厦門より臺に入りて嗣ぐ。此年監國魯公臺に卒し二年桂王亦滅しゝも經なほ永曆の號を奉ず。耿繼茂和蘭船と同盟して二年十月金厦二島を下す翌年鄭經臺灣に歸る。時に張煌言も亦禽にせられ浙閩の沿海暫く事なし。

其後三藩の事起るに當り耿精忠援を鄭氏に乞ひ漳泉二府を約す。已にして精忠約を悔ゐ二府を割かず。然るに閩中鄭氏の舊部曲多きを以て經に降るもの多く泉漳潮皆經の有となる。精忠前後敵を受けしを以て十五年清朝に降り康親王傅貝子の師を導きて鄭氏を攻め翌年漳泉以下の諸州を復す。十七年春鄭氏復た沿海に出で城堡を下す。十八年其將劉國軒等道を分ちて入寇し六月海澄を下し漳泉に逼る。漳平、長泰、同安、惠安等の諸邑前後皆降る。耿精忠漳城を棄てゝ其鋭を避けんとす。巡撫吳興祚、將軍貝子賴塔等泉州の圍を解き總督姚啓聖、提督楊捷等漳州の江東橋に克つ。國軒海澄に據りて相持する事一年下す能はず。時に三桂死し湖南水師の要なきを以て水師提督萬正色をして海上より閩に赴き姚啓聖吳興祚と共に和蘭船の助を借り以て鄭氏を伐たしむ。十九年二月鄭經を海壇に破り三月海澄に克ち厦門を復し金門を取る。鄭經國軒遂に臺灣に歸る。

康熙二十年正月鄭經卒す。長子克塽長してオあり曾て陳永華の言を用ゐて監國たらしむ衆望あり。然るに群小之を忌み經の諸弟又之を憚る。侍衛馮錫範先づ計りて

永華の兵柄を聚め茲に至りて終に克爽を殺して次子克塽を立つ。姚啓聖其幼弱にして國内亂るゝの時に乘せんとを請ふ。同年六月施琅を以て福建水師提督となし舟を統べて台灣を伐たしむ。已にして雲南平き二十二年六月施琅戰艦三百水師二萬を以て澎湖に向ふ。奏して曰く澎湖破れずんば臺灣下す可らず澎湖失すれば臺灣攻めざるも自ら潰ぬんと。時に劉國軒澎湖にあり守備甚だ嚴なり施琅大に戒心し五艘を以て敵の一艘を攻めしめ終日苦戰して大勝を博す。國軒臺灣に還る。施琅兵を分ちて追ひて鹿耳門に至る。海淺くして入るを得ず。十有二日の後潮驟に漲り舟師浮びて入る。鄭氏皆誡めて曰く先王臺灣を得る時鹿耳門漲る事此の如くなりきと七月十五日使を遣して降を議す。施琅澎湖より台灣に至るの後勅答あり八月十八日國軒及馮錫範鄭克塽と共に出てゝ降り。明延平郡王幷に招討大將軍の金印等を獻ず臺灣清の有となる所謂其獨立は僅に二十一年に過ぎざりき。詔して琅を靖海侯に封じ克塽に公爵を授く。克塽の子孫なは現存すと云ふ。

臺灣平ぐの翌年施琅の奏議により一府三縣を置きて之を治む。以來同地の歷史は天災と内亂あるのみ。今便に從ひ此處に重なる内亂の顚末を記さんに康熙四十年諸羅の劉却亂を作しゝ時は一の敎匪に過ぎずして直に鎭定せられしが同六十年四月又朱一貴の亂あり。初め知府王珍苛歛を極め私に樟樹を伐採せしもの二百人を執へて死刑に處す。鳳山の奸民黃殿等一貴の朱姓なるを利して明裔なりと稱し之を奉して亂を謀り五月六日府城を陷る。總兵歐陽凱陣殁し諸羅又同日を以て賊の有となる。一貴乃ち中興王と稱し永和と號す。民謠ふて曰く頭冠明朝冠、身衣清朝衣、五月稱永和、六月還康熙と蓋し人心皆賊に附かざるなり。水師提督施世驃厦門に在り先づ澎湖に至り總兵藍廷珍の至るを待ち六月十六日鹿耳門に至る。時に賊中閩人粵人と相鬩ぎ又各地に義民の起るありて賊勢漸く衰ふ。廷珍世驃と先づ賊兵を破りて安平を取り二十二日進みて府治を恢復し朱一貴等を擒にす。乾隆三十五年九月大穆降莊の奸民黃敎亂を作し誅に伏す。同五十一年又林爽文の亂あり。林爽文は天地會なる秘密結社の領袖にして遂に兵を擧げ十一月二十七日を以て朱一貴の亂後設置せる新縣彰化を陷れ十二月六日又諸羅を陷る。翌五十二年正月總兵柴大紀連戰賊を破り諸羅を復す。諸羅府城の蔽屏たるを以て賊兵十餘萬復た之を圍み必ず下さんとす。大紀城民と共に善く戰ひ固く守りて賊を防ぐ故に諸羅に嘉

義の名を賜ふ。福康安、海蘭察命を受けて渡臺し十一月八日嘉義城の圍を解き翌月林爽文以下の匪首を擒にし盡く臺灣を平定す。以後島内に起りたる叛亂は一揆の類にして又記述の要なし。

第七節　蒙古の經略

蒙古は諸游牧行國の總稱にして別ちて漠南内蒙古、漠北外蒙古、漠西厄魯特蒙古、青海、蒙古の四部となす。本章には漠南漠北兩蒙古の經略を叙し漠西青海兩蒙古の征服は後節若くは後章に於て陳ぶべし。

漠南漠北二部は大半元太祖成吉思汗に出づ。太祖和林に起り西北諸國を削平するや王駙馬を建てゝ之を世守せしむ。仲弟哈薩爾射を以て開ゐ季弟勒格圖勇を以て開ゐ佐命の功尤も大なり。今の阿巴噶、阿巴哈納爾二部は勒格圖の後にして兩科爾沁、札賚特、杜爾伯特、郭爾羅斯、四子部落、茂明安、吳喇或の八部は哈薩爾の後なり。又太祖十五世の孫に達延汗なるものあり世々漠地にありしが其四子分れて漠南に徙る者敖漢、奈曼、巴林、札魯特、克什克騰、烏珠穆秦、蘇尼特、鄂爾多斯八部の祖と爲る。其他翁牛特は太祖の弟謂楚因の後にして札魯特及土默特右旗は太祖十八世の後とす。惟喀喇沁及土默特左翼は太祖の功臣濟拉瑪の後なり。以上二十餘部は即ち漠南内蒙古にして皆挿漢部を以て大宗とす。其地東吉林より西賀蘭山に至り南長城に起り北瀚海に及ぶ。挿漢部は元の嫡裔なり。順帝和林に歸り五世を經て鞬靼可汗と稱す。其後又漠南に徙り景泰中より小王子を以て稱せられ世々明の邊患たり。

清朝の興るや始めに科爾沁部を臣とし次で挿漢部即ち察哈爾を平げしかば諸部前後服屬するに至れり。科爾沁部は南盛京に接し北黑龍江に界す。明の洪熙帝の時厄魯特の兵を受け東嫩江に避け嫩江科爾沁と號す。萬曆二十一年扈倫四部等と同盟して清の太祖を侵し利を得ざりしは第一節に於て已に記しゝが如し。翌年使を太祖の許に派し好を通ず。其後太祖烏拉部を征しゝ時復科爾沁の援軍を破る。此時挿漢部の林丹汗士馬最も强盛にして漠南に横行し喀喇沁部を破り土默特部を滅し東西馳逐到る處掠奪を恣にす。諸部其侵凌に堪へず或は漠北に至りて喀爾喀に依り或は東走して科爾沁に依る。林丹汗諸部の兵を合し科爾沁を襲ふ酋長奥巴敵する能はず遂に其兄弟を率ゐ天命九年二月清國に歸附し以來不叛不叛の臣と爲

る。或は從ひて揷漢を征し或は從ひて明を征し朝鮮を征し喀爾喀を征し索倫を征し江南を定め清朝と休戚を共にす。太宗の二后世祖の一后皆科爾沁の女なり世祖幼冲を以て位に登り中外の重望を博せしは蒙古外戚の力によらずんばあらず。故に今なほ科爾沁部の俸祿は内蒙古二十四部の上にあり。

林丹汗天命四年書を太祖に寄せて曰く統領四十萬衆蒙古國主巴圖魯青吉斯汗書を水濱三萬衆滿洲國主に致す。已にして諸部清國に歸屬し兵を發して保護せん事を乞ふ。太宗天聰二年科爾沁敖漢奈曼、札魯特喀喇沁諸部の兵を會し九月察哈爾を征して之を破り精騎を遣して敗軍を追捕し興安嶺に至る人畜を獲る事算なし。翌年二月又兵を出して之を征し六年四月再び大軍を率ゐて親征す。林丹汗之を聞き大に懼れ部衆を諭し本土を棄てゝ西奔す。太宗興安嶺を過ぎ大兒湖の公古里河に至りて歸る。此時歸化城に蹕を止め土默特部を復す。八年林丹汗痘を病みて青海の大草灘に死し其屬來歸するもの多し。翌年貝勒多爾袞等西征して黃河を渡り托里圖に抵りしに林丹汗の子額哲所部を率ゐ傳國の璽を奉して降附す。河套の鄂爾多斯部も亦清朝に降る。但し鄂爾多斯部は諸部中の強大なるものゝ一にして曾て諸部を糾合して林丹汗の兵四万を土默特の地に破りし事ありしが是より常に河套にありて兵を出して清朝を援く。而して清朝が傳國璽を得て國號を定め年號を改めしは已に第二節に記しゝが如し。

太宗額哲の元の嫡裔なるを以て之を親王に奉じ内蒙古諸貝勒の上に置く。額哲卒し其弟簪を襲ぎ傳へて布爾尼に至る。康熙十四年吳三桂の變に際し其兵を徵せしに至らず反て奈曼等の諸部を煽動し三月衆を擁して同く叛す。多羅信郡王鄂扎を以て撫遠大將軍と爲し蒙古各部の兵と共に之を伐たしむ。布爾尼伏を設け陣を列して以て待つ。清軍先づ其伏兵を破り進みて其大隊に克つ。布爾尼連戰連敗三千騎を以て遁れ遂に科爾沁の兵に射殺せらる。此役や凡六ヶ月にして平く。清廷其故地に牧廠を置き部衆を宣化大同二府の邊外に移して游牧せしめ内蒙古四十九旗の外と爲す。

初め達延汗の季子格埒森札賚爾漠北の故土に留り内外蒙古の別始めて起る。格埒森部衆万餘を分ち七子に授け七旗と成し左右翼に分つ。是を今の外蒙古喀爾喀各部の祖と爲す。其孫阿巴岱西藏に往き達賴喇嘛に謁し經典を得て歸る。喇嘛教の蒙

古に入る此時に始まる。部衆皆阿巴岱を以て智者となし之を立てゝ汗となし世々土謝圖汗と號す。同族車臣汗、札薩克圖汗と三大部を爲し其地東黑龍江より西厄魯特に至り北は魯領に接し南は瀚海に盡く。清國已に漠南の察哈爾を平定するや太宗の崇德元年を以て使者を喀爾喀に遣し職勝を告ぐ。三年五月太宗親征す。是に於て喀爾喀來聘し進貢の制を定め毎歲白駝一、白馬八を貢するを以て例と爲す。是を九白の貢と云ふ。

順治三年太宗の額駙なる內蒙古蘇尼特部の騰機思容親王と不和を生じ所部を率ゐ飯きて喀爾喀に投す。土謝圖汗車臣汗、兵三萬を合して之を迎へ且巴林部の人畜を掠奪して去る。五月豫親王多鐸を以て楊威大將軍と爲し大兵を率ゐて之を征せしむ。時に騰機思等袞噶魯臺に屯駐す六月豫親王の軍菅噶爾察克山に至るや風を聞きて遁る。乃ち一隊を放ちて之を追はしめ大に歐克特山に克ち更に土剛河を渡り騰機思の子幷に孫を斬る。清兵なほ進みて土謝圖汗の兵二萬を查濟布坦克に破り翌日復碩雷汗の兵三萬を破り斬獲算なし。五年騰機思復歸順し喀爾喀の各汗も亦表を奉りて罪を請ふ。是に於て各其子弟を來朝せしめ九白の貢を復し且つ掠奪せる巴林部の人畜を歸さしむ。各汗未だ命を奉せざりしが十二年に至り始めて其子弟を派遣し來りて盟を乞ふ乃ち之を許す。

康熙二十三年右翼土謝圖汗、左翼札薩克圖、車臣の二汗と隙を生じ土謝圖汗札薩克圖汗を攻めて其妾を奪ふ。準噶爾部其內訌に乘じ二十七年先土謝圖汗を襲ひ且其鄰部なる車臣、札薩克圖の二汗を擊破し又其大剛噶哲卜尊丹巴胡圖克圖の帳居を劫す。是に於て喀爾喀三部數十萬聚瓦解して悉く內蒙古に入る。三汗初め露西亞に投せんとし決を呼圖克圖に請ふ呼圖克圖曰く魯國は我宗敎を奉せず且其風俗言語大に異る。宜しく全部內徙すべしと。遂に擧族清國に倚る。時に內蒙古四十九旗をして其地を略取せしめんとの議あり聖祖其厄に乘ずるに忍びず食儲を發し牲畜を給し且科爾沁部の地を割與して游牧を爲さしむ。尋で準噶爾親征の議起る。

第八節　準噶爾部の征服

漠西厄魯特蒙古は瓦剌の脫歡、也先父子の後裔にして厄魯特四衛拉蒙古と爲す衛拉は即ち瓦剌の音轉なり。其地元代の牧場にして駝馬牛羊の四部を置きしが元の

衰ふるに及び漸く强盛となり遂に獨立して一大部落をなせり。四衛拉部とは伊犁に牧する綽羅斯特部、厄爾齋斯に牧する都爾伯特部、雅爾即ち塔爾巴哈臺に牧する土爾扈特部、烏魯木齋に牧する和碩特部を云ふ。但し和碩特汗は元の太祖の弟哈薩爾の裔にして內蒙古科爾沁部と同族たり。十九傳して明末の固始汗に至り襲ふて青海に據り又兵を以て西藏に入り藏巴汗を滅し其喀木の地を有す。固始汗崇德二年を以て使を清朝に遣し七年復た達賴喇嘛と偕に來貢す。是を青海厄魯特の始となし亦青海蒙古清朝に通ずるの始となす。

固始汗の青海に據るや綽羅斯特部は則ち伊犁に據り近部を蠶食し勢漸く盛大なり。康熙中綽羅斯特の酋長渾臺吉死して其子僧格立ち僧格死して其子索諾木阿拉布坦立つ。僧格の弟噶爾丹之を殺して自立し準噶爾汗と爲る。次で青海和碩特部なる車臣汗の女を娶り而して襲ひて車臣汗を殺し其部落を併す。是に於て盡く四衛拉の地を兼併し科布多、伊犁及び青海皆其占據する所と爲る。又南して回部の城郭諸國を攻めて盡く之を下し威令遠く西藏に達す。則又北して喀爾喀を併有せんとし伊犁より東して阿爾泰山に徙り杜爾伯特の部衆をして屯田し且耕し且牧し以て時機を待たしむ。會ま喀爾喀三部內鬨す。噶爾丹族人多爾濟札布をして之を覘はしめ故らに土謝圖汗を嫚罵せしむ。土謝圖汗果して執へて之を殺す。噶爾丹遂に詞を報復に藉り揚言して曰く魯西亞の兵を借りて至らんと。喀爾喀之を探るに其事無きを以て守備を懈る。康熙二十七年夏噶爾丹喀爾喀の備なきに乘じ勁騎三萬を領し抗愛山を逾え突然其帳居を襲ふ。是に於て喀爾喀全部大敗し皆漠南に走らて清國に倚りしは已に前節に記しゝが如し。十月噶爾丹使を遣して入貢す。聖祖之に命するに其衆を率ゐて西歸し喀爾喀の侵地を還すを以てす。噶爾丹驕傲命を奉せず却て喀爾喀を追ふを以て名となし二十九年六月銳を盡して東侵し烏爾會河に至る。尙書阿爾尼蒙古の兵を以て之を邀へ利あらず。噶爾丹勝に乘じて進み其威內蒙古に震ふ。

此時に當りて清國已に三藩を平げ臺灣を收め露西亞と和し天下無事なり。是に於て聖祖噶爾丹を征討し喀爾喀の故地を復さんと欲し六月大臣を集めて親征を議す。七月裕親王福全を以て撫遠大將軍と爲し皇子允禔を以て副とし古北口を出でしむ是を左翼と爲す。恭親王常寧を安北大將軍と爲し喜峰口を出でしむ是を右翼

と爲す。右翼の兵敵に烏朱穆秦部に遇ひ克たず噶爾丹勝に乘じて南進し烏蘭布通に至る其地京師を距る僅に七百支那里に過ぎず。乃ち右翼の兵を止め更に康親王傑書等に命じ歸化城に屯し以て其歸路を要せしむ。八月一日左翼の兵烏蘭布通に噶爾丹を襲ひ午後二時より開戰し薄暮に至りて大に之を破る。此戰に際し賊陣駝城を設く。其制を見るに先駝の足を縛して地に臥さしめ背に箱梁を加へ環列して柵の如くならしむるにあり。而かも駝城遂に火器に抗する能はず噶爾丹破れて夜に乘じて走り翌日使を以て和を乞ひ報を俟たずして又遁れ過る所皆火を放ち以て追騎を絶つ。沿途死亡するもの多く其科布多に還りしもの僅に數千人のみ。是より先聖祖病あり博洛河屯より師を班へす。翌年聖祖又塞を出でゝ多倫泊に至り喀爾喀各汗の來朝を受け其三部を以て三十七旗と爲す。

其後噶爾丹に命ずるに會盟に來らんとを以てす報せず。而して兵を出して喀爾喀を侵掠する事益〻甚しく土謝圖汗等を索むる事益〻急なり。且內蒙古各部を煽動し叛きて已に歸せしめんとす。聖祖報を得て土謝圖、科爾沁諸親王をして僞りて內應せしむ。蓋し其近地に來るに於て風馳電擊一舉にして之を全滅せんが爲なり。三十四年噶爾丹果して騎兵三萬を引率して入寇し克魯倫河に沿ひて下り侵掠しつつ巴顏烏蘭に至る。秋より冬に至るまで之に據りて去らず且前敗に懲り敢て深く漠南を犯さず。翌三十五年聖祖復た親征の師を興す。先づ二月に於て撫遠大將軍費揚古、振武將軍孫思克等をして陝甘の兵を以て西路より發して土拉河に向ひ其歸路を扼せしめ三月黑龍江將軍薩布素をして東三省の兵を率ゐ東路より其後を衝かしめ聖祖親ら禁旅を統べ獨石口を出で中路より克魯倫河に向ふ。五月八日中路の軍克魯倫河に抵る噶爾丹はじめ親征を信せず御營を望見するに及びて大に驚き營を拔き宵遁る。故に北岸已に一帳だもなし。時に西路の兵昭莫多に至る噶爾丹の遁れて特勒克濟にあるを知り寡兵を出して賊を誘ひ其至るに及び孫思克先鋒旗の兵を以て山頂より銃擊す敵兵力戰二時より六時に至るも退かず。費揚古土臘河畔の伏兵を麾きて一軍橫に敵陣を衝き一軍其輜重を襲ふ。敵兵大敗、夜に乘じて北を追ふ事三十餘支那里に及び斬首二千餘級可敦阿奴を殺す。可敦とは準部の汗の妃にして可汗に對する稱呼なり。噶爾丹數十騎を以て遁る。乃ち費揚古に命じて留りて喀爾喀の地を護せしむ。聖祖凱旋の途歸化城に於て西路の將士を饗す俘虜

に笳に工なる老翁あり歌ふて曰く雪花如血撲戰袍奪取黄河爲馬槽滅我名王召虜我使歌我欲走兮無駱駝嗚乎黄河以北奈若何嗚乎北斗以南奈若何

噶爾丹喀爾喀を破りしより漠北の地を戀ひて歸らざりしかば伊犂の舊部落は盡く兄の子策妄阿拉布坦の有に歸し阿爾泰山以西皆己のものにあらず又連年清國と戰ひて精鋭を失ひしより回部青海等皆叛き去れり聖祖其窮蹙に乘じ之を降さんとし九月北塞を巡行して十月歸化城に駐し鄂爾多斯に幸す噶爾丹使を行在に遣し清廷の意を探らしめしが卒に親ら至らず翌年二月帝復た黄河を渡り寧夏に幸し馬思哈費揚古をして兩路より兵を進めしむ此時噶爾丹の子塞卜騰巴爾珠爾已に哈密に於て擒にせられ左右親臣降附するもの多し噶爾丹退きて伊犂に歸らんとすれば策妄那布坦の勁兵を擁して阿爾泰山に伏するあり進みて清朝と戰はんとするも大兵已に深入して如何ともする能はず自ら人畔き天亡ぼすを知り閏三月十三日阿察阿穆塔台に至り葯を飲みて自盡す所部盡く降り阿爾泰山以東皆清の有に歸す聖祖寧夏より賀蘭山に沿ひて邊に出でしが報を得て五月京師に回る朔漠全く平定し喀爾喀三汗復た舊牧に歸る因て其部屬を增編して五十五旗と爲す又固始汗の子達什巴圖を封じて和碩親王と爲し以て青海全部を綏服す青海厄魯特の分派に賀蘭山厄魯特あり俗に所謂阿拉山蒙古なり順治の初年より清朝に入貢し噶爾丹征討の役に從ひて功あり又世襲和碩親王と爲る其他西域の方面を見れば阿拉布坦は康熙三十年より使節を遣して款を通じ回部の國王阿卜都里什特は清廷の援を得て三十五年の九月葉爾羌に歸る西藏の達賴刺麻は已に崇德中より通じ暹羅安南又康熙の初年より通ず余輩は康熙三十六年（一六九七）を以て清朝膨脹の第一期を劃せんと欲す以後聖祖の晩年に於て淵鑑類函佩文韻府康熙字典明史稿等の大著作成り文運の隆盛を極めしを見るも其適當なるを知る可し故に次節に於て清朝と朝鮮との關係を叙述して以て本章を終らむ

第九節　朝鮮との關係

明の萬曆二十年日本の大兵朝鮮に入り京城を下すや國王李昖は明の援軍を得て僅に其社稷を保つを得たり故に深く明を德とす二十六年昖薨じ長子琿の時に當り清の天命四年明兵四路より滿洲を攻むるや朝鮮も亦其將姜宏立を遣し明を助

けしが軍利あらずして姜宏立は清朝に降れり。時に太祖書を李琿に送り去就を決せんとを求めしが報せず却りて北方瓦爾喀部烏拉部に於て清兵に抗す。其後太祖崩御の際も又弔使を發せず。時に明の總兵毛文龍遼東の遺民數萬を擁して海島にあり朝鮮と共に清兵の西征を牽制す。會ま朝鮮の叛人に韓潤鄭梅なるものあり亡命して清朝に入り鄉導となりて朝鮮を伐たんとを請ふ。時に太宗の天聰元年にして朝鮮に於ては李琿の姪李倧王位簒奪の後三年なり。

正月大貝勒阿敏以下諸貝勒に命じ朝鮮を征せしむ。十四日夜滿洲兵朝鮮の境に入り攻めて義州城に克ち兵を分ちて毛文龍を鐵山に伐つ文龍遁れて皮島に還る。進みて定州を攻め其民を降し攻めて漢山城に克ち安州を下して師を平壤に進む。城中の官民悉く遁る遂に大同江を渡り中和に駐る事七日にして二月黃州に至る。朝鮮國中上下大に恐れ援を明に求む。明の遼東巡撫袁崇煥舟師を以て皮島を援け陸兵を三岔河に遣して牽制を爲す。然るに阿敏等の軍已に朝鮮の國都に逼りしかば國王李倧妻子を棄てゝ江華島に遁れ使を軍に派して罪を謝す。大軍舟なく渡る能はず使を島に遣し軍を平山に駐めて以て待つ。倧族弟原昌君李覺等をして馬及び虎豹皮綿紬苧布等を獻じ和を請ふ。是に於て又使を遣はして江華島に往かしめ天地に誓告して和議を定め約して兄弟の國と爲る。時に三月三日なり。乃ち兵三千を義州の地に置き四月振旅して歸る。此秋倧の請を容れ義州の兵を召還し春秋二季に歲幣を輸さしめ且鴨綠江の江心に於て通商するを約す。

此年毛文龍袁崇煥に殺され三年崇煥清朝の反間其功を奏して誅せらる。五年太宗虛に乘じて諸島を征せんとし兵船を朝鮮に徵す。李倧使者に對へて曰く明國は猶吾父の如し人の吾父の國を攻むるを助く可ならんやと。以後漸く約束を奉せず。七年毛文龍の部將孔有德等の舟師を以て降るや糧を朝鮮に徵しゝが復從はず。京畿、黃海、平安三道の十二城を修築す。初め朝鮮清朝と國書を往復するや隣國通聘の禮を用ゐ互に貴國弊國と稱し不穀と曰ふ。已にして大宗掃漢部を平げ元の傳國璽を得るや內外の諸臣尊號を上らんとを請ふ。太宗朝鮮兄弟の國なるを以て之を諮らしむ李倧書を得て諸臣をして議せしむるに不可とするもの多し。乃ち邊境の臣下を戒嚴す書中丁卯の年誤りて和を講ず今當に決絕すべしなる語あり。時に天聰十年なり四月清朝崇德と改元し國號を定む。朝鮮の使節賀して拜せず。此時太宗已に

蒙古を臣とし明軍を破り內顧の憂なし十一月遂に親征の議を定め檄を朝鮮の上下に馳せ敗盟の罪を討ず。

十二月諸蒙古各兵を以て來會す。容親王多爾袞に命じて左翼となり寬甸より長山口に入らしめ豫親王多鐸に命じて先鋒となり直に國都を衝かしめ太宗親ら禮親王代善等を率ゐ續きて進發す。兵士總計十萬と稱す。時に臨津江江氷未だ合せず車駕至らんするに及びて江氷驟に堅く六師悉く濟る。豫親王の前隊三百騎を以て進みて京城を襲ひ其精兵數千を破る。李倧倉皇妻子を江華島に移し漢江を渡りて南漢山城に據る。豫親王の軍京城に入り進みて南漢山城を圍み三度外援を破り再び城兵を破る。太宗又京城に至り親ら大軍を統率して全羅、忠淸兩道の援兵を破る。明年正月容親王等の左翼の軍も亦所在勝利を博して來會す。此時に當り明國方に流賊の寇あり援兵を出す能はず八道の援兵また相繼きて奔潰し城中食將に盡きんとす。李倧策の出る所を知らず復上書して降を請ふ。太宗其親覲を要め且敗盟を主張せるものを縛して献せしむ。倧はじめて其書に臣と稱し城を出るを免されん事を乞ふ。適ま其妻子及大臣等江華島にあるもの容親王の爲に虜にせらる。翌月李倧遂に出てゝ降り明國給する所の敕印を献じ二子を質とし淸の正朔を奉じ歲時貢献表賀する事一に明國の舊制の如くするを約す。四月質子瀋、溟淸廷に至る。順治元年中原悉く平定するに至り淸廷質子を歸國せしむ。以後淸國と朝鮮との關係は重大の變更を生ずる事なく以て最近の明我治二十七八年戰役に及べり。

第三章　歐人通商の第二期

（西紀一五九五——西紀一七〇八）

第一節　和蘭東印度會社の設立

和蘭の地は其初めバタヰア人等の獨逸民族の居住地にしてシャルヽマーニュ帝國の屬地たり。西紀第十六世紀の中葉帝カール五世（西班牙王カルロス一世）の位を讓るやフヰリップ二世の有に歸し西班牙領と爲る。王の在世中和蘭の人民は代官の虐政に苦み遂に叛旗を擧げ西紀一五七九年を以て和蘭、ジーランド以下の七州は聯邦を組織し同八一年を以て獨立の宣言を發す。此頃葡萄牙に王位の爭ありて王國西班牙に合併せられしかば自然の結果として東印度地方の殖民地も悉く西領となれり。已にして里斯本に於て和蘭船捕獲の事あり次で葡蘭間の通商を禁じゝかば蘭人は此遂遠なる東洋の所領を西班牙より奪ひ其壟斷せる商權を傷けんと欲し本國に於て戰勝を得つゝあるに乘じ遠航の壯擧を企つ。而して其發達の基礎となりしものを旅行者ワン、リンスコーテン John Huygen Van Linschoten の旅行となす。ワン、リンスコーテンは聯邦の一なるフリースランドの公民なり。年稍く長じて外國の歷史を究め遠國の風習を探らんと志し十七歳の時鄕國を去りて里斯本に遊び滯留二年の後ゴア大僧正の一行に加はり西紀一五八三年印度に至り西紀一五八九年歸國に至るまで東洋に在る事殆ど七年に及ぶ。滯在中力めて見聞を博くし得る處ある毎に日々之を筆記し印度両半島住民の風俗習慣法律宗敎制度等は勿論博物地理等より產業交通通商に至るまで詳細之を編述し歸國の後之を世に公にす。時に西紀一五九五年也。此書一度出るや學者は固より商業家航海家等爭ひて之を閲讀す。蓋しリンスコーテンは里斯本より東洋に至るの水路をも詳細に記述し以て從來典籍の不備を補ひしを以てなり。當時の學界に將た一般文明の進歩に貢献しゝ事リンスコーテンの如きは實に稀に見る所とす。

此年蘭人コルネリヤス、ホートマン Cornelius Houtmann なるものあり曾て葡萄牙人に就きて東印度の航海に從ひし事あるを以てアムステルダム市の商人を勸誘して私立東印度會社を創立し自ら四隻の商船を率ゐて四月二日東洋に向ふ。此時リン

スコーテンも亦北東の航路を取りて東印度に至らんとしノワ、ゼムブラ島を發見せり。ホートマンは喜望峯を廻航し蘇門答臘島に寄港し爪哇の西岸に達す。葡萄牙人バンタムの地にありて妨害を試みしにも拘らず蘭船は土人と通商を開きしが已にして又土人の反抗を受け一隻を燒失し三隻を以て本國に歸る時に西紀一五九八年なり。航海の利益は莫大ならざりしも以後益〻盛大に赴きたる和蘭東洋貿易の先驅たるの功は沒す可らず。ホートマン歸國の年東印度に向ひしもの商船十八隻四隊より成る。東印度會社の萌芽は實に此時に在り。

東印度會社の事業たるや全く經濟の法則に反し自由を排して專賣を事とす通商の第一原則を無視するもと云ふ可し。蓋し當時未だ經濟思想の發達せざりしは云ふまでもなき事ながら會社の成立は學問上の研究に基きしにあらずして自然の法則に驅られしなり。第一東洋貿易は日猶淺しと雖も已に隱然競爭の姿を現し歐洲市場に於ける東洋商品の市價は年を追ひて低落の傾向を有す。此百難を冒し長途の航海を要する通商が一朝市價暴落に際し大恐慌を生ず可きは多言を要せず。且第二の原因として國民的感念も大に力わりしと疑ふ可らず。即ち和蘭の商人は赤道地方より西葡の商人を驅逐せんとするも到底獨力を以て成功し難きを知れり。茲に於て私人の資產と智識とを集めて社團を作り聯合協力以て國敵に當らんとす。ヤコブ、バームスケルク、ウヲルフエルト、ヘルマン、ヨリス、ワン、スピルベルグの徒其唱首たり。西紀一六〇二年三月二十日聯邦政府免許狀を與へ二十一年間喜望峯以東マゲラン海峽以西の通商權を聯合東印度會社に許可す。今其免許狀の要領を拔萃すれは左の如し。

會社は特權に對するの報酬として聯邦議政府に年額二萬五千フロリンを納付すべし。資本の總額を六百六十萬フロリンとなしアムスタルダムの州會は五分の權利を有しヲーランドの州會は四分の一ミューズ河沿岸並に北部諸州は各十六分一宛の權利を有す可し。會社は東印度地方の諸國と聯邦の名義を以て條約を締結するを得又城砦を建築し將校を任命し兵士を徵集するの權を有す。但し軍隊は勿論國家に對し主權に對し且會社に對し忠誠なる可き宣誓を要す。會社の船舶は勿論武器並に軍需品等は決して會社の承諾なくして徵發せらるゝ事なし。海軍省は戰利品の配分を要求する事ある可し。支配人は會社の負債に對し財產身體共責任

を負はず。艦隊の司令官は歸國に際し東印度の現狀を政府に報告す可し。各私立會社の本會社に合同せるの通知は直ちに現在東印度航海中の船舶に達せしむ可し。而して此報知は西紀一六〇三年に到着せゝ會社より發しゝ第一回の艦隊は十四隻より成り將官ワイブランド、ワン、ワルヰツク之が司令官として西紀一六〇二年の歲末を以て出帆し翌年の末にはスラフェン、ワン、デル、バーゲン十三隻を引率して航途に上る。兩回の經費二百二十萬フロリンを要す。西紀一六〇五年蘭人アンボイナ島を奪ひて西葡人を驅逐す島は當時香料列島商業の中心たり。翌年夏第三回の艦隊に將とし前年五月に本國を出帆しゝ支配人マトリエフ、ヅ、ヨンゲ滿剌加（マラッカ）を圍む骨壺（シロボール）の梭里檀蘭人を援く。八月十七日大に西班牙の艦隊と滿剌加（マラッカ）沖に戰ひ勝敗決せず九月二十一日再び開戰し西艦大敗す。其後西紀一六四〇年蘭人遂に葡人を追ひて滿剌加（マラッカ）を取る。其他印度大陸に於ては西紀一六五一年より商會を設け同六十年代の前半に於てマラバル海岸より葡人を驅逐し其後半に至りコロマンデル海岸より之を追ふ。又西紀一六五八年に於ては錫蘭（セイロン）に於ける葡人最後の根據地ジャフナパタムを奪ひしかば葡人益衰へ蘭人益振ふ。

滿剌伽（マラッカ）略取に就きては勢亞珍（アチン）王國の關係を想起せむ。因て第一章第四節に繼ぎて茲に同王國の沿革を略叙せむ。蓋し蘭人東洋の海面に現はれ次で英人も亦來航するものあるに及び一方に於て葡人逐日勢力を失墜する者あるに乘じて他の一方に於ては亞珍（アチン）王國は國勢逐年隆盛に赴けり。イスカンデル、マンダの治世には其主權の及ぶ所海峽を超えて遠く馬來（マレー）半島に及び骨壺（シロボール）、パハンは固より西紀一六一九年にはケダ、ペラク等も其版圖に歸し蘇門答臘（スモタラ）の本島に於てはデリー、パルス以北皆其有となる。然るに滿剌伽（マラッカ）攻擊なる歷史的思想の爲に國勢を害せり。西紀一六一五年國王は玉妃をはじめ家族を從へて同地の攻擊を企てしが激戰夜の三更に及び終に克たずして歸國す。西紀一六二三年復た滿剌伽（マラッカ）を襲ひしが同年の末に於て三十隻の一大艦隊歐洲より來りて滿剌伽（マラッカ）沖に現はれ亞珍の艦隊は殆ど全滅の不幸に陷り以後十有餘年又遠征の談を聞かず。西紀一六三六年イスカンデル、マンダ王殂す（蘭人は四一年なりとす）。西紀一六四〇年蘭人は軍艦十二隻を率ゐ亞珍王は二十五隻の艦隊を以て聯合して已に落城の境に沈淪せる滿剌伽（マラッカ）の市街を圍み多年力守せる葡人の掌裏より遂に之を奪ふ。一度此東南洋の咽喉を失ふ葡人の損害

や頗る大なり。翌年一公主亞珍王の位に即き以來恰ど六十年間女統相嗣ぎ王國の政體は化して貴族政治となる。其最後の女王の廢されしは西紀一六九九年なり。

第二節　バタヤ并アヤ市の建設

是より先ホートマンの爪哇(ジャヴァ)バンタムに至るや支那人亞剌比亞人波斯人ムール人土耳古人マラバル人ビグー人等各國の商人皆相會し同地は實に通商殷富の地たり。殊に歐洲人の嗜好せる香料の市場たり。蘭人乃ち西紀一五九八年を以て再び通商を開き四年の後商館設立の許可を得翌年其基礎を置く。當時爪哇(ジャヴァ)島には回教王に梭里檀バジャンにありて全島に君臨しバンタム、ジエリボン、ジャガトラ等西部の諸王侯も皆朝貢せり但し半獨立の權利を有す。故に間もなく蘭人は復バンタム王と條約を締結し外國の敵殊に葡西兩國人の侵入を妨ぐを約し其報酬として城寨を讓り受く但し納租の義務を負はず。且自由貿易の權と財產身體安固の保證を得蘭人の外歐洲人の通商居住を嚴禁せしむ。

西紀一六一〇年ボルト Bolt はじめて印度領總督の任命を受けてバンタムに至り國王幼冲にして權臣爭鬪するを見其永住の地にあらざるを知りジャガトラの國君の許可を受けて同地に移る西紀一六一二年蘭人ジャガトラ公と協商して戰時に際し相互の援助を約し自由貿易の許可を得居住地を割讓せしめ且西葡兩國人の通商を嚴禁せしむ。西紀一六一九年英人土侯を助けて軍功あり蘭人ジャガトラ公と二月一日を以て商議を開きジャガトラ城を英人に讓るを約す。然るに此年七月十七日英蘭の本國に於て東洋貿易に關する協商あり且新總督クン Koen の引率せる援兵の着するあり蘭人遂に約を果さず八月大にジャガトラ城を增築す。西紀一六二一年三月四日居留地をバタヤ并アと命名し東印度領の首府をアムボイナより此地に移す。

西班牙人の比律賓列島にあるものは蘭人の香料列島附近を占領し從來自家の獨占事業なりし通商の妨害を蒙るを見て其進路を抑止せんとし西紀一六〇七年の頃タルネートの冲合に蘭船の遊戈せるを聞き襲ひて船長を虜にし終身禁錮を命ず。數年の後和蘭の艦隊がマニラ灣口に投錨せるを聞き當時のマニラ市知事ダ、ジルワ守備艦の多くは或は已に難破し或は航海中にありて防禦力不完全を極めし

を以て頗る心を安んぜず。然るに蘭船は幸にも停泊する事五六ヶ月の長きに及び敢て急に進んてマニラ市を陷れんとせず。蓋し同市に入港せる支那日本等の商人の貨物を掠奪するを以て目的となしゝが如し。ダ、シルワ間を得て船舶を準備し夢に聖、馬可(マーク)の援助を受け其紀念日を以て開戰するに決し白人の戰に堪ふるものは悉く乘船し自ら司令官となりて和蘭の艦隊を攻む。激戰殆と六時間に亘り蘭艦全く敗績す。其三艦を破壞し戰利品三十萬弗に及ぶ比律賓列島が西班牙人の所有たるを失はざりしは全く此役の力也。此役を稱してブレヤ、ホンダの戰と云ふ。

前節に記しゝが如く英蘭両國は東印度貿易に關し西紀一六一九年に於て協商し相合して防護會議なるものを設けしが到底永遠に其軋轢を杜絶する能はず。西紀一六二一年蘭人バンタム在住の英人を追ひ西紀一六二三年にはアムボイナ島に於て英人佐官タワーソンをはじめ水夫十九人を捕縛す。内英人は九人にして九人は日本人一人は葡萄牙人なり。傳へ云ふ日本人某守兵に城塞の堅牢なるや否を問ふ。蘭人乃ち襲擊の陰謀を企つるものなりとし同國人を併せて一網の下に羅致し尋で英人も亦共通すとなし遂に悉く之を屠る時に二月十七日なり。處刑の方法頗る慘酷を極む。英國政府大に怒り交渉の末遺族扶助料三千六百十五磅を得しも爾來香料列島の商權は全く蘭人の掌裏に歸す。翌一六二四年英人到底競爭す可らざるを見マレー半島、暹羅、爪哇の地より退去す。ブーロールーン并にラントール等に在住しゝ英人は已に前年(西紀一六二〇年)に於て蘭人に驅逐せられたり。

第三節　臺灣の占領并に支那通商

和蘭船の東洋に至るや直に商船三隻を支那に派遣しゝが葡人の妨害を受けて通商の目的を達せず(西紀一六〇四年)其後ヤン、ピーテルクン總督となりて大にバタヰア城の面目を改め會社の事業漸く隆盛に趨くに及び將官カイツェルツーンを以て十七隻の艦隊に長とし支那に發遣す。西紀一六二二年カイツェルツーン澳門(マカオ)に至り直ちに手兵六百を以て上陸し之を占領せんとす。葡人は明朝政府の援を得全力を盡して之を擊退す。蘭艦轉じて澎湖に向ひ居住の支那人を服して城塞を築く。時に臺灣島は日本人の據る所たり。蘭人地を借りて日本に至る貿易船の寄港所となさんとす。日本人蘭人の勢力益々盛ならんとするを見て可かず。會ま福建の地

方官は蘭人の澎湖に割據せるより甚だしき損害を被れるを以て臺灣に移らんことを進む蓋し當時支那政府は臺灣の所有權を有せざりしなり。西紀一六二四年平和の條約成り蘭人は澎湖を去り日本人を襲ひて臺灣に據る。直にゼーランヂヤ城(安平城)の建築に着手し西紀一六三〇年落成す。其後更に赤嵌城を築く即ちプロヰデンシア城なり(西紀一六五〇年)。在マニラの比律賓列島の大守は支那貿易を保護せんと欲し西紀一六二六年北臺灣の基隆にサン、サルワドル城を同二九年淡水にサン、ドミニヨ城を築き殖民地を設けしも西紀一六四二年八月蘭人の逐ふ所と爲る。蘭人の同島に於ける或は行政を改革して秩序整然たらしめ或は宗教を弘布して土人に蘭語を學ばしめ同島の文明進歩を助長しゝ事尠からず。而して此頃對岸の支那大陸より難を避けて移住するもの頗る多く其長足の進歩を容易ならしめしが同島は遂に避難者一流の奪ふ處となれり。

今其事實に入るに先ち簡單に濱田彌兵衛と臺灣知事ピーター、ヌイツとの爭鬪を叙す可し。彌兵衛は日本長崎の產なり同地の代官末次平藏其商船の澎湖に於て蘭人の襲擊を蒙りしを怒り彌兵衛に托して復讐を圖る。彌兵衛船員四百七十人を得て十五門の大砲を裝置せる一艦に乘じ西紀一六二八年台灣に着す。初め蘭人の臺灣に據るや日本人の商品に對しては其關稅を免除しゝが西紀一六二六年より規則を厲行して此特權を廢止しゝが爲葛藤を生じ新知事ピーター、ヌイツ嘗て日本に渡來せる事あり。彌兵衛の至るに及び其來意を疑ひ先船中の兵器を收め且之を抑留して處分をバタヰアに仰ぐ。彌兵衛滯留三月に及びなほ歸帆の許可なきを以て之を得んと欲し同志二人と共に六月二十九日ヌイツの別墅に至り其單身なるに乘じて手から之を縛す。在留の蘭人大に驚き交渉八日の後損害賠償として遂に一万二千五十三斤の生絲幷に純銀百三十三貫餘を彌兵衛に交付す。彌兵衛ヌイツの長子以下五人を質とし同伴して長崎に歸る。然れども濱田彌兵衛の此擧は以上に記述せし外臺灣の歷史に向て何等の關係をも有せず。

グッツラフの支那史要に據るに鄭芝龍は裁縫師にして初め蘭人に仕へしが已にして徒黨を集めて海賊となり海軍を襲ふ。福建總督甚だ之に苦み欺きて福建廣東總督に任せんと約して降服せしめ北京に送りて處刑す(前章參看)。其子成功即ち國姓爺 Koksing, Koxiga 支那大陸の沿海地方を攻擊し遂に金陵府を圍みしが其破れて

根據地たる厦門をも失はんとするや初て臺灣に據らんとす。西紀一六五六年コエット臺灣に知事たり島人の國姓爺に通ずる者を捕縛す居住の支那人益々闇人に服せず。西紀一六六一年六月國姓爺急に二萬五千の兵を率ゐて上陸しゼーランヂヤ城ブロヰデンシヤ城の交通を斷つ。赤嵌城直に降り蘭人安平城を守る。兵船十隻兵士七百バタヰアより着し攻守の勢稍や一變せんとしゝも未だ島外に國姓爺を逐ふ能はず。時に清國の將官書を知事コエットに送り兵を合せて國姓爺の殘兵大陸の沿海に止るものを驅り次で其本隊を伐たんとす。蘭人乃ち兵艦五隻を派す。國姓爺其機に乘じて三面より鋭を盡して肉薄し遂に安平城を降す。蘭人重圍に陷る事九ケ月兵士千六百を失ひ占領三十八年の後遂に臺灣を放棄す(一六六二、二、一)。西紀一六六二年將官ボルト十二隻の兵船に將として閩江の江口に着す蓋し在バタヰア評議員會の命令によりて國姓爺のなほ城寨を有する厦門を奪はんが爲也故に地方官に向て共同攻擊を求めしが其協力を得ざりしを以て城寨を襲ひ火を放ちてバタヰアに歸る。翌年又十七隻に將として臺灣海峽に至り福建の地方官と同盟して金門を奪ひ次で厦門を陷る茲に於て福建全省清國の所有に歸す。地方官其報酬として逐船二隻を蘭人に給し以て臺灣回復を援く。國姓爺已に死し其子鄭經勇を奮ひて蘭人を擊退す。ボルト目的を達する能はずしてバタヰアに歸り蘭人遂に臺灣回復の望を斷つ。

蘭人のなほ臺灣に據りし時の事なり舊教の牧師にマルチニなるものありバタヰアに來り新滿洲政府の固陋ならざるを說く。蘭人葡人の支那貿易を壟斷しつゝあるに快からず大に喜びて西紀一六五三年一月使節としてフリードリヒ、セーデルを廣東に派す。葡人百方離間を試みしを以て一度商館設立の許可を得しも間もなく退去の命を受く。但し廣東の地方官はバタヰアの總督に要求して北京政府に使節を派遣せしむ。會社此報を得て直にヤコブ、ガイゼル幷にペーテル、ゴイエルの兩人を以て使節となす。一行西紀一六五五年七月十四日瓜哇を發して八月廣東に着し翌年七月十七日北京に着す。數年以前廣東攻圍の際支那婦人を娶りし二人の和蘭人ありて滿洲兵に抵抗しゝ事あり且耶蘇會の牧師等日本に於るが如く蘭人の離間の爲に放逐されん事を恐れて讒訴を逞くするあり。故に漸くにして順治帝に謁見しゝも廣東に於て通商するの目的を成功せず唯八年に一回商船四隻を以て

入貢するの許可を得たるのみ。思ふに此一行に式部官なりしヨハン、ノイホフの支那紀行こそ此行より得たる貴重なる實益ならめ。其後臺灣の到底回復し難きを見るに及び蘭人は復通商の許可を得商館を設立せんと欲し使節ワン、プールンを北京に派す。使節西紀一六六四年を以て福州に着し滯在中瓜哇より歸航せる蓬船の殖民地政府の法律に背むきしものを捕獲し交渉一年の後北京に至りしが結局其目的を達する能はず。

第四節　蘭人の日本貿易

日本と和蘭との通商は西紀一六〇〇年慶長五年蘭船チャリチー號の豐後の近海に漂着しゝに起因す。西紀一五九八年ホートマンの歸國に際し蘭船四隊東洋に向ひしは已に第一節に說けり。其一隊は五隻より成りジャクス、マヘー隊長と成り英人ヰルリヤム、アダムス指針を司り其年六月廿四日蘭國を發しマゲラン海峽を經て東洋に至らんとしゝが四隻は悉く其所在を失ひ唯チャリチー號のみ西紀一六〇〇年四月十一日を以て豐後の近海に碇泊す。船員生存するもの僅に十五人マヘー已に洋中の孤島に仆れジエーン、ヤンスステン代りて船長たり。家康之を聞き堺浦に廻漕せしめ更に江戸に到らしめヤンスステン幷にアダムスに賜ふに邸宅を以てす。其後數年にしてヤンスステンは歸國の許可を得しが滿剌伽附近に至りて本國の艦隊に會ひ復船長となり葡人と戰ひて戰死す。アダムスは永く家康に仕へて其信任を受け相州三浦郡に於て采地二百五十石を賜はり名を安針と改め終に我國に其餘生を送る(西紀一六三四年死す)傳へ云ふヤンスステンの住ひし地をヤヨスガシと稱しアダムスの住ひし地を安針町と稱すと。

西紀一六〇九年七月慶長十四六月蘭船レツド、ライヲン號小舟グリッフオン號を率ゐて平戸に來着す。此二船は公立東印度會社の所有にして西紀一六〇七年の臘月を以て本國を出發せるエルホーエンの艦隊に屬し滿剌伽半島の晉壺(ジヨホール)より日本に向ひしものなり。平戸の城主松浦氏船長クルウンペイケを江戸に送致す。家康之を引見し奉ずる所の國書を見るに其意通商を請ふに在り故に之を許可し和蘭船日本に渡海の時何の浦に着岸すとも可なりとの朱印を與ふ。時に我七月二十五日なり。クルウンペイケ等大に喜び歸路平戸に到りて商館設立の議を決し二人を留めて其

事を司らしめ十月歸國の途に就く。是を日蘭通商契約の權輿となす。此時に當り前年の漂流者アダムスが彼我の間に立ちて至大の便益を與へしは說くを待たず。蘭國政府は此免許を得しを以て西紀一六一〇年十二月十八日付の國書を認め其商船に各種の歐洲商品を搭載して和蘭を出帆し慶長十七年八月十二日を以て平戸に着す。是蓋し最初より我國に來るの目的を以て和蘭を發したる商船の嚆矢なり。此に於て正使アンデレイ、コホロラハル前年六月を以て已に平戸に着せる「まろく」總督の使者ジャコブ、スペックスを以て副使となし十月八日駿府に來り國書幷に獻品を捧ぐ。廿九日家康蘭使に答簡を與へ且其請に任せてダニー、バンタムとの互市を許す。兩地は當時和蘭の市場あるを以てなり。是より平戸港に於ける和蘭貿易は年と共に盛大に赴き其商船の停泊地なる港南一里を隔てたる河內浦も亦殷富の市場となる。時に我國に於ては基督敎嚴禁の方針を採用しゝかば蘭人は其敵視せる葡西兩國商人の隱謀あるを幕府に告げ益其信用を博す。已にして西紀一六三七年肥前天草に於て基督敎徒の叛亂あり蘭人幕府の命を以て賊城を砲擊し其邪敎を奉せざるを証す。亂平きて後幕府鎭國の命を施き悉く葡人を放逐し蘭人にのみ通商を許す。時に我寛永十六年七月五日なり。其後寛永十八年四月二日蘭使の入講に際し幕府平戸を廢し更に長崎に移らしむ。是より以後二百十餘年間長崎なる出島は蘭人と共に日本の歐洲貿易を特占せり。

第五節　蘭人と爪哇帝國との關係

爪哇の國敎は回々敎なり。然れども其國敎となりしは西紀一四七五年頃マジャパヒットの古帝國倒れて回敎徒勝利を博しゝ後にあり。傳說によれば爪哇は元ラサカ人種の據る所なりしが印度のアスチナ國王其臣アチ、サカを爪哇に派し其後遂に同島に印度人種の大王國起るに至れり。故に此アチ、サカの爪哇者を以て同國の紀元とす。西紀第七五年に當る。西紀第十二世紀の末年回敎はじめて同島に入りしも勢力微々として振はず。西紀第十五世紀に入りて漸く東部諸州に傳播し回敎諸侯の同盟軍遂に當時全島を威服せしマジャパヒット帝國を滅すに至れり。葡萄牙人が西紀一五一一年はじめて爪哇に至りし時はバンタムにはなほ印度敎を奉せる國王ありて之を統治しゝが回敎王の其地に着するに及び葡人は順次に其立脚地を

失へり。但し山中内地等を除き全島の改宗されしは第十六世紀の事にして西紀一六二〇年蘭人のバタヴィアに基礎を定めし頃は其已に成功し了れる時とす。

舊帝國に代りて爪哇の主權を握りし最初の梭里檀はデマクに在住しゝが西紀一五七七年バジャンの梭里檀之に代り西紀一六一四年よりマタレムの梭里檀之に代る。マタレム朝の太祖はバナムバハム、セナバアチと稱し爪哇帝國中興の祖なり。初め瓜哇(スヴーナン)帝は蘭人に好意を表し其の通商を許可しジャバラには商館を設立せしめしが偶〻東部に叛亂あり兵力を盡して親征す。蘭人其虛に乘じてジャガトラに據る。瓜哇(スヴーナン)帝即ち兵を派してバタヴィアを圍ましむる事二回蘭人よく防禦し遂に之を陷るゝ事能はず。西紀一六四二年帝アグング Agung 殂し其子アリア、マタレム嗣ぐ Aria Matarem 當時蘭人は已に爪哇の舊領なるボルネヲのスカダナ蘇門答臘のパレムバン等を威服しバタヴィア益盛なり。西紀一六四六年九月二十四日爪哇帝はじめて蘭人と條約をバタヴィアに締結す。中に會社と爪哇帝とは其共同の敵に對し互に扶助す可し爪哇の臣民は會社の許可を得て外國貿易に從事す可し等の條項あり。西紀一六五九年七月十日バンタムの梭里檀も亦蘭人と講和して其通商を許可し商館設立の地を給す。

アリア、マタレム帝の晩年に際し暴虐の政治を施し各地の土侯服せざるもの多し。マヂュラの領主等兵を擧げマカーサル族等之に應じて王師を破り諸州相次て降る。マカーサル族のはじめて爪哇に來りしは西紀一六七五年ヒレベスの一酋長が不平を抱きて出奔し東爪哇に移住しゝに始まる。國内の浮浪を集め掠奪を常業とせる蠻族なり。爪哇帝皇子を使節とし蘭人の許に派し援兵を乞ふ時に西紀一六七六年なり。蘭人好機乘ずべしとなし直に之を諾し將官スピールマンをして一隊の援軍を率ゐて爪哇兵に合し叛徒を擊たしむ。叛徒の形勢一變し國都マタレムはじめて安きを得たり。翌年二月爪哇帝援助の功に酬ひバタヴィアに於ける蘭人の支配權をクラワン河に及ぼし國内到る處商館設立の許可を與へ軍費として金二十五万弗米四万八千石の支出を諾し其他種々の特權を付與す。

スピールマン、マヂュラ人マカーサル族征討の全權を委任され爪哇兵幷に蘭軍に將として五月叛將を破り之をケーヂーリーの地に走らす。然るに國都附近にありて志を叛徒に通ずるものあり官軍の外にあるに乘じて兵を擧げてマタレム府を襲

ふ。瓜哇帝西に走り叛徒首府に入る時に六月なり。皇帝次で逆族に殂す皇子に遺言して曰く蘭人と親和して東部の叛徒を平定せよと。皇子アヂバチ Adipati 位を嗣ぐ。蘭人新帝を助けケーヂーリーに叛將を攻む。マカサール族の一酋長蘭人の下に戰ふものあり敵軍の同族酋長を說きて內應せしむ。砲擊五十日の後敵將城を棄てゝ走る。叛徒の首府に於て得たる掠奪品は復び悉く官軍の有に歸せり。西紀一六七九年十二月二十五日叛將降る紹ぎて之を殺す。茲に於て瓜哇帝は蘭人援軍の力によりて叛徒を鎭定し國內平穩に歸す。蘭人瓜哇帝國の守備に供すと稱しセマランの地に常備兵を駐屯する許可を受く。是より先瓜哇帝マタレムを以て不吉なりとし新都を建てケルタ、スーラ Kerta-sura と稱す。

其後スラバチ Surapati なるものあり初め一蘭人の奴僕なりしが主人の怒に觸れて出奔し凶惡の徒と共に和蘭の官吏を殺す。スラバチ才氣あり奇計を以て帝の信任を博す。蘭人タックスなるものに命じてスラバチを首府に捕縛せしめしに排蘭の黨派勢力强くタックス重傷を負ひ士卒多く斃る。而して時に帝稍蘭人を疎ずるの情あり陽に蘭人の求に應じてスラバチを追はしめ陰に脫走せしむ。蘭人よく其情を知る。已にして帝殂し其子親王アヂバチ位に即く。是より先蘭人は西紀一六六七年十月十日の條約を復び宣誓せしむ是同年二月二十五日の約束を約文となしゝもの也。且進みて先帝の已に默諾しゝ處なりと稱しジャガトラ公國即ちウンツン、ジャワ並にクラワン兩河間の地を割讓せしめ將官スピールマンの援助功を奏するや其報酬としてクラワン並にバマヌカン兩河間の地をも得たり。蘭人は又西紀一六八四年四月十七日に於てバンタムの梭里檀と條約を締結しタンラン河口より水源に溯り夫より南海まで一線を畫し以てバンタム領と蘭領との境界となし其他蘭人の敵視せる國民を助けざる事等を約せしむ。シエリボンの三侯も亦西紀一六八一年一月六日を以て危急に際し蘭人と相互に援助す可きを約す。其シエリボンの諸侯和蘭總督の許可を經ざれば城塞を築かず等の項に至りては蘭人權力の盛なるを見る可し。此比マヂユラ島民も亦瓜哇帝の任命せる知事を好まず叛旗を擧げ西紀一六八三年全島蘭人の保護領となる。

親王アヂバチの位に即くやたゞちに使節を蘭人の許に派す。しかるにアヂバチの叔父親王ヒューガル Pugar 新帝の性質狠戾なるを以て其民心を得ざるに乘じ叛

を圖りてセマラン駐屯の蘭軍に投じ爪哇帝と稱す。兩帝の使者同時にバタヰアに着す蘭人新帝の使節慣例に反する所ありと稱し遷延時日を送る。已にして新兵の歐洲より着するあり乃ち西紀一七〇四年三月十八日を以て親王ピューガルを助くるに決し援兵を出す。六月十九日蘭人セマランに於てピューガルの踐祚を承認す。蘭軍進みてケルタ、スーラを攻め親王アヂバチ逃れて親王ピューガル位に即く。翌年十月五日蘭人新帝に迫りゲバンの地を得シェリボンの獨立を承認せしめズメナップ、パマカラン兩州の保護權を得セマラン、カリンガヱ、トルバヤ、グマラク等の要地を割讓せしめ又他の歐洲人の通商在住を禁せしめ同十一日には帝の護衛兵として蘭兵二百人をケルタ、スーラに置き其駐在の費用として毎月西班牙銀千三百弗の支出を約せしめ西紀一七〇六年七月十二日國境確定の條約に調印す。

親王アヂバチ、スラバチのなほ東爪哇にあるを以て兵を合して東部を略す。蘭兵爪哇兵と共に進みて其根據とせるケヂリを拔く。スラバチ負傷を蒙り逃れて山中に入りて死す。アヂバチ其遂に敵せざるを見蘭人に降りて一地方に割據せんとす。蘭將ノックス給きて其請を容れ西紀一七〇八年七月十七日スラバヤに會して直に捕虜となしバタヰアに送り次で錫蘭島に送る。マジャパヒット帝國より傳來せる有名なる爪哇帝の寶冠マコータmakotaはアヂバチの廢位と共に其所在を失し以來爪哇の皇帝は帽子を戴けり。蓋し蘭人已に爪哇の實權を左右し帝は唯其傀儡に止まるのみ。是亦其變遷を示すものなりと云ふも可ならん。

第六節　英人の通商

英國もまた古羅馬帝國の一部なり然れども其瓦解に際しアングル種族サクソン種族等獨逸民族の來り侵すや悉く在來の人種を驅逐しゝを以て全く羅馬時代の遺風を絶てり。其後西紀一〇六六年北人の血統に出でたる佛國のノルマンヂー公ヰルリヤム入りて英國を一統し王位に即く是を英國現王室の太祖とす。西紀第十六世紀中葉時の女王メリー西班牙のフヰリップ二世と婚し當時勃興せる新教徒を虐待す、故にメリー殂してエリザベスの王位に陞るや躬ら新教を奉じて西班牙と斷ち且つ宗教の爲に同國に對して叛旗を擧げたる和蘭を助く。西王大に怒り西紀一五八八年百三十二隻の大艦隊を以て一擧して島帝國を滅さんとす。英將ホワル

ド、ドレーク、ハウキンス等之を海峽に迎へ大勝を博す。是より西班牙の海上權力は漸く衰運に向ひ英人も亦和蘭人と共に遠く東洋の海上に其船を進むるに至れり。」西紀一五九九年蘭人は其東洋貿易の基礎漸く堅固ならんとするを見て胡椒の市價を一斤三志より一躍六志甚たしきは八志まで高めたり。此年九月二十二日倫敦の商人は一會館に相會し市長も出席して議長席に就き會社を組織して印度と直貿易を開かんと計畫す。女王エリサベスも亦コンスタンチノープルを經てスアヂオン、ミルデンホールを莫臥兒帝の朝に派し英國の會社に特權を許可せんことを求む。西紀一六〇〇年十二月三十一日英國東印度會社は遂に皇室の免許狀を得て組織せられ、東印度通商倫敦商人組合」と稱す。最初は株主百二十五人より成り資本金七万磅なりしが西紀一六一二、三年の頃株式組織となりしより增加して四十万磅となす。其後各種の會社組合等起りしも皆此會社に合併せり今其沿革を略叙せむ。」クールテン組合は一名アッサダ商人組合と稱す。マダガスカル島に於て設けし商會の名を以てしかく稱せり。西紀一六三五年を以て設立せられしが激烈なる競爭の後西紀一六五〇年上に記せる倫敦商人組合に合併す。間もなく西紀一六五四年に冒險商會社なるもの時の主權者クロムエルより印度貿易の免許狀を得しが二年の後亦合併す。其後西紀一六九八年に二百萬磅の資本を以て有力者の保護を得て組織せられし共立東印度通商會は競爭者中最も恐るべき者なりき。エベスンの日記同年三月五日の條に舊東印度會社は十票の差を以て國會に於て新會社の爲に其營業を奪はれたり狗を挑撥して一疋の虎を窘むるを見物せんとて同志の議員闕席しゝが爲也とあるは即此會社の事なりされど西紀一七〇八年ゴトルフォン卿の斡旋によりて交渉成り翌九年合併して東印度貿易英國商人聯合會社と稱す此頃會社は政府の公債三百萬磅を五朱利付きにて引受け其報酬として喜望峰以東マゲラン海峽以西の通商權を一手に掌握す。

西紀一六〇〇年より同一二年に至る最初十二回の航海は一航海毎に出資して其經費に供しゝが第四回の外は常に利益莫大にして其率十割以下に下らず。西紀一六一二年より株式組織に改ひ。第一回(西紀一六〇一年)の航海はジェームス、ランカスタル之が長となり葡人の妨害を排して蘇門答臘島の亞珍瓜哇のバンタム等と通商を約しバンタムには西紀一六〇三年を以て商會を設く。西紀一六〇四年スア

ヘンリ、ミッドルトン第二回の航海を試みバンダ、アムボイナ諸島に其商業を擴張す。西紀一六〇八年デー、ミッドルトン(第五)バンダに至りしが蘭人の抵抗に遭ひ轉じてブーローエーに通商す。西紀一六一一年スア、ヘンリ、ミッドルトン(第六)カムベーに若し葡人と開戰して勝利を得同地の政府より特權を受く。西紀一六一〇年より同一一年に亘り佐官ピッボン(第七)マズリパタム、暹羅、太泥(ダニー)等に代理店を設く。其後西紀一六二三年アムボイナ島に於ける虐殺事件より延きて英人は到底蘭人に頡頏するの難きを知り印度群島の通商を停む。(第二節參看)西紀一六一五年佐官ベストの引率せる會社の艦隊はタプチ河口なるスーラアトに近きスワルリーの地に於て優勢なる葡國艦隊の攻擊を受け激戰四回の後全く之を殲す。印度土民從來葡人を以て抵抗し難しとなす茲に於て大に英人の伎倆侮る可らざるものあるに驚く。西紀一六二〇年英人葡人と復た印度の近海に戰ひ葡人大敗益土人の信用を失す。西紀一六二二年英人波斯と同盟してオルマス在住の葡人を追ひて之を取る。かくて印度西海岸に於ける英人の勢力增加すると共にスーラアトの居留地は同地方の主權地となれり。此の居留地は西紀一六一四年の創設に係れり、西紀一六二九年再び瓜哇のバンタムにスーラアトの代理店を設け同三五年獨立の府治と爲す。西紀一六三九年マドラス附近に聖ゼオルヂ城を設く建設の當時バンタムに隸しゝが同五三年獨立して府治となり印度東海岸の首權地となる。西紀一六六一年英王葡國の公主を娶りし時孟買を讓り受け同六八年會社に附與す。西紀一六八四年西海岸の首權地をスーラアトより孟買に移すの命あり八六年より移轉に着手し八七年移轉し了る。ベンガル地方は西紀一六四〇年比よりフーグリを始めバトナ、ダッカ等各地に商會を設け同八一年にはマドラスの支配を脫して獨立す。西紀一六八五年英人莫臥兒(モーグル)帝國に對して宣戰しスーラアトの附近に於て敵の商船を捕獲し八七年遂に帝國と媾和す。在ベンガルの英人は交戰の後西紀一六八九年一度同地を去りてマドラスに歸りしが同地總督の請により復通商を開始する事となり翌年カルカッタ市を建つ。當時年額千百九十五ルーピーの借地料を以て借入れし此地こそ後年二世紀を經て英領印度の首府東洋に於ける歐風の大都となれり。

英人が日本の通商を開かんとしゝは西紀一六一一年四月十九日の事にして此日

東印度會社は船長ジョン、セーリスに命し日本に向はしむ。セーリスは翌年十月テームズ河口を發し西紀一六一三年六月十一日に至りて平戸に着す。時に慶長十八年四月二十三日なり。已にして前年蘭船の航海長として日本に漂着せる英人アダムス報を得て平戸に至りしかばセーリスは其言を容れて駿府に向て出發し家康に面會して國王ジェームスの書を奉呈す。同年八月廿八日付を以て家康之に通商免許の朱印幷に英王への答書を與へしを以てセーリスは乃ち平戸に歸りて商館を建てアダムス以下八人の英人を留て事務を執らしめ歸國の途に就く時に我十一月五日（一二五〇）なり。在平戸の英人は支店を大阪、江戸、對島に設け代理店を堺、京都、駿河、浦賀、長崎等に置きしが其後間もなく家康死し（西紀一六一六）且蘭人が英王の天主教に傾くを利して之を江戸幕府に讒訴しゝより遂に其商業を平戸長崎に限るに至る。然るに東洋の海面に於ける英蘭兩國の軋轢益甚しく英人は到底之に抵抗する能はざりし事上に記したる如くなるを以て西紀一六二二年（元和八）瓜哇ジャガトラ在住の通商監督官命を平戸の事務長コクスに傳へて遂に翌年を以て其商館を引拂はしむ。西紀十七世の初年に於ける英國の日本通商は斯の如く全く失敗に終れり。

第七節　其他列國の東印度會社

蘭英以外の歐洲列國も亦東印度會社を設けしもの少からず時期の上より論ずれば後章に紀述するを以て穩當なりとなすものあるも今一括して茲に記さむ。北歐の丁抹は西紀一六一二年を以て第一東印度會社を設け同七〇年に至りて第二を建つ。コロマンデルのッランクエバル幷にベンガルのセランポールの兩居留地は西紀一六一六年を以て其建設する所なりしが西紀一八四五年に至りて兩地とも英國に買收せらる。西班牙王が皇立比律賓列島會社を設けしは西紀一七三三年なり西紀一七二二年十二月十七日獨逸皇帝オスランド會社を設け一時甚だ有望なりしも同八四年に至りて破產す。西紀一七五〇年九月一日普魯士に亞細亞通商會社起り西紀一七五三年一月二十四日ベンガル通商會社成立し西紀一七三一年六月十三日瑞典の會社免許狀を得西紀一八〇六年に至りて其組織成りしも皆事業を營む事至て僅少なり。蘭英以外にありて最も注意を要す可きは思ふに佛蘭西ならむ。

佛蘭西は羅馬の名將チエザルの征服せるガールの地にして人種大移動の時に際しフランク種族等之を占有せり。然れども在來の羅馬人種はよく占領者を同化しゝかば佛蘭西は羅馬民族諸國の一に算せらる。西紀七三二年シャルゝ、マルテルがツール、ポアチエーの間に回教徒を破りて其侵略を止めしより漸く西歐に重きをなしシャルゝ、マーニュに至りては遂に西羅馬帝の位に即くに至れり。然るに其後帝國三分されて今の佛蘭西は今の獨逸と分離しシャルゝ、マーニュの統絶ゆるや佛蘭西公ユー、カペー王位に即き初て巴里を以て首府となす。時に西紀八九七年なり。當時諸侯の權力頗る盛にして國王は僅に其名を存するに過ぎず殊にノルマンヂィ公が英國の王位を纂ひしより以來漸次に婚姻上の關係より佛國の大半を有し遂に兩國の間に所謂百年戰爭(西紀一三三九――西紀一四五三)を生ずるに至れり。戰爭の結果佛國はカレイを除くの外悉く大陸より英人を驅逐し爾來國勢年と共に隆盛に赴き西紀一六〇四年ハンリ四世の治世に及び六月一日初めて王立東印度會社に設立の免許狀を下附す。但し此會社は流產の不幸に會せり。

ルーアン市の商人等深く望を東洋貿易に繫ぎ前記會社の株主に向ひて交渉を試み西紀一六一五年七月に至りて免許狀を讓受け翌年遠征隊はセーン河口を出發すタブルニールの紀行は此時の著なり。西紀一六一九年ボリュー三隻の艦隊を以て東洋に向ひ翌年十二月アーヴルに歸着せり亞珍附近に於て其一隻を失ひしが積載せる貨物は十六萬磅の價格を有しゝと云ふ。西紀一六二八年三たび東印度會社を興し西紀一六四二年四たび之を設く。共に有名なる宰相リシェリューの計畫に成り其最後の免許狀に於てはマダガスカル島の占領權を許可す。マダガスカル島は西紀一五〇六年八月十日葡人ダルボケルケの初めて發見しゝ所なるも西紀十七世紀の前半に於て英人蘭人共に之を占領せしが西紀一六四〇年蘭人此地を去るに乘じ同四三年佛人はじめて居留地を設く。佛人は亦西紀一六三八年を以て今のブールボン島を占領し十年の後遂に之を王領となして命名す蓋し同島は西紀一五四五年ドン、ペドロ、ダ、マスカレニヤスの發見せる所にして始めマスカレニヤス島と稱しゝなり。然るに西紀一六四三年リシェリュー死してマザラン嗣ぐや專ら力を內治に注ぎ殖民事務の如き又顧みるに暇あらず。

西紀一六六一年コルベールのマザランに嗣ぐや銳意經濟上の改革を試み西紀一

六六四年九月一日遂に東印度會社を設立す。翌年三月四隻の大船ブレスト幷にアーフルを發してマダガスカルに向ひ其又翌年印度に向ひて遠征を發す。カロンなるもの之を統率し西紀一六六八年スーラアトに至りて印度に於ける第一の佛國商館を設く。翌年第二の商館をモズリパタムに置き次で又サン、トームにも建てしが錫蘭(セイロン)島のトリンコマリーに遠征を試み其失敗に歸しゝが爲免職せらる。フランソアー、マルタン之に嗣ぎ西紀一六七四年蘭人をサン、トームに拒きしが籠城八ケ月の後遂に其地を棄つ。然るに是より先マルタンはビジアプール王より商館建設の地を得しを以て西紀一六七五年の年末に至りては其地は已に印度に於ける佛國商業の中心となれり。今もなほ佛人の所有せるポンヂシェリ是なり。西紀一六八八年莫臥兒(モーグル)帝アウランゲジーブ佛國の商人にシャンデルナゴールを割く。西紀一六九三年マルタンは再び蘭人の圍む所と爲り。僅に六十人の歐人と三百の土民兵とを以て八百の攻擊軍に抵抗し防戰二週間に及びしが九月八日遂に開城す。而かも佛蘭兩國西紀一六九七年を以てライスヰックに和を講じゝ爲マルタンは復ポンヂシェリの知事となり次で西紀一七〇一年に至り佛領東印度總督に任せらる。

西紀一七一九年佛國は東印度、西印度、セネガル、支那の四會社を合併して印度會社を設く其支那通商殖民を目的とせる會社は西紀一六九八年の創立なり。翌西紀一七二〇年佛人マウリシヤス島を占領して其名を佛蘭西島と改む。同島も亦はじめ蘭人によりて發見されセルチ島と稱しゝが蘭人の占領せるに及ひて其の領袖ヲレンヂ公マウリシヤスの名に因みて命名せり。然れども蘭人は西紀一六五一年に於て喜望峯に殖民地を設けしより其必要を感せざるに至り之を放棄す。佛人ブールボン島に良港なきを以て遂に之を占領しゝなり。西紀一七三四年佛國政府はベルトラン、ブランソワ、マアヘ、ヅ、ラブールドンヂを以て佛蘭西ブールボン兩島の總督に任ず。蓋し佛國は此時已にマダガスカル島を放棄せるなり。ラブールドンヂは西紀一六九九年を以てサン、マーロに生れ十歳より遠洋航海の船に乘じ東洋にある事殆ど二十余年深く其形勢に通せり。ラブールドンヂ翌年を以て任地に着し施設する處多くして大に兩島の面目を改めしが會社の理事と意見合はず一たび其職を辭す。西紀一七四一年再び印度に向ひて同島に着しゝが次で英佛開戰の報に接し大功あり。開戰の當時に於ける東洋の佛領は兩島とポンヂシェリとに分劃せり。

ポンヂシエリの屬領中マアヘは元メイトリと稱し西紀一七二七年佛人の初めて占領せる所なるも後年ラブールドンヲの功績によりて其基礎を堅固ならしめしを以てかく改稱するに至れり。十一年の後ヅウブレイはタンヂォール王の相續に干渉してカリカルの地を得同四〇年ユーナヲンを占領す。印度に於ける英佛爭鬪の顚末は後章に於て詳述すべし。佛國東印度會社は西紀一七六九年王命を以て其特權を剝奪され西紀一七九六年遂に議會の廢止する所となる。

第四章　露國東方侵略の初期

第一節　エルマーク以前露國と西伯利との關係

（西紀一五八一―西紀一七三二）

露西亞は其地北歐の大半を占め西羅馬帝國滅亡の頃よりスラヴ民族の據る處となれり。此民族は亦アリアン人種の一派にしてチユートン民族に次ぎて歐洲に移住せり。露國の舊記なるネストルの年代記によるに西紀八六二年瑞典人ルーリックと兄弟ノヴゴロット市民の請により其地に移る。是を露國建設の太祖となす。善しルーリック招待の傳說は瑞典人侵略の事實を隱蔽せるものに外ならず。而かも二三世にして侵略民族は全く從來居住のスラヴ民族に同化さるゝに至れり。大祖ルーリックの死後國都をキーエフに移しゝが其後國內分裂して爭亂紀えず西紀一一六九年キーエフ一度仆れてより政治上の中心復求む可らず。蒙古人種の侵略其功を奏しゝは主として露國の統一を闕きしが爲なり。西紀一二二四年露兵カルカ

河岸に於て成吉斯汗の長子朮赤(ジュト)の軍と戰ひ大敗す。朮赤の子拔都(バトウ)西紀一二三七年を以て大軍を率ゐて露國の境に入り先リヤサニを下し翌年ウラヂミールに克ち連戰連勝露國の大半を服し都をヴォルガ河の分流アストゥバに建てゝ之をサライと名け國を金黨と號す。

ノヴゴロッドは西紀八八二年比より漸く自治の制度に基きて專ら力を通商に竭し且其地遠きを以て惟り金黨汗國の侵略を免れ惟西紀一二六〇年より貢使を出しゝのみ故に國勢益ゝ隆盛に赴き西紀第十四世紀に於ては其領地西はプスコフより東ウラル山に至り南はトゥヱルより北白海に及べり。而して初めて西伯利土人と交渉しゝは此ノヴゴロッド人なり。蓋し東北方の攻略は西南方に比して容易なると又獸皮の貴重なるもの東北方に多きが爲也。西紀第十一世紀の中葉よりノヴゴロッド人は西伯利に向て遠征を試み異吾兒(ウイグル)人を服從せしめしが其反覆常なきを以て屢ゝ兵を出し西紀一三六四年に至りてヲビ河の沿岸を略取す。此後ノヴゴロッドは莫斯科と葛藤を起し西紀一四七八年莫斯科大公イワン三世の時に至り遂に其併呑する所となる。

莫斯科は西紀一一四七年ルーリックの後裔ゼオルギ、ドルゴルキの創設せる所なり。數傳して**カリタ**(西紀一三二八年より同四〇年まで)に至り莫斯科公より一躍して大公と爲る。時に金黨汗は拔都(バトウ)より七傳して月祖伯(ツスベグ)汗の世なり露西亞全版圖の租稅を徵集して之を汗に納むるの權利を大公に授く。是ぞ莫斯科大公が露國を統一しゝ基なる。西紀一四六二年イワン三世即位す大公略に富み望大なり東羅馬帝の血統を傳へたる公主を娶る。是露國が皇帝(ツール)を稱する理由なり。公主も亦大志あり。イワンに勸めて金黨汗と絶たしむ時に西紀一四七八年なり。汗怒りて兵を出しヲカ河に至りて露兵と會しゝが克つ能はず。莫斯科大公の威名漸く遠近に聞ゆ。西紀一四八四年西伯利汗異吾兒(ウイグル)汗等皆歸服す。西伯利府は今のトボリスク府を距る十七吉米の地にありしと云ふ。イワン三世の孫イワン四世西紀一五四七年を以て初めて皇帝(ツール)の位に即く。時に金黨汗國は已に前世紀より分裂してクリメア、カザン、アストラハン諸汗國となり國勢衰弱に陷る。イワン四世西紀一五五二年カザンに克ち同五四年アストラハンに克つ。惟りクリメアは土耳古の屬領となり久しく露土交戰の原因をなせり。西紀一五五五年西伯利汗使を露國に遣し永く藩屬となり貢租を納

め露帝を以て西伯利王となし其勢威に賴りて他の侵入を防がん事を請ふ。イワン四世之を許し親ら西伯利王の稱號を受く。西紀一五六三年キルキズ汗ムルタセフの子庫程、西伯利汗を攻殺し自立して西伯利汗と稱し露國の納貢を絶つ。庫程汗は拔都の後裔にして月祖伯汗の後なり。西伯利府城砦の守備稍弛ひしより兵を發して傍近の各汗を伐ち露國の境を侵す。是に於てか哈薩克エルマーク西伯利侵略の事起る。

第二節　哈薩克人エルマークの西伯利府侵略

哈薩克又コッサックと稱す。語源は韃靼語に出で元來盜賊の義なりしが又山賊の意を有するに至れり。小露西亞人波蘭人、韃靼人、大露西亞人等の雜種にして露西亞波蘭の南部に於ける人烟稀疎の地に居住し遠く土耳古韃靼の境に亘る。初め之を二大族に分ち一をドン河流域の哈薩克となし他の一をニーペル河流域の哈薩克と爲す。イワン四世哈薩克人の專横を怒り兵をドン河の流域に遣して之を平定せんとす。哈薩克の統領にエルマークなるものあり勇敢にして膽略あり露人の攻擊に敵する能はざるを見揚言して曰く我黨今日の計は唯進むにあるのみ宜しく命を天に委し韃靼人の邦土に闖入せむと。西紀一五七八年先づヴヲルガ河を溯りカマ河を渡りてストロガノフの殖民地に至る。ストロガノフは露人なり西紀一五五八年イワン四世の許可を得てカマ河附近の原野を開墾し韃靼人の防衛たらんを期す。然るに西紀一五七四年庫程汗の兵を受け其掠奪に苦みしを以て喜びてエルマーク等を容れ兵器糧食を給して西伯利府の攻擊を助く。西紀一五七八年十月八日エルマーク哈薩克人八百餘名を率ゐて進發しゝが路を失ひて同府に達する能はず翌春一たびストロガノフの許に歸る。

西紀一五七九年六月二十四日エルマークは再び征途に上りチウソウヲヤ河を溯りてセレブリヤンカ河の一支流に上陸して冬居す。翌年五月十三日シウラフリ河を渡りバランチ河に轉じタギリ河の河岸に於て韃靼汗の部下を破り其居城即ち今のトウリンスク府を取り八月十三日汗の居城トイムチ即ち今のチユメン府を略取す。蓋し韃靼人は專ら弓矢を使用し哈薩克人は小銃を使用しゝを以て連戰勝を制するを得たり。

西紀一五八一年五月二十一日エルマークはトイムチ城を發しトウラ河を下る。河嘴に於て韃靼六汗の聯合兵に會し劇戰數日の後大勝を得六月二十日トボル河に出で又韃靼の兵と戰ひ且進み且戰ひ八月二日タバサンに於て韃靼の勇將マメトクリを破り八月十三日庫(クチウム)汗の部下カラチアの居城なるカラチノを奪ひ九月二十六日トボル河嘴に於て韃靼人を破り翌日アチク城を略し冬居の策を定む。十月十三日庫程(クチウム)汗兵を出してチウワシ山麓にエルマークを擊ち進みてアチク城に迫る。エルマーク之と交戰して韃靼兵を擊退し十一月四日再び庫程(クチウム)汗の兵をチウワシ山麓に破る。庫程(クチウム)汗六日の夜を以て西伯利ピチクトラ(今のトボリスク府に近し)アバラク等の諸城より妻子財貨を携帶しイシムの曠野に逃去す。十一月七日エルマーク、西伯利城に入り部下を慰勞して土人を撫育す。韃靼人をはじめ傍近在住の俄斯札庫(スクチウム)人窩克爾(ウオクル)人等降附するもの多し。

此年冬マメトクリ、アバラク湖に於て哈薩克人二十人を殺す翌一五八二年三月四日哈薩克人の一隊マメトクリを生擒す。マメトクリは韃靼人中の勇將にして庫程(クチウム)汗の深く望を置きし所なりしが今や捕虜となり且西伯利前汗の一族セイヂヤク兵を募りて讎を報せんとするあり殊に部下カラチアの叛旗を擧げて逃去するあり庫程(クチウム)汗爲す所を知らず。エルマークは其部下に命じてイルチス河の沿岸を攻略せしめ六月六日韃靼人サマラ汗の居城を略取す。十一月エルマーク其部下イワンコリツオに命じ黑貂皮六十枚黑狐皮二十枚、臘虎皮五十枚を齎して露帝イワン四世に呈し且西伯利の地を獻じ以て前罪を償はんとす。イワン四世之を嘉みしエルマークを以て西伯利公に封じ甲冑を賜ひ又哈薩克人には各々物を賜はりて其功を賞す。

西紀一五八三年三月十五日イワン四世はボルホフスキーを以て西伯利の將軍に任じて民政を管轄せしめグルホフを事務官となす。十一月中旬一行西伯利城に達しエルマークに代りて民政を統轄す。爾後西伯利の各府に將軍を置き兵政裁判を司り纖毛皮稅を徵收し流罪人を管理する等に至るまで悉く之を統轄せしむ。又毛皮、酒類、煙草、大黃、巨象骨等の貿易を以て皆官業となし將軍に命じて之を管督せしむ。而して將軍は各自獨立して相互に關係する事なく唯莫斯科に西伯利政廳を置き西伯利全體の事を管轄せしのみ。當時西伯利政廳は細大の事務を以て悉く地方

の將軍に委任せり故に其事情に精通する能はず將軍の權力廣大にして非常の弊害を釀すに至る。

同年五月十三日エルマークはヲビ河を下りガトウィム城を陷れ七月十三日タフタ河を溯り窩克爾人を征服してハチユンカ河畔に劇戰し各部落を略取す。九月二十二日曾て庫程汗の部下たりしカラチア使をエルマークの許に派し援兵を請ふ。エルマーク其貳心あるを悟らず部下コリツオに命じて哈薩克兵四十人を率ゐて赴かしむ。カラチア直に之を捕へて悉く屠る。エルマーク、コリツオの爲に復讎の擧あらんとすカラチア之を知り西紀一五八四年三月二十四日俄斯札庫人及び韃靼人を敎唆して西伯利城を圍み其糧道を絶ち悉く哈薩克人を餓死せしめんとす。數日の後エルマーク哈薩克人を率ゐて城を出で敵兵を擊退し大に兵器糧食を獲て凱旋す。此年夏エルマークはイルチス河を溯りてカラチアを追擊し長驅してクルラロを圍みしも之を攻むる五日なほ降す能はず。即ち之を棄てゝシーシ河に出で曠原に進行しゝも遂にカラチアの踪跡を得る能はず西伯利城に歸る。

初めエルマークの西伯利を略取するや使を布哈爾に遣して通商を開き爾來布哈爾の商人は路をイルチス河に取りて西伯利城に往復す。此時風說あり庫程汗の兵布哈爾の商隊をイルチス河に襲はんとすと。エルマーク哈薩克人五十名を率ゐて直ちにイルチス河岸に向ふ。然れども韃靼人の形跡を見ざるにより兵を返してワガイ河嘴の附近に至る。時に日既に暮れしを以て河岸に野營す。適ゝ暴風雨起りしを以て哨兵を備へず。韃靼人之を探知し突然來りて襲擊す。エルマーク苦戰して一條の逃路を求めんとしゝも敵兵數多にして之を破る能はず。乃ち身を跳らしてイルチス河に投じ游泳して遁れんとす。然るに身體疲勞し且甲冑重くして意の如くならず激浪の爲に遂に水中に沒す。五十名中僅に一人死を免れて西伯利城に歸り戰況を報道す。城兵報を得て氣力沮喪し敢て其讎を報せんとするものなし。又韃靼人、窩克爾人、俄斯札庫人等は之に乘じ來りて露兵を攻めんとす。露國將軍グルホフは其力微弱にして支へ難きを察し八月廿七日哈薩克兵百五十名を率ゐ西伯利城を棄てゝ莫斯科に歸る。露兵の退去するや西伯利城は庫程汗の子アレイ之に居り後遂にセイヂヤクの據る所と爲る。

是より先西紀一五八四年露帝イワン四世殂し其子の代に至り翌五年マンスーロフ

を以て將軍に任し哈薩克兵百名大砲二門を附して之を西伯利に派遣す。マンスーロフの往路グルホフの歸路と其地を異にしゝを以てイルチス河に至りて初てエルマークの戰死を聞く。然れども時既に冬季に迫り兵を返す事能はず乃ち壘柵をイルチス河とトボル河との會點に築造して土人の來襲に備へ以て冬居の計を爲す。是をトボリスク砦と爲す。翌年グルホフの莫斯科に返るに及びて朝野初めて西伯利の慘狀を知り深くマンスーロフの安否を憂へ更にスキン及びミヤスニコフをして兵を率ゐて西伯利に向はしむ。七月スキン等トウラ河岸に出でヂンギトウラの古城址にチユメン府を新設して根據地となし先づ附近の土人を攻伐す。西紀一五八八年將軍チウルコフ、韃靼汗セイデヤク、カラチア等を西伯利府よりトボリスクに誘致して之を捕へ九月二十二日莫斯科に送致す。韃靼人遂に西伯利城を退去し以來此府は全く荒廢し住者なきに至る。

第三節　露國の西伯利略取

トム河流域大半露國の所有に歸しゝを以て西紀一五九〇年はじめて農民三十戸を西伯利に移しトボリスク府を以て全西伯利の首府とす。其後西紀一五九二年ベルイム砦を西紀一五九三年スルグト砦、ベリヨゾフ砦、ラブドルスク砦を、西紀一六〇一年マンガゼイ砦を建設し各地方土人の鎭撫及び毛皮徵收場となす。西紀一五九六年俄斯札庫人を鎭撫する爲ナルイム塞を建設し次でケーチ砦を置きしが收稅者の廉直ならざると收稅法の整頓せざるとにより土人の困難甚しく往々叛して此諸砦に迫る。西紀一六〇四年トム河岸に游牧しゝ韃靼人エウシト族の太陽汗毛皮稅の重きに苦み莫斯科に赴き露帝に謁して曰く若し我部下の毛皮稅を免除し其游牧地に塞柵を建設する事を得ば部下を擧げて露國の臣民と爲らんと。露帝之を許可しトムスク塞を置きて韃靼人及びキルキズ人の鎭撫に充つ。然れども當時の西伯利派遣の將軍は多く私利を營むものゝみなりしかば土人の心服を得る能はず。キルキズ人は此塞の薄弱なりしを侮り或は降り或は反し輓近に至るまで常に露國に抗抵し大に邊疆の害を爲せり。

西紀一四九八年莫斯科大公の血統絶え帝位の爭烈しかりしが西紀一六一三年露國の貴族（ボヤリン）等ミハイル、ロマノフを選みて帝位に即かしむ。是を現今露國帝室の鼻祖

とす。ミハイル帝即位の後先端典と條約を結び波蘭と休戰を約し西方の疆界全く平和に歸しゝを以て大に眼を東方の西伯利に注ぎエニセイ河域を略取するの計畫をなしケーヂ砦の戍兵を增加し以て其守備を嚴にす。西紀一六一八年露人ペートル、アリブチアに命じケーヂ砦の兵一部隊を率ゐエニセイ河岸に赴きエニセイスク砦を建設せしむ。アリブチア、ケーヂ河を溯り其上流に於て上陸し此河の水源とエニセイ河の間に於てコマロフ砦を建築し以て根據となす。西紀一六一九年通古斯人大擧して來襲しコマコフ砦を圍む。アリブチア急をケーヂ砦に報じ援助を請ひしがケーヂ砦の守將急に之に應ぜず。アリブチア已むを得ず急使をトボリスクに發し其援兵を得て稍く通古斯人を擊退し更に進みてエニセイ河岸に出でエニセイスク砦を建設す。此砦の建築成るや露國政府は訓令を將軍に下し土人の露國に歸化するものは温和に之を待遇し厚く保護すべき事を以てす。是より後西伯利土人の狀態は大に其面目を改む。

露將ドウベンスキー西紀一六二三年を以てエニセイスク砦を發しエニセイ河を溯り上流の地理を探求し同河とカチア河との會點にクラスノヤルスク砦を建築す。クラスノヤルスクとは紅巖の意なり附近の河中に紅色の巖石あり故に名く。時に西紀一六二八年なり。蓋し此砦を建設しゝは歸化せる土人を保護するにありしも其効なきのみならず新舊兩砦の毛皮稅徵稅區域を確定せざるより反て土人の困難を來せり。初め西紀一六二二年布哩雅特人三千餘カン河岸に來侵す。エニセイスク將軍ヤーコフ先部下を派して其兵勢を偵察せしめ西紀一六二七年哈薩克人四十名を以て一隊となしペルフイリエフをして之に將として布哩雅特人を征服せしむ。ペルフイリエフ、アンガラ河を溯り布哩雅特人の部落に侵入して交戰利あらず歸路トウングス河に於て又通古斯人の襲擊を受く。翌年露國はペケトウに命じアンガラ河の右岸タセーエヲ河嘴に對する所に於てルイビン砦を建設し之を根據として地方の通古斯人を攻服し且進みてアンガラ河を溯り布哩雅特人の事情を探偵せしむ。ペケトウ、ヲカ河嘴に近く布哩雅特人に會し毛皮を徵收し翌年エニセイスクに歸る。

西紀一六二九年前エニセイスク將軍ヤーコフ、バイカル湖南遠征の命を受け先エニセイクスに至りエニセイ河を航進してイリム河嘴に達し一隊を派してブグル

を之が將としレナ河の上流を偵察せしめ自ら餘兵を率ゐてアンガラ河の上流に進み布哩雅特人の銀鑛を探求す。蓋し露人の初めて布哩雅特を見るや婦人は皆銀製の裝飾品を有し兵器及馬鞍等も亦純銀を以て裝飾せるにより其富有なるを認め此擧あるに至りしなり。ヤーコフ進みてヲカ河嘴の近傍に至り布哩雅特人の襲擊を受け歸りてイリム河嘴に病死す。翌年エニセイスク將軍は布哩雅特人の俘虜を還附せんとしペルフィリエフに命じて哈薩克人を率ゐて其故鄕に護送せしめ歸途ヲカ河岸に木寨を建築せしむ。是露人が土人に對して好意を表せし始とす。思ふに其富を羨望し恩威並び施し以て速に之を歸服せしめんと欲せしが爲ならむ。西紀一六三一年モスコウイチヤン哈薩克人五十名を率ゐてエニセイスクよりヲカ河に赴き築寨工事を助く。工竣り布哩雅特人の一種族ブラートの名を取りブラート砦と稱す。此地エニセイ河域よりレナ河域に通ずる要衝にして毛皮稅徵收場として又布哩雅特人に對する前哨として歷史上の關係を有するに至れり。

前にレナ河の探檢に赴きしブグルが其上流の地に產する黑貂皮の優等なるを復命するや西紀一六三〇年エニセイスク將軍はガルキンに命じ哈薩克人三十名を率ゐて同河域に出で新砦を建築して通古斯人の毛皮稅を徵收せしむ。ガルキン翌年を以てイリム河域よりレナ河域に出でクタ河口に抵りウスチクート寨を建設せんとし未だ竣工せず。ペケトフ之に代り新寨を建設し又トクール河口に至りてトクール寨を建設し以て布哩雅人の襲擊を防ぎ通古斯人の毛皮稅を徵收す。此年マンガセイの哈薩克人はウイリユイ河岸の通古斯人を攻擊し進みて同河よりレナ河に航し雅克德人を服す。西紀一六三二年ペケトフ進みてレナ河を下りヤクートスク砦を建設し雅克德人より貢物を徵收す。西紀一六三五年哈薩克人はヲレクマ河に遠征し河口に一寨を搆へ之をヲレクミンスクと名く。西紀一六三八年ヤクートスク府を今の地に移し露人の根據とす。此年ヤクートスクの哈薩克人マクシム、ペルフィリエフ初めて黑龍江の探究を企圖しレナ河の支流ウイチム河を航し翌年ツイバ河に達す。西紀一六三九年露人は遠征して遂に西伯利極東なるラホータ海岸に達す。

西紀一六四〇年將軍ゴローウイン、ヤクートスクに赴任し翌年ワシリをして上レンスク砦を建設せしめ西紀一六四三年ボヤルコフに命じて黑龍江に向ひて遠征

せしむ。ボヤルコフ士卒百二十七名譯官二名鍛工一名を率ゐ鐵製の砲一門火藥一普度鉛八普度を携帶し六月ヤクートスクを發しレナ河よりアルタン河に出でウチュル河嘴に達し又進みてカナート河に出で舟を捨て橇に駕しスタノヲイ山脈を越ゑブリヤンダ河の上流に出でゼーヤ河岸に達し翌西紀一六四四年（元禎治）春初めて黑龍江に達す。茲に於て更に小舟を造りて黑龍江を下り松花江の會點を過ぎし後費牙喀人を征服しアムグニ河嘴附近に越年す。翌年江水の氷解するに及びて又小舟に乘じヲホータ海岸に沿ひて北航し三箇月の後ウヂ河口に達し又冬居す西紀一六四六年ウゲ河岸を發してスタノーヲイ山脈を越ゑマヤ河岸に出で新に舟を造りて之を下りアルタン河に出で又レナ河を航し秋季ヤクートスクに其歸る。ゴローウィンに復命して曰く過くる所の地タウル人並に費牙喀人の部落あり精兵三百以て露國の版圖となすべしと。ボヤルコフの黑龍江遠征は三年の星霜を經過して企圖を達し其間七千吉米餘の長程を通過す。露國が將來黑龍江の河城を占領するの基礎は實に此遠征にあり。

此時に當りエニセイスク將軍はペルフイリエフの報告を得て其實否を確定せんが爲コレスニークに命じ後バイカル地方に赴かしむ。コレスニーク途に布哩雅特人が上レンスク砦を圍むを聞きヤクートスク派遣の兵と共に砦兵を援け西紀一六四七年上アンガラ砦を建設す。部下の哈薩克人四名通古斯（トウングス）のクトウク汗と共に銀鑛產地を探險せんが爲セレンカ河に向ひ端なく蒙古圖兒海（トルカイ）汗の部落に入る。圖兒海汗來意を察し金銀少許を與へ且告げて曰く此地方は金銀を產せず皆支那人より得るものなりと。コレスニク報を得て自らエニセイスクに歸り更に莫斯科に至り遠征の顚末を報告す。是より先エニセイスク將軍は久しくコレスニクの動靜を聞かざるを以て西紀一六四六年ボハボウを司令官となし哈薩克人を後バイカルに派す。ボハボウ、バイカル湖南に至りコレスニクの圖兒海汗に使者を通じ知り圖兒海汗を介して庫倫（クーロン）に抵り車臣（チヨチン）汗に謁し初めて蒙古人の支那帝を奉ずるを知り車臣汗をして使節を莫斯科に派遣せしめエニセイスクに歸る。時にエニセイスクには後バイカル遠征隊の準備既に調ひガルキン六百名に首領となり西紀一六四八年夏バルグジン河口に至り新砦を建設し以て同地方攻略の根據地と爲す。

次てハバロフ黑龍江攻略の事あり露清の衝突漸く烈しきに至らんとするを以て以後侵略の事蹟は是を次節に叙述する事となし茲に一言哈薩克人の功績を評論せむ。夫れ西伯利の攻略は皆哈薩克人によりて成功しゝものなり。初めエルマークが西伯利を攻略して以來露國政府は將軍を派し地方の民政を管理せしむと雖も新疆土の攻略に至りては寸毫も企圖する事なく第十八世紀の初めに至るまでは悉く之を哈薩克人の爲す所に任じ政府は唯こ其彈藥糧食等を給與するのみ。哈薩克人は慓悍滑賊にして生業を爲すを好まず劫掠を以て一快事とす故に政府は陰に之を助け封豕長蛇彼の貪欲を恣にせしめたり。而して哈薩克人は其子孫相繼ぎて偉功を奏し遂に凡そ百年の間に黑龍江地方を除き西伯利全土を略取し露國の版圖をして東方に擴張せしむる事を得たり。蓋し政府が自ら攻略の勞を取らざりしは他なし明に哈薩克人の性質を洞察し其攻略の勇力あるを以て之を保護すれば却りて自ら攻略するに優れるを知ればなり。然るに第十八世紀の初に於て彼得一世が國政を改革し西伯利も又中央政府の干渉する所となりしかば哈薩克人の驍勇も亦利用するの道なきに至れり。經世家夫れ三思して可なり。

第四節　露清の衝突

露國の使臣初めて支那に到りしはイワン四世の時にあり。時に庫程（クチクム）汗西伯利城にありて露國に抗す。イワン四世西紀一五六四年（嘉靖四三）を以て哈薩克人を使者となし未だ聞知せざる諸種民の酋長に諭示せしめしに蒙古を經て遂に北京に達しゝと云ふ。已にして支那に於ては清朝滿洲の地に起り西紀一六四〇年前後に於て喀爾喀（外蒙古）索倫（黑龍江）諸部を服す。此時に當り露人も亦西伯利の各地を略取し外蒙古の車臣汗土謝圖汗（チョチン　トシエット）二部と接壤す。因て蒙古人露國襲する所の小銃を得て之を清帝に献ず。露清兩國衝突此時に始まる。而して兩國兵士の衝突は初てハバロフの黑龍江遠征の時に起る。

ハバロフはじめ農業及び製鹽業に從事し人となり沈毅にして大略あり。ポヤルコフが黑龍江探檢の報告を聞き始めて遠征の志を起し上書して露帝の許可を得エニセイスクに於て訓令幷に食糧衣服を給與せられ西紀一六四九年（順治六）三月十六日義勇兵七十名を率ゐヤクートスクを發す。路をヲレクマ河及トウキル河に取

りスタノヲイ山脈を越へ翌西紀一六五〇年順治七黒龍江に達す。十一月十日索倫酋長の據守せる雅克薩に達し正午より日沒に至るまで交戰して酋長を破り進みて雅克薩を占領す。翌日又他の部落を攻めて之に克ち兵を留めて雅克薩城内に冬居せしめハバロフ自らヤクートスクに歸り將軍に謁して援兵を請求す。西紀一六五一年順治八春狙擊兵二十一名大砲二門の給與を得義勇兵百十名を募集して再び黒龍江に出征し江岸を進行して雅克薩河口に到り此地に阿爾巴青城を建設す。乃ち江流に從ひて東進し行く索倫各酋長の居城を破り遂に烏蘇里江の會點に達す。此地阿槍部の一大部落あり其城を略取して冬居所となす。

阿槍人は露兵の强猛にして敵すべからざるを以て滿洲に赴き應援を請ふ。清國の都統兵を寧古塔に募集し寧古塔の章京東色をして露兵を攻擊せしむ。海色滿洲兵二千人を率ゐ大砲八門小銃三十挺破壁工具十二箇を携へ黒龍江岸に來り阿槍村及び土撒爾村の瓦爾喀人を助け西紀一六五二年順治九四月五日烏札拉村に迫り砲擊す。露兵之に應じて砲戰し日暮に及ぶ。時に滿洲兵は破壁工具を用ゐ城壁を穿ちて侵入す。ハバロフ自ら率先して奮鬪防戰し遂に滿洲兵を擊破して之を退け敵兵六百七十名を擊殺し大砲二門を掠奪して大に糧食を獲たり。翌西紀一六五三年順治一〇八月露國政府の派遣せる援兵其將ジノーウイと共に莫斯科より黒龍江に來りハバロフに會す。ジノーウイ哈薩克人をして農業を起して自ら糧食を求めしめんと欲し其掠奪を禁ず。哈薩克人服せず。西紀一六五四年順治一の初ジノーウイ黒龍江地方哈薩克人統轄の權をスラバノフに委ね自らハバロフを伴ひ莫斯科に歸る。ハバロフの莫斯科に歸るや政府の待遇甚だ厚く功を以て貴族に列す。此年五月スラバノフ糧食を求めんと欲し黒龍江を下りて松花江の會點に赴きしに清國都統明安達禮の兵に破られ還りてクマラ河嘴を守備す。

是より先エニセイスク將軍バシコフは哈薩克人百名を以て遠征隊を編成しペクトフを以て隊長となしイルゲン湖岸の通古斯人を征服せしむ。西紀一六五二年六月十四日ペケトフ、エニセイスクを發し八月ブラート砦に達し布哩雅特人を擊破して前進す。翌春バイカル湖南の屯營を發しセレンカ河を溯りヒロック河嘴より同河に移りて航進し十一月六日イルケン湖岸に達しイルケン砦を建設す。次で十夫長ウラソフをして什耳喀河の右岸尼布楚河嘴に對する地に至り要塞を建設せ

しめ西紀一六五四年ペケトフ自ら新砦に赴く。同地の土人は通古斯人にして罕帖木兒汗に屬しゝが是に於て罕帖木兒汗露人の攻略を目的とするを知り布哩雅特人及び通古斯人を率ゐアルグニ河を越へて滿洲に移住し清國の保護を請ふ。其後ペケトフ糧盡き哈薩克人逃亡するもの多きを以て殘兵を率ゐて黑龍江に赴きてステパノフに合す。通古斯人はペケトフの去りしを見てシルカ河岸の砦を毀つ。西紀一六五五年（順治一二）三月清國の都統明安達禮滿洲兵一萬を率ゐ砲十五門小銃數千挺を以てコマル寨に來りて之を圍み四月一日砲擊を開き同五日突擊して之を拔かんとす哈薩克兵苦戰して之を拒ぐ。既にして滿洲兵糧食の缺乏せるを以て圍を解きて其兵を回す。翌一六五六年（順治一三）ステパノフ黑龍江を下りて松花江に達し瑚爾哈河を溯りて寧古塔に赴き多量の糧食等を掠奪してコマル寨に送致し又松花江より黑龍江を下り東進してアムグニ河嘴の前面なる費牙喀人の住地に達しコソゴルに冬居し翌五七年黑龍江を溯りてコマル寨に歸る。然るに江岸の住民は既に清國の命を受け滿洲の內部に移りしを以て到る所兩岸人烟を絕ち又掠奪を恣にする能はず。此頃ヤクートスク將軍其部下バイコフを以て使節となし（西紀一六五四）北京に至らしめ露帝又使臣を清國に派遣せしが（西紀一六五六）絕ゐて邊界の事に及ばず而して共に和親を通ずるの目的を達せず。

時にエニセイスク將軍パシコフ黑龍江略取の策を建て尼布楚將軍に補せられ兼て黑龍江地方の統轄の命を受く。西紀一六五八年（順治一五）パシコフ先尼布楚に達し此地を以て根據となし後に黑龍江に赴きステパノフに命じ滿洲に入りて掠奪をなすを禁じ哈薩克兵をして專ら農事を勤めしむ。ステパノフ農事を好まず曰く長官の命と雖も從ふ能はずと遂に其部下五百の哈薩克兵を率ゐて復た黑龍江を下り松花江に出で滿洲に侵入して村落を劫掠す。時に寧古塔の都統沙爾呼達は滿洲兵船四十七隻に大砲小銃を載せて來り攻む。ステパノフ松花江と瑚爾哈河の間に於て劇戰して部下二百七十名と共に戰歿し殘兵皆ヤクートスクに退去す。其內尼布楚に遁るゝもの十七名ステパノフ以下の戰死をパシコフに報ず。其後康熙元年（一六六二）清朝奉天將軍寧古塔將軍を置き同十年次て（一六七一）後者を吉林に移す。

西紀一六六五年（康熙四）チエルニーゴフスキー雅克薩城を恢復す。初チエルニーゴフスキー罪を得て西伯利に放謫せらる。イリム將軍ヲブホフ其妻を見て大に喜び之

を奪ふ。チエルニーゴフスキー忿恚朋友と共にヲブホフを暴殺して其財產及官物を掠奪す。更に有志者を募集して共に黑龍江に出征し雅克薩城を恢復して之に據る。乃ち土人を攻服して毛皮稅を徵收し之を尼布楚に送りて雅克薩城恢復をバシコフ將軍に報じ前罪の赦免を請願す。西紀一六六六年（康熙五）バシコフ、セレンカ河の谷地にセレンギンスクを建設す。西紀一六六七年（康熙六）通古斯汗罕帖木兒清國官吏の待遇を屑しとせず再び滿洲を退去しアルグニ河を渡りて露領に復歸し露國に歸化してインゴタ河域に住す。西紀一六六八年（康熙七）尼布楚將軍アシンスキー、ウダ河域に下ウヂンスク砦を建設す。アシンスキーは又其部下ミロウアノフを以て使節となし西紀一六六七年、西紀一六七〇年（康熙九）の兩回北京に至り互市を請ひしが其目的を果さず。此頃清帝も亦使を莫斯科に遣し罕帖木兒を交付し且黑龍江の各地を抄掠するを禁せん事を請求す。當時莫斯科には一人の清國の文字を解するものなし。乃ちスパハリを使節に任じ境界の紛議を確定し貿易を開き俘虜を交換せしめんとす。西紀一六七五年（康熙一四）スパハリ清國の使と共に北京に達し國書を奉呈しゝが清國政府罕帖木兒引渡を終るにあらざれば一條件をも採用する能はずと明言し斷然拒絕せしを以て談判終に成らず。

西紀一六七七年（康熙一八）尼布楚將軍はゼーヤ河の上流を以て雅克薩城策應の地となし上ゼーヤ寨を建設し次で西紀一六七九年（康熙一八）セリムヂジア及びトントンの二寨を建設す。西紀一六八一年（康熙二〇）哈薩克兵は雅克薩城より遠征して黑龍江の下流に赴きアムグニ河域にウスチデリン寨ニメラン河域にウスチニメラン寨を建設しトグール河域にトグール寨を建設す。此時に當り黑龍江の下流は既に露國の版圖に歸しゝを以て雅克薩城は第一の要地となれり。是より先西紀一六六二年薩彥山の南部唐努烏梁海の阿兒靑汗の露國に臣服せるあり。當時露國と蒙古との疆界は殆ど現今の位置に及びしと雖も薩彥山及阿爾泰山の地方には喀爾喀人キルギス人ソイヨト人カルムイク人等との葛藤未だ靜定せず。又イルチス河畔に於ける國疆は準噶爾人及カラキルギズ人の住地に近接するを以て屢其襲擊を受け殖民を起すに苦めり。又極東に於ては西紀一六四九年已にアナドイル河岸にアナドイル寨を建設しラムト人ユカギル人チユクチア人を攻服せしも未だ堪察加を略取するに至らず。

第五節　尼布楚條約

西紀一六八二年康熙二一清帝支那本部大半平定せるを以て副都統郎坦等に命じ鹿獵を名とし兵を率ゐて黑龍江畔に至り雅薩克城の形勢を偵察せしむ。郎坦等復命して露國兵員の頗る寡少なるを報ず。是に於て清帝雅克薩攻擊の策を定め先戶部尚書伊桑阿に命じ寧古塔に赴きて船艦を製造せしめ墨爾根、齋々哈爾二城を築き十驛を置き薩布素を以て將軍となし愛琿に駐劄せしむ。黑龍江將軍又外蒙古車臣汗をして露國との通商を絶たしむ。翌年露人ムイリニク、雅克薩より兵營を黑龍江の下流に移轉せんとし滿洲兵船に圍まれて部下と共に捕虜となる。西紀一六八四年康熙二三清兵雅克薩に抵り招降せんとす戍兵可かず田稼を刈りて之を苦む。西紀一六八五年康熙二四都統澎春等水軍五千陸軍一萬大擧して雅克薩城に抵り先づ使を遣して退去を說諭す。城將トルブヂン四百五十の寡兵を以て城中にあり清使を謝絶して敢て屈せず。六月二十四日五月二十五日。清兵野砲百五十門攻城砲五十門あり城中に向ひて砲擊す。トルブヂン勇を奮ひて防戰しゝも兵器僅に粗惡なる大砲三門小銃三百挺あるに過ぎず且衆寡懸隔勢支ふる能はず兵を引きて尼布楚に退去す。清兵城を毀ちて愛琿に還り俘虜を北京に送致す。後清帝俘虜を赦して臣民となし露西亞佐領を編成す。其後裔今なほ北京に還存すと云ふ。

トルブヂンの尼布楚に退くや適ち陸軍大佐ペイトン哈薩克兵六百名を率ゐて莫斯科より來援す。トルブヂン乃ちペイトンと共に復雅克薩城の舊址に到り土壘を築造して防禦の備を爲す。西紀一六八六年康熙二五七月清兵凡そ八千人大砲四十門を以て再び雅克薩城を圍む。城兵僅に七百三十六人に過ぎず防戰大に苦む。九月十三日清兵進擊して一擧城兵を蹂躪せんとす城兵善く拒ぎ之を擊退す。此役トルブヂン彈丸に中りて斃れペイトン代りて城兵を指揮し更に屈するの色なし。此を以て十二月初旬遂に長圍の計を爲す。時に城兵皆穴居しゝを以て濕氣に侵され壞血熱に罹り斃死するもの頗る多し。將軍薩布素之を聞き醫師を城內に送りて治療せしめんとす。ペイトン辭して受けず且城內糧食の闕乏せざるを示さんが爲麥一普度を送りて之を答謝す。而かも城兵或は戰死し或は病死し殘存する者僅に六十六人に過ぎず落城旦夕に迫る。而して露清媾和の議あり。西紀一六八八年康熙二七八月三十

日清兵雅克薩の圍を撤し愛琿及び墨爾根に歸る。

初め和蘭の貢使北京に在り露西亞と隣國と稱す乃ち書を蘭使に托し露帝に轉達す。時に露帝はミハイル(西紀一六四五年殂す)の子アレクシス西紀一六七六年を以て殂し諸子相和せず彼得一世位にあるも未だ實權を有せず。且西隣諸國と事あるを以て清國と和するに決し海道の往還迅速九月にして復書到る。時に康熙二十五年九月也。曰く使臣を遣し邊に詣り界を定めむ請ふ先雅克薩の圍を釋けと。翌西紀一六八七年(康熙二六)露帝ゴローウィンを以て特命全權公使に任ず。ゴローウィン、セレンギンスクに達し喀爾喀の俄札羅汗の來襲せるに會し擊ちて之を退け同地を以て両使會合の地となし其來着を清國北京に報ず。清帝内大臣索額圖、都統佟國綱、尚書阿爾尼等を以て公使に任じ張鵬翮を參贊とし北京在留宣教師張誠(Gerbillon)徐日昇(Pereira)を以て隨行員に充つ。索額圖北京を發してセレンガ地方に赴かんとし途に準噶爾兵と喀爾喀兵と戰鬪するの報を得清帝の命を以て喀爾喀の地に駐り索羅希を以て使となし書をゴローウィンの許に送り道、梗塞するを告ぐ。此使は西紀一六八八年(康熙二七)七月十日を以てセレンギンスクに達しゴローウィンが已に使を北京に遣しゝを復命す。索額圖乃ち歸途に就く。

西紀一六八九年(康熙二八)清帝はゴローウィンがセレンギンスクより尼布楚に赴くべきを報せゝを以て再び索額圖等に命じ同地に到り會議せしむ。且使を愛琿に遣し都統郎坦に命じて曰く約一萬の兵を發し水陸並び進みて尼布楚に向ひ索額圖を援護し一朝急あるに際せば直に露人を屠殺せよと。八月二日索額圖尼布楚に達し砦外の平原に駐屯す。ゴローウィンは八月十二日を以て來着し清國の兵員多きを見て危懼の念を懷く。八月二十四日尼布楚城外四百二十七米突の地に天幕を張り兩國公使の會議場に充つ。露國公使は副使尼布楚將軍ウランフと共に書記を從へて會場に臨み清國公使は自餘六名の全權委員と共に宣教師を率ゐて來會す。兩國の兵各二百餘刀槍を持して天幕の兩側に整列し各公使を護衛す。露國公使發議して曰く自今兩國の疆界は黑龍江を以て之に充て江の以北は露領となし以南は清領となさむと。清國公使曰く東は雅克薩城より西は尼布楚及びセレンギンスクに至るまで悉く之を清國に讓與すべしと。翌日清國公使は少く前日の要求を讓り尼布楚を以て分界に充てん事を發言せしも露國公使之を以て不當なりとし議熟せ

ず。爾後正式の會議を開かず專ら宣教師をして居中斡旋せしむ。

索額圖等の北京を發するや清帝諭して曰く露國公使尼布楚を懇請せばアルグニ河を以て界に充つべしと。二十九日清國公使アルグニ河岸のアルグニ寨を左岸に移轉せん事を請求しゝも露國公使斷然之を拒絶しゝかば宣教師の策を納れ談判を中止し尼布楚を圍まんとす。露國公使已むを得ず清國公使の要求を容れアルグニ河の右岸及びゴルヒッア河の一線を讓與す。爾後三日清國公使は更に條約書を作り兩國の疆界を以て後貝加爾よりチウコット岬に至る一帶の山脈となす。露國公使怒りて答へず宣教師も亦其不可なるを說く故に其意に從ひて之を改む。疆界の談判已に調ひ次に紛議の一原因たる罕帖木兒の事に及ぶ。是より先西紀一六八五年（康熙二四）三月二十八日露國政府は罕帖木兒の爲に家屋を尼布楚に建築し罕帖木兒は亦其の父と共に西紀一六八七年（康熙二六）を以て莫斯科に赴き希臘教徒となり名をバーウォルと改む。清國公使は此等の事實を聞きて强ひて罕帖木兒の交付を請求せず。

西紀一六八九年（康熙二八）九月九日兩國の公使其國語を以て記する所の條約書に羅甸語の譯文を副へ互に交換す。其羅甸語の譯文を加へしは條約書の文意相異なる事ある時之に據りて斷定せんが爲也。此條約は七條より成り尼布楚條約と謂ふ。即ち支那の歐洲諸國と條約を結ふ嚆矢とす。其要領を擧くれば疆界を定むる事は第一第二兩條に在り。第一條はゴルヒッア河及びスタノヲイ山を以て界となし山南黑龍江に注ぐ溪河は清國に屬し山北は露國に屬する事を揭げ第二條はアルグニ河を以て界とし右岸は清國に左岸は露國に屬し右岸眉勒爾喀河口の房舍を左岸に移す事を記載す。其他は雅克薩城を毀つ事、猥りに國界を越ゆるものを處分する事、逃亡人を還付する事、通商を許す事等にして此年の秋より之を實行するものとし、滿、漢、蒙古、羅甸、露西亞五體の文字を以て之を勒し界碑をゴルヒッア河の東岸並にアルグニ河の南岸に建設す。

此時に當り露國は清國の勢力に抗する能はず向來露人が險を冒し兵を損して占領せる西伯利極東の一大地を擧げて清國に讓與せり。是に於てオホート海に通ずる東洋の一大航路即ち黑龍江は全く清國人の封鎖する所となる。是より後六十年間露清兩國の狀態を推考するに露國は唯其公使及び支那語學生を北京に駐劄せ